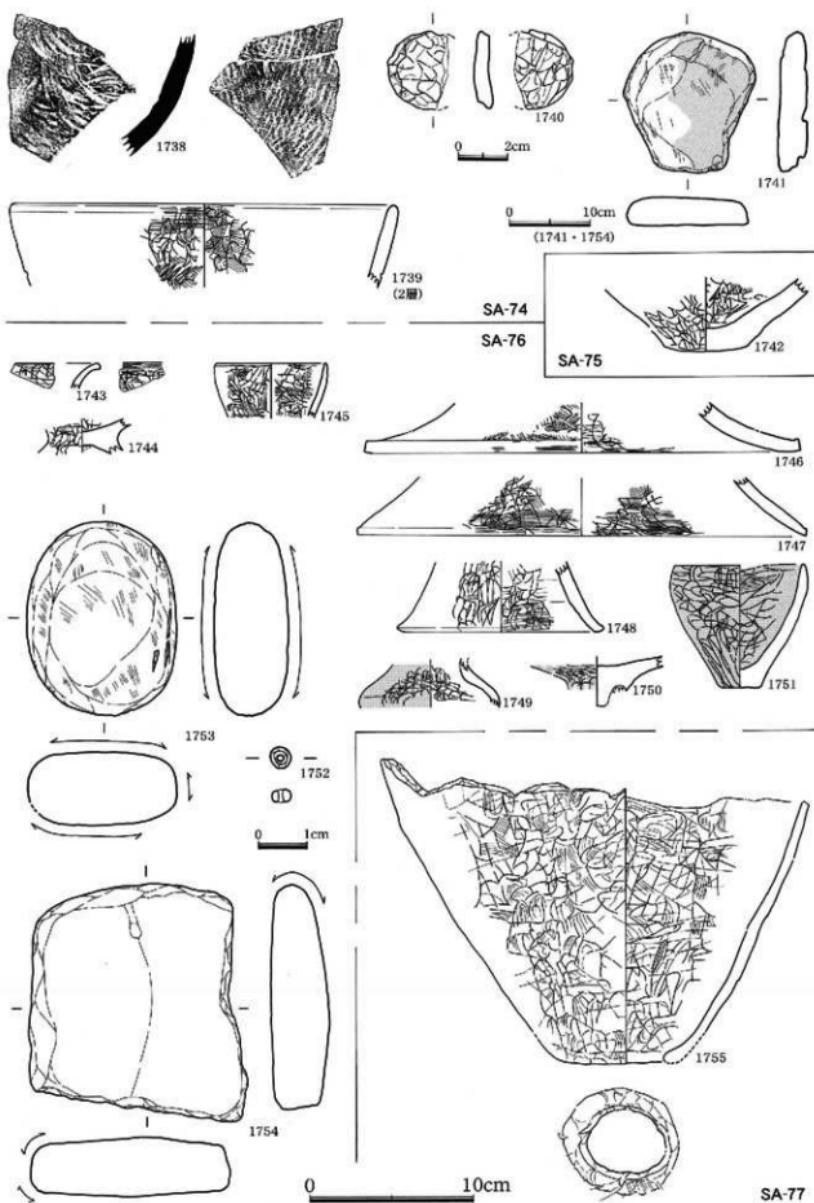
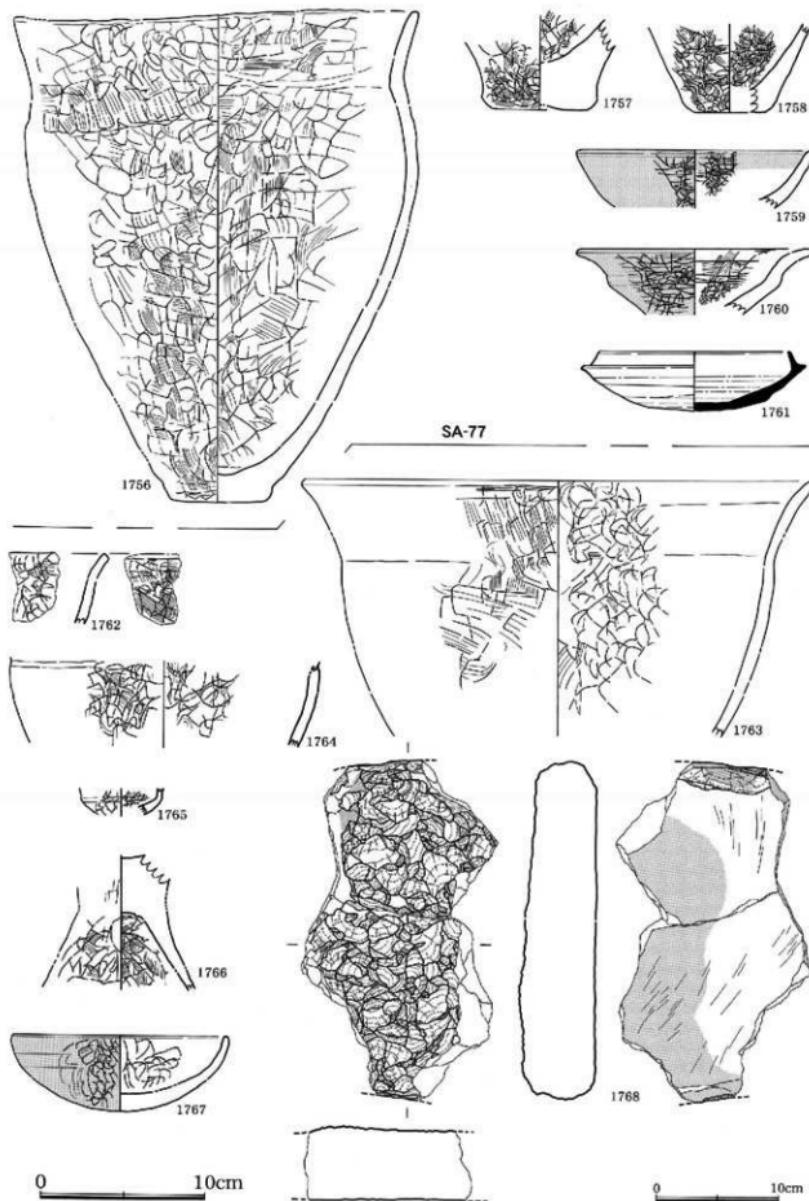


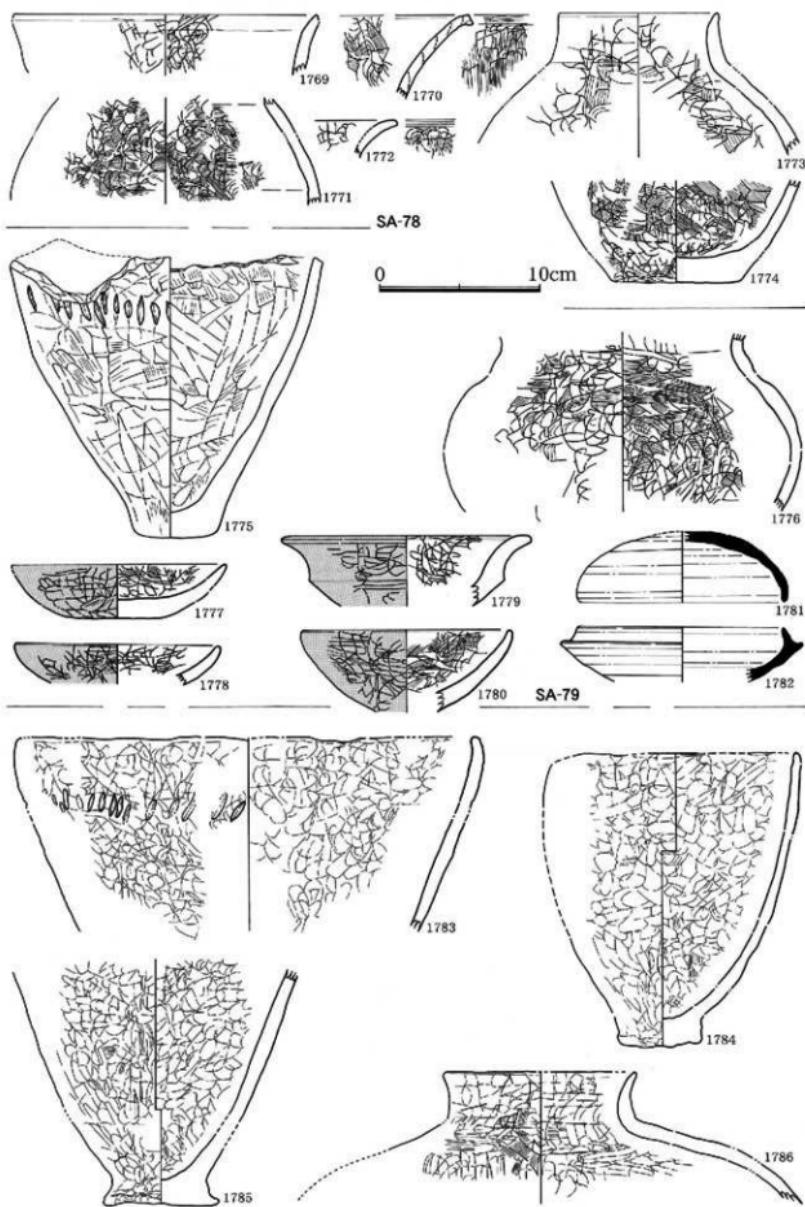
第196図 SA-74 出土遺物実測図(2)



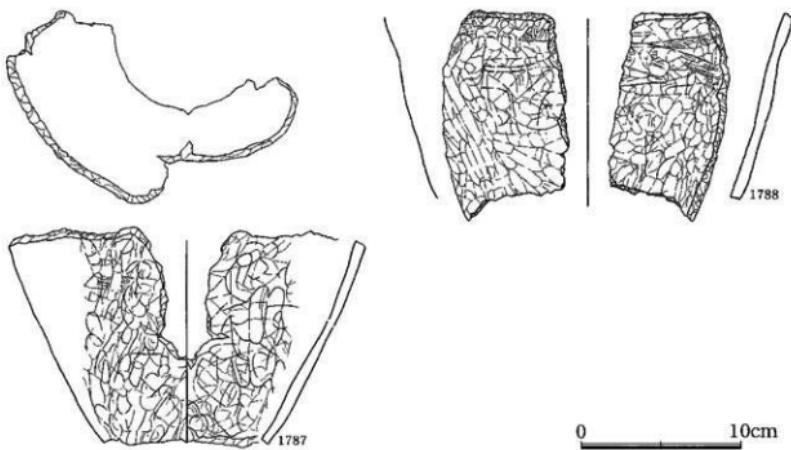
第197図 SA-74 出土遺物実測図(3), SA-75~77 出土遺物実測図(1)



第198図 SA-77 出土遺物実測図(2), SA-78 1a層出土遺物実測図



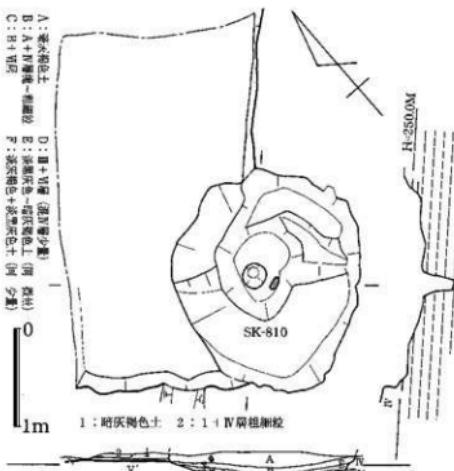
第199図 SA-78 1b層, SA-79-80 出土遺物実測図(1)



第200図 S A-80 出土遺物実測図(2)

S A-78 (第191図)

Ⅲ区とⅣ区にまたがり、77号住居と898号土坑、古代の124号溝に切られる、直径7.02~7.26mの円形住居である。外区の覆土は7~15cm遺存し、内区はさらに14~20cm低くなる。主柱穴は、直径24~44cm・深さ44~60cmの4本で、内区の肩部に穿たれる。貼り床は4~18cmの厚さで、外区が厚い。炕跡は、検出できなかった。



第201図 S A-81・SK-810 遺構実測図

覆土から、主として4世紀後半~5世紀前半と思われる土器片302点のほか、被熱・表皮の剥け・線状使用痕のある鉄床石(1768)の破片(2片が接合)が出土しており、5世紀後半までの可能性がある。

S A-79 (第192図)

77号住居の1.4m南東に位置した、長さ3.6~4.2m・幅3.8m以上の歪な隅円方形と推定される。北東部は近現代の切土によって楕形が消失しているが、幅4.2m程と推定される。覆土は2~8cm程遺存し、土層的には40~50cmの削失が推定される。主柱穴は壁面と並行しない、直径18~30cm・深

さ16~55cmの4本の様に見えるが、P1と3、P2と4の規模が相似することから、2本柱の建て替えとみるべきであろう。中央には、口縁部を打ち欠いた壺(1775)を使用した土器埋設炉がある。貼り床は僅かで、凹みを埋めた程度である。

覆土から、土師器片85点、須恵器片6点等が出土したが、図化できたものは僅かである。6世紀後半である。

#### S A-80 (第193図)

79号住居の南東8.5mに位置し、上位を125・128号溝に、北東壁を近現代の切土によって削失する。長さは3.2~3.44m、幅は現存2.7m(推定3.0m)の隅円長方形である。覆土は、2~4cmが遺存し、50cm程の削失が推定される。主柱穴は短軸方向の、直径22~28cm・深さ9~15cmの2本柱(P1・2)である。中央には、長径34cm・短径30cm・深さ20cmの掘り込みがありがあるが、焼土や炭化物は頗著でない。

覆土から、土師器片69点、2層から2点出土しているが、図化できたものは僅かである。柱穴P1には壺の胸部分(1787・1788)で炉を築いたような状態で出土したが、焼土や炭化物は混在していないので、魔絶後に流入した可能性が高い。3世紀後半頃か。

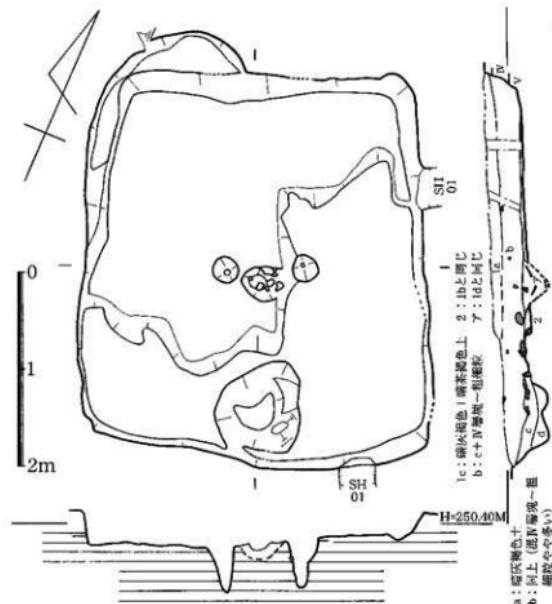
#### S A-81 (第201図)

北東面は舗装道路の擁壁に、北西面は近現代の切下、東南部は後世の楕円形土坑によって削失し2×3.6m程が遺存する。覆土は僅かに6cm遺存していたが、土層的には、40cm程の削失が推定される。主柱穴や壁溝・炉は未確認であるが、厚さ2~3cmの貼り床がある。

覆土から、土師器片104点のほか須恵器片1点が、2層から土師器片8点が出土したが、図化できたのは僅かに2点である。4世紀代で、須恵器は混入と思われる。

#### S A-82 (第202図)

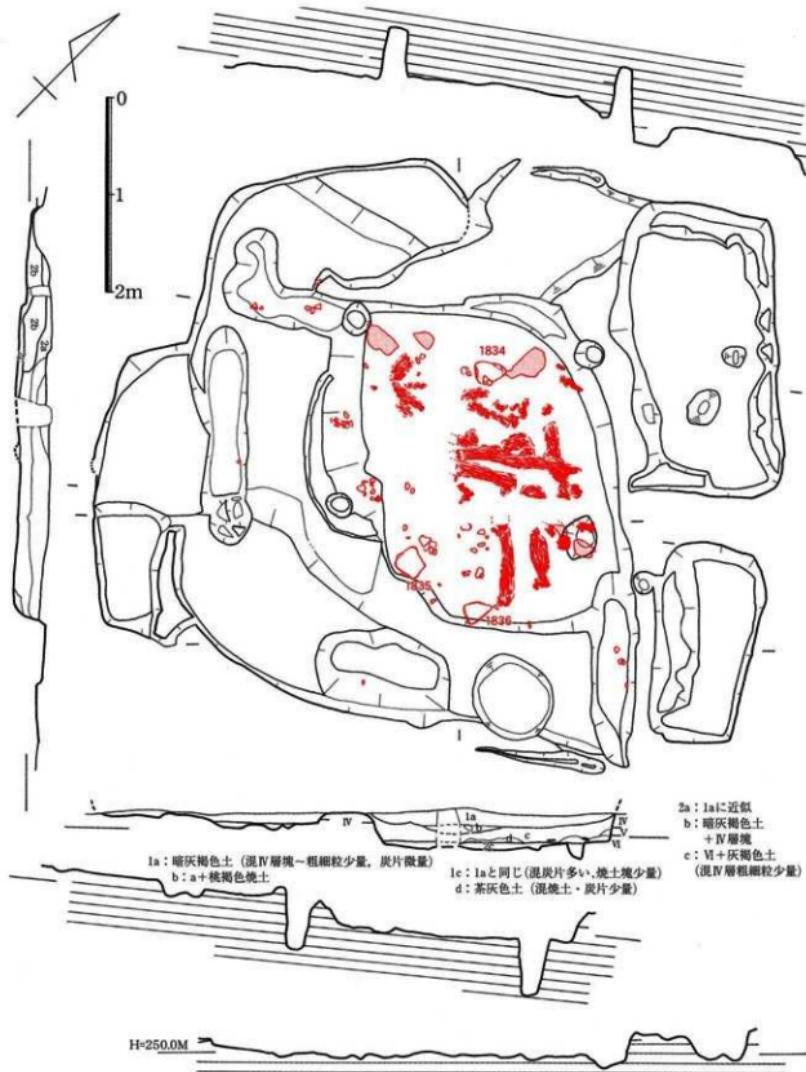
周溝状造構(SH-01)を切る、長さ3.86~3.98m・幅3.1~3.6mの隅円長方形の、北西部に奥行き22~41cmの張り出しがある。覆土は20~34cm遺存するが、土層的には



第202図 S A-82 造構実測図

10cm程の削失と推定される。主柱穴は、直径24~28cm・深さ46~50cmの2本で、その間には、土器片を数点敷いた、長径50cm・短径36cm・深さ16cmの掘り込み炉がある。

覆土から、土師器片1054点のほか、須恵器片5点、ガラス小玉1点(1816)、被熱した台石1点



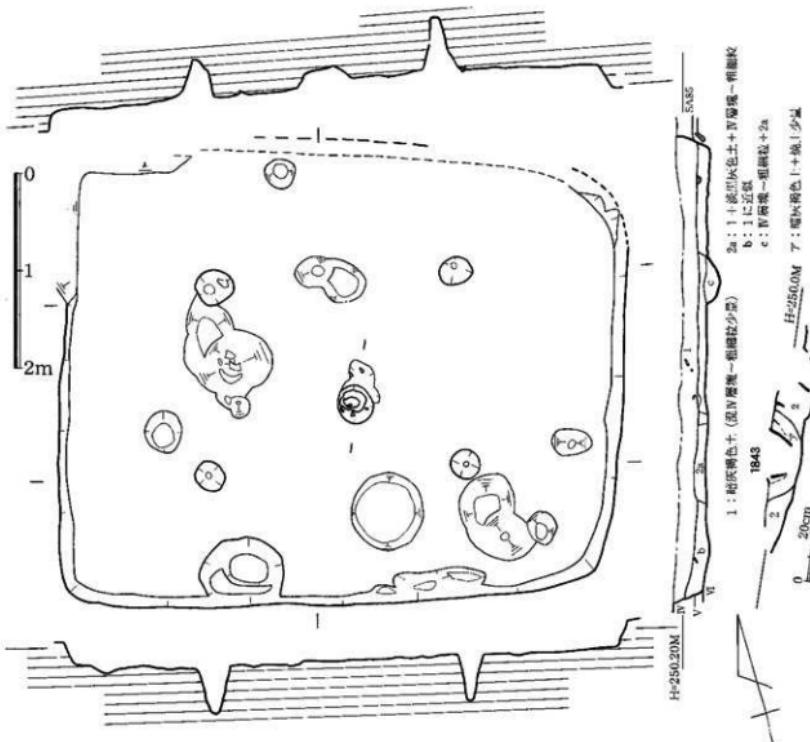
第203図 SA-83 遺構実測図 アミ目は焼土

等が、2層から土器片12点が出土している。6世紀後半～7世紀前半である。

#### S A-83 (第203図)

周溝状遺構の9m南に位置し、西～南側を天地返しによって深く削失した、最大長7.05m・最大幅6.20mの方形基調の間仕切り住居である。間仕切りの幅は不統一で、北面は1.4m、西面は1.7m、南面は1.45m、東面は0.57～0.46mで最も狭い。外区の覆土は10cm程が遺存するが、土層的には20～30cmの削失が推定される。内区の覆土は厚さ30cm、貼り床が2～8cm程施される。主柱穴は、直径22～36cm・深さ50～75cmの4本で、内区の肩部と底面に長方形に配置されている。内区底面には、被熱した台石3点と、板状炭化材・焼土が出土した。板状炭化材は、住居廃絶後の放火によるものと思われる。床面中央部には、炭と焼土混じりの層が直径63cmに広がり、地床炉があったようである。間仕切りされた小部屋は底面荒掘り後に貼り床が施され、平坦になっている。

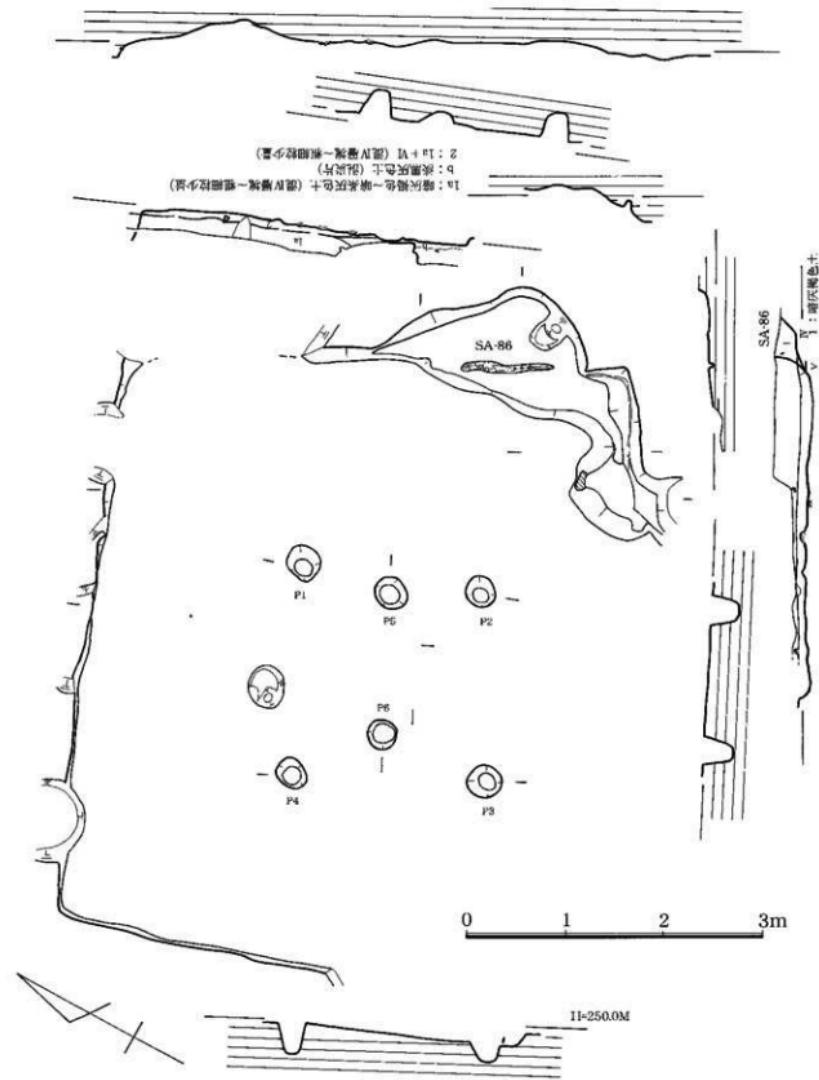
覆土から、弥生時代終末頃の土器片が286点、2層から7点出土したが、図化できたのは少ない。



第204図 SA-84 遺構実測図

S A-84 (第204図)

83号住居と30cm離れた位置で、85号住居を切る、長さ5.4~5.6m・幅4.6m程の隅円長方形を呈する住居であるが、北壁の境は明瞭ではない。覆土は、13~18cm遺存するが、土層的には20cm程の



第205図 S A-85-86 遺構実測図

削が推定される。

主柱穴は、直径28

~40cm・深さ40~

55cmの4本で、中

央やや南東寄りに、

口縁部と底部を打

ち欠いた甕(1843)

を使用した土器埋

設炉がある。貼り

床は全面に、8~

16cmの厚さで施さ

れている。

覆土から、土師

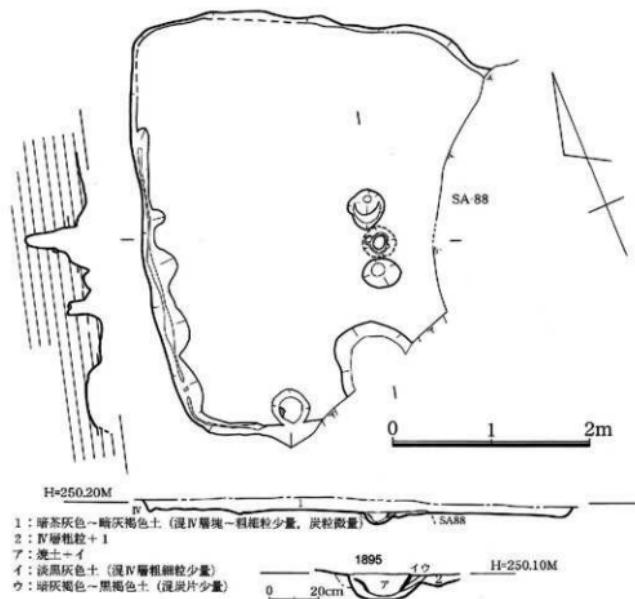
器片1159点のほか、

須恵器片11点、高

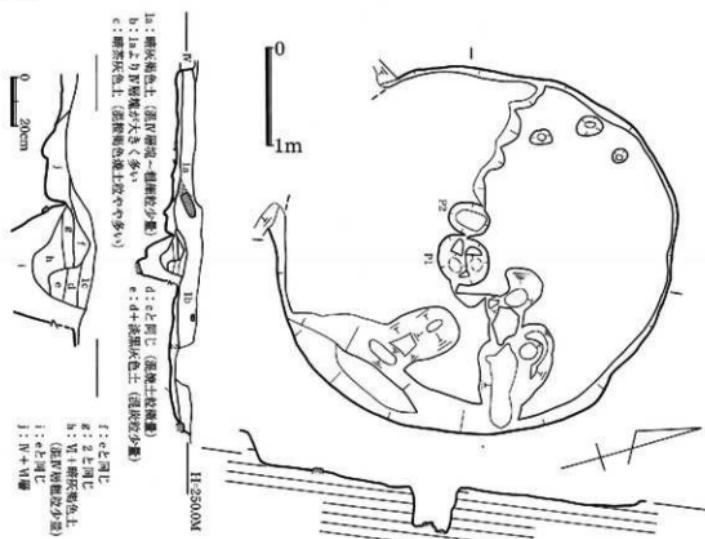
坏転用輪の羽口・

鉄鎌・手持ち砥石

各1点、台石2点



第206図 S A-87 遺構実測図

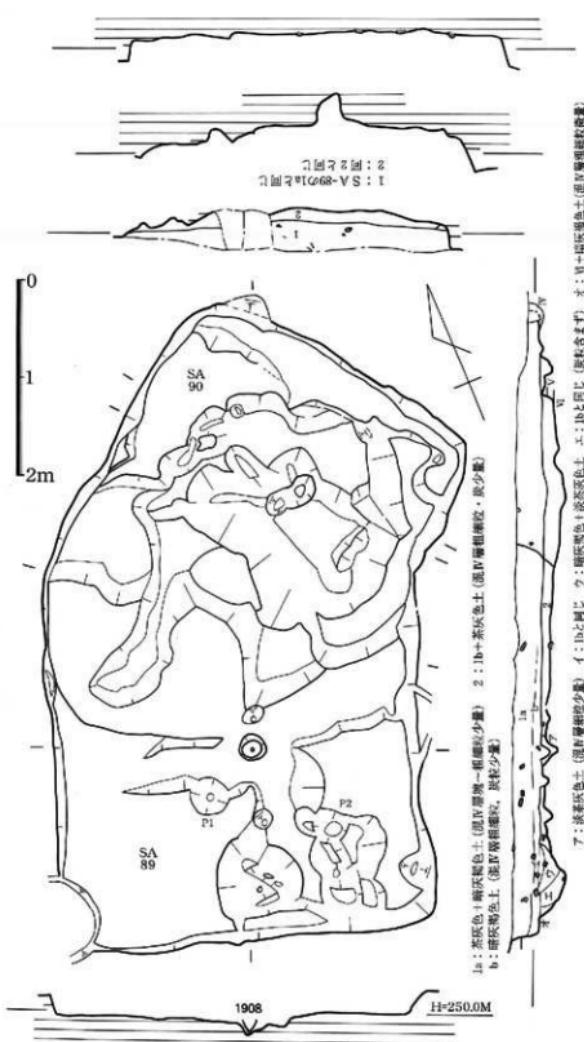


第207図 S A-88 遺構実測図

が、2層から土師器片39点が出土している。7世紀前半である。

#### S A-85 (第205図)

86号住居の殆どを切る、長さ6.4m・幅5.2mの長方形を呈する住居である。覆土は、14~26cmが遺存し、土層的には10~20cmの削失が推定される。主柱穴は、直径26~32cm・深さ20~30cmの4本



第208図 S A-89-90 遺構実測図

(P 1~4)で、柱間に  
は、直径26~30cm・深さ  
28cmの初期の2本柱(P  
5・6)がある。初期の  
住居の規模は、不明であ  
る。炉跡は確認されない。

覆土から、土師器片805  
点のほか、須恵器片1点、  
台石1点が、2層から土  
師器片238点が出土して  
いるが、図化できたもの  
は少ない。5世紀前半頃  
で、須恵器は混入と思わ  
れる。

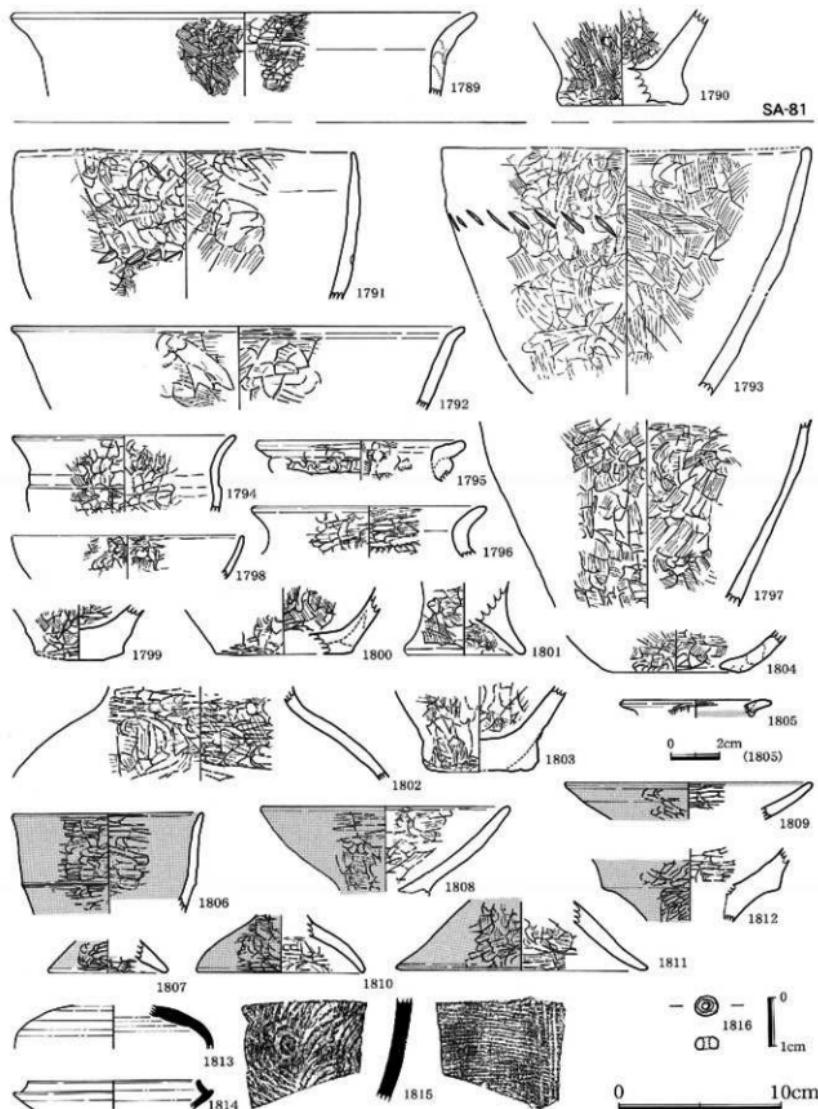
#### S A-86 (第205図)

長さ1.9m以上・幅1.1  
m以上・深さ16cmの覆土  
が遺存し、2層と推定さ  
れる掘り込みが僅かに確  
認できたことから、住居  
の可能性があると判断し  
た。覆土から、土師器片  
36点が出土したが、1点  
のみ図化できた(1890)。  
時期不明。

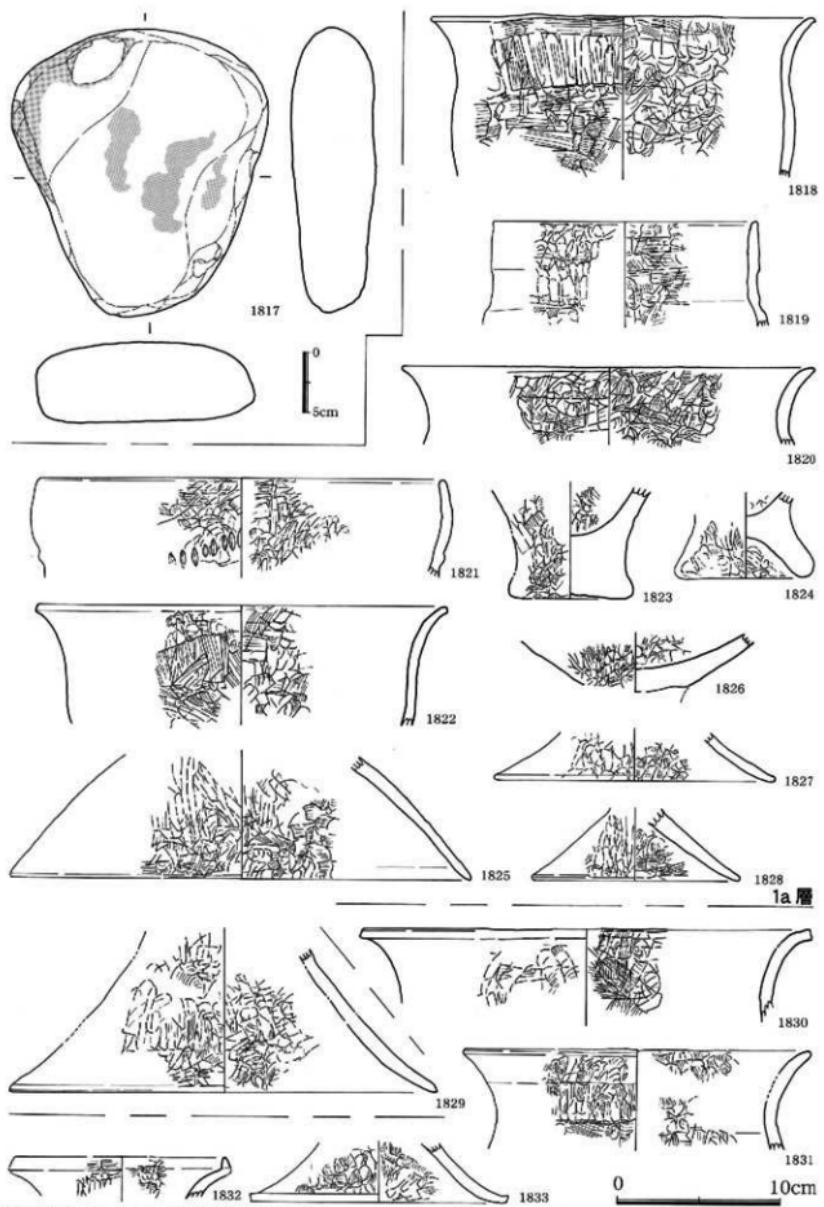
#### S A-87 (第206図)

85号住居に切られ、88  
号住居を切る、長さ4.3  
m・幅3.7m以上の隅円  
方形と推定される。覆土

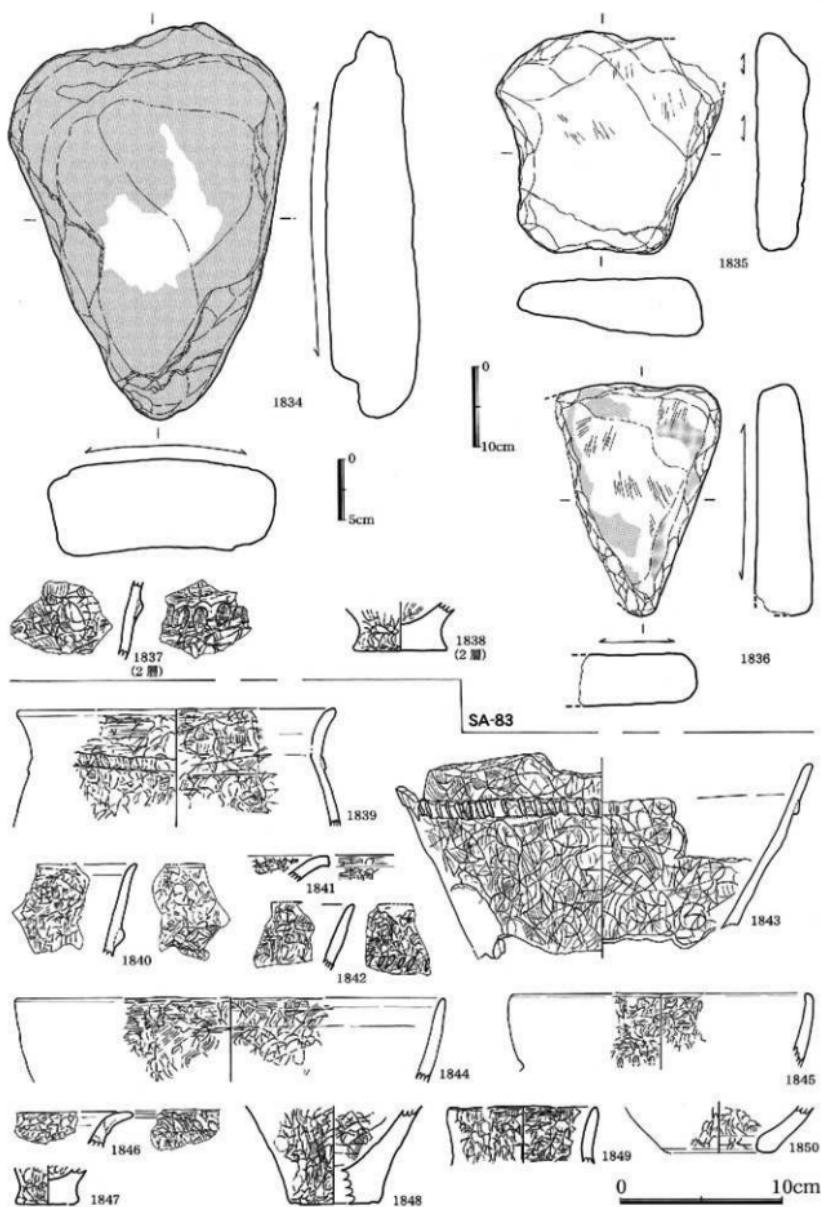
は8~14cmが遺存し、土層的には20cm程の削失と推定される。中央東寄りには、直径30~40cm・深さ30~60cmの主柱穴2本があり、その間に、口唇部と底部を打ち欠いた鉢型土器(1895)を使用し



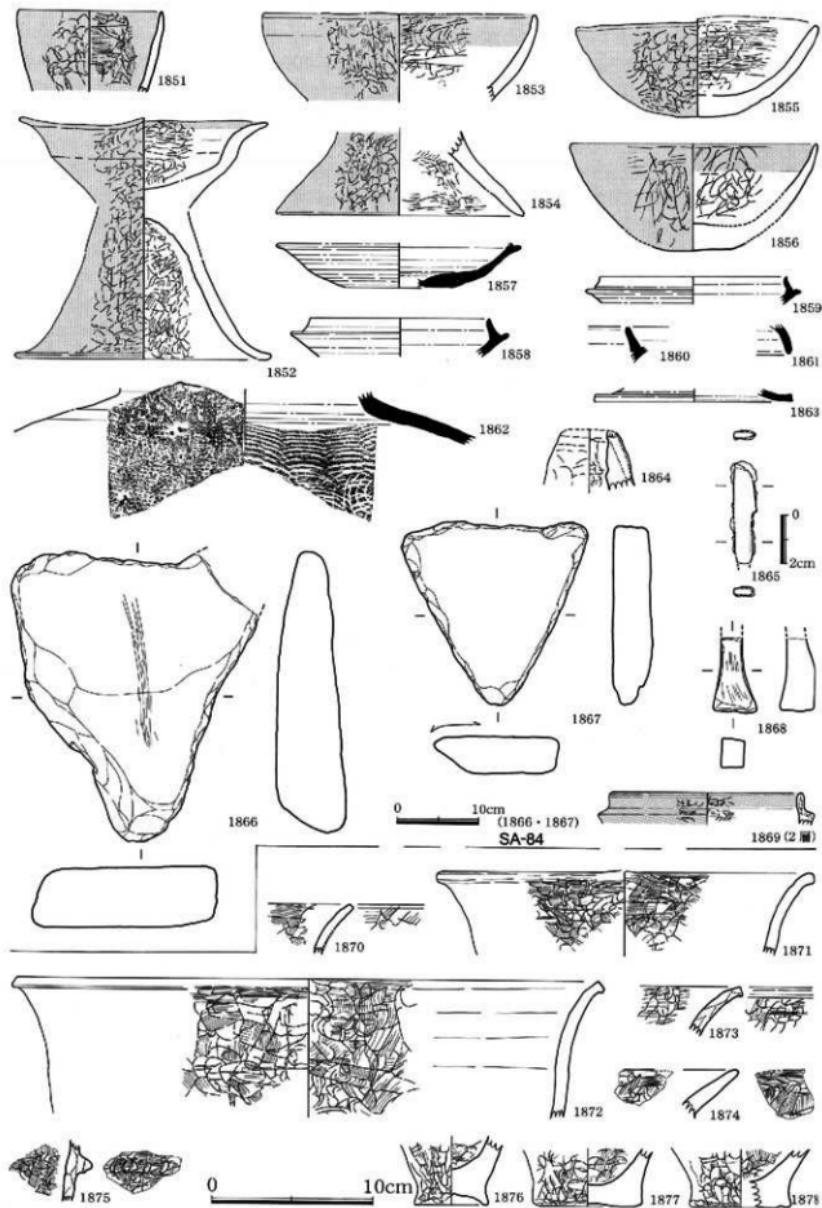
第209図 SA-81-82 出土遺物実測図(1)



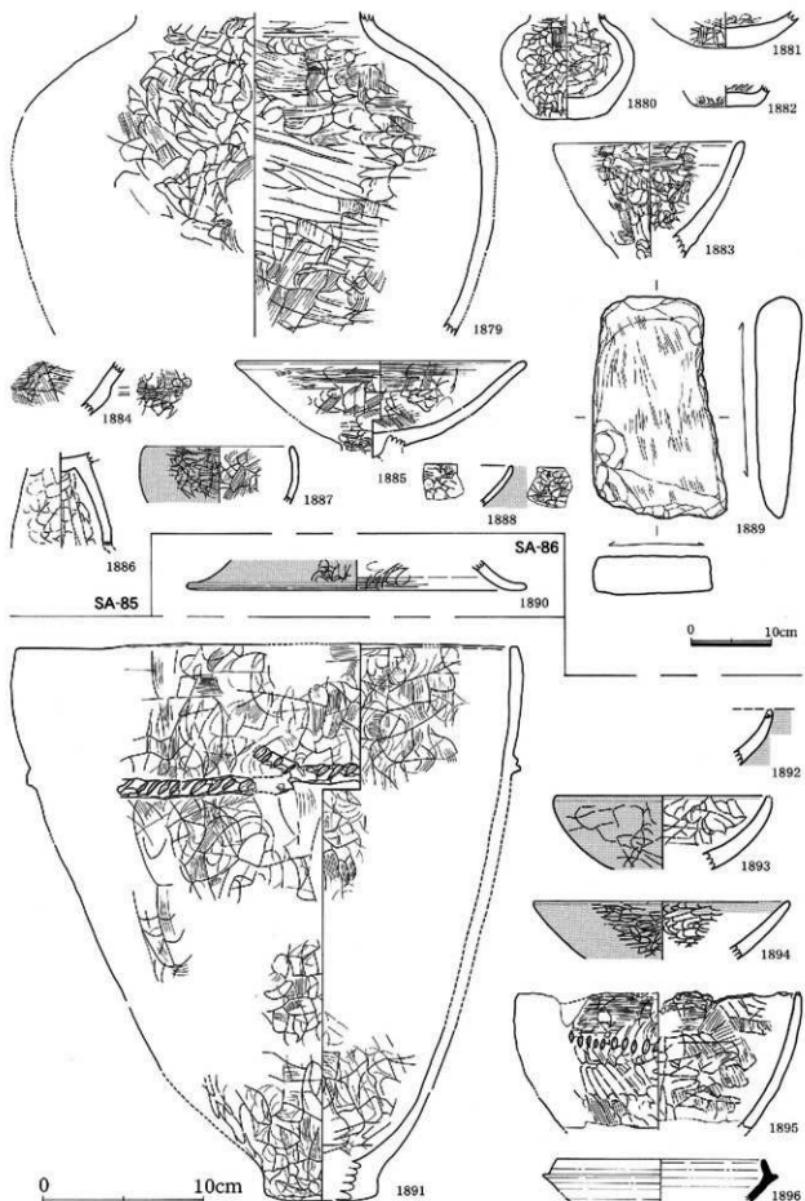
第210図 S A-82 出土遺物実測図(2), S A-83 1a層・1b層出土遺物実測図



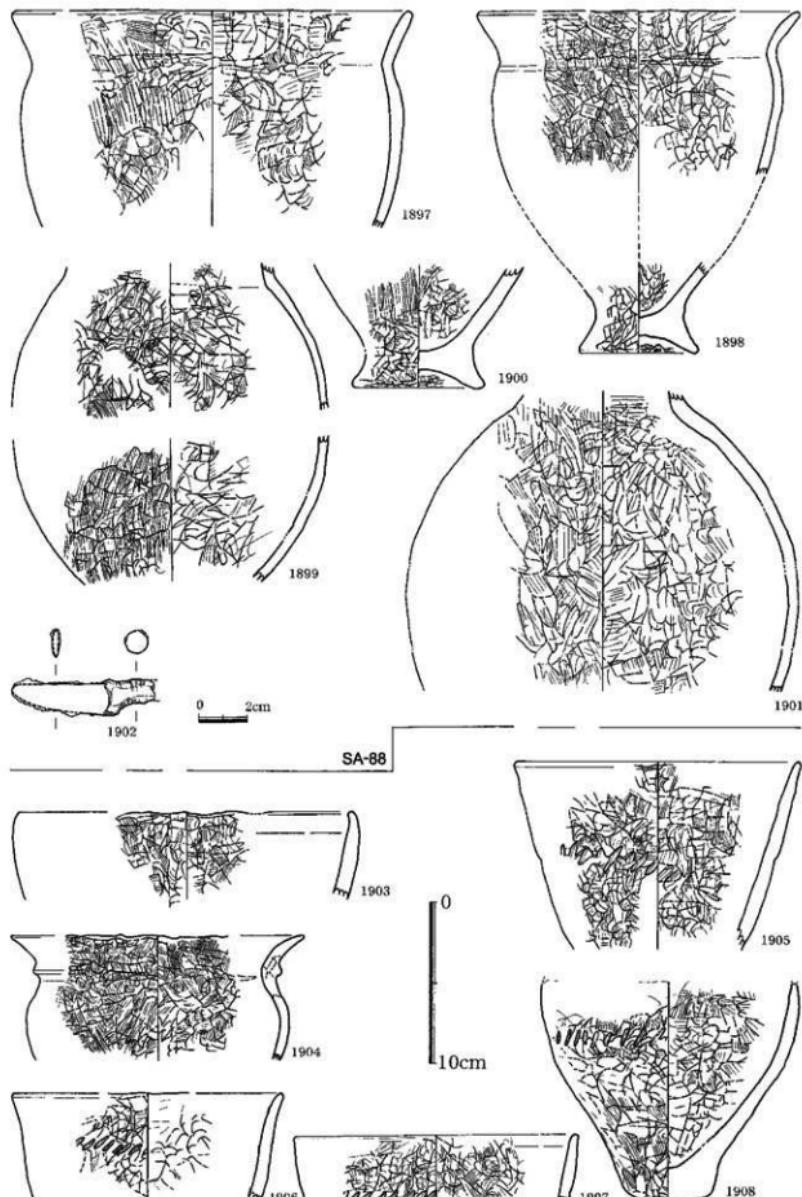
第211図 S A-83 1b層ほか出土遺物実測図, S A-84 出土遺物実測図(1)



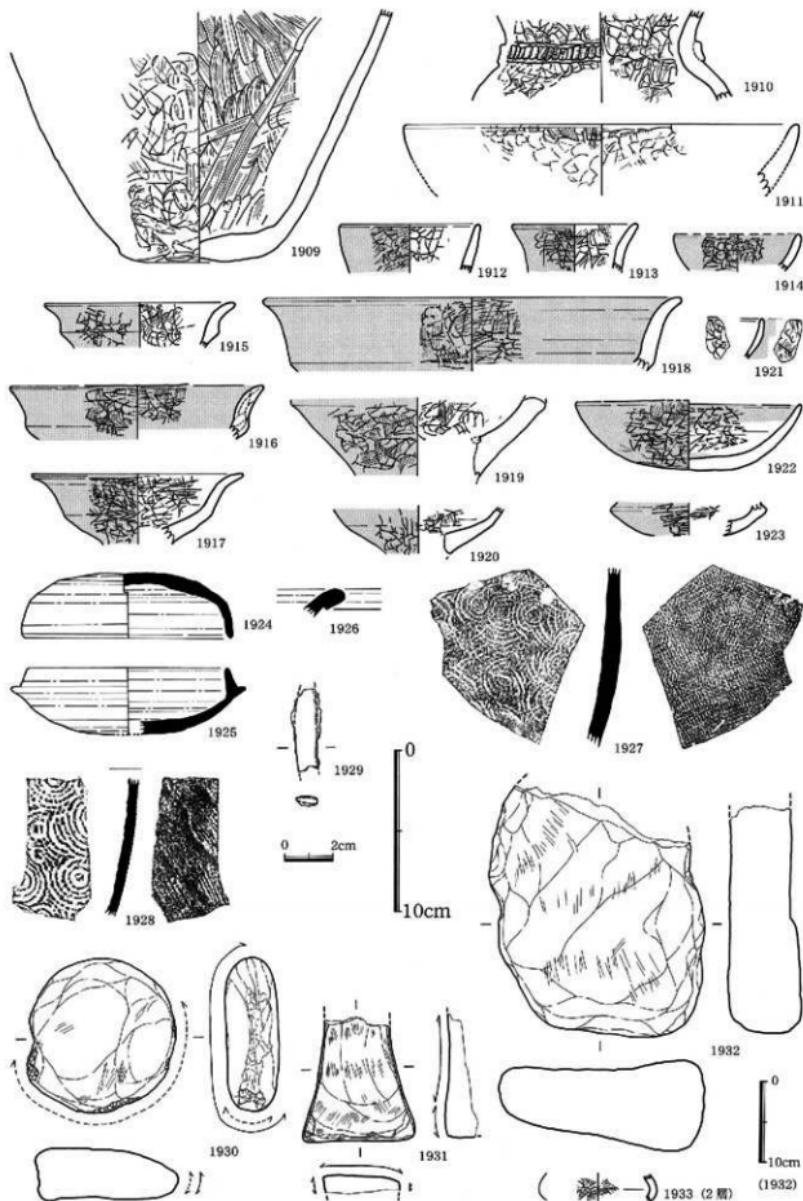
第212図 SA-84 出土遺物実測図(2), SA-85 出土遺物実測図(1)



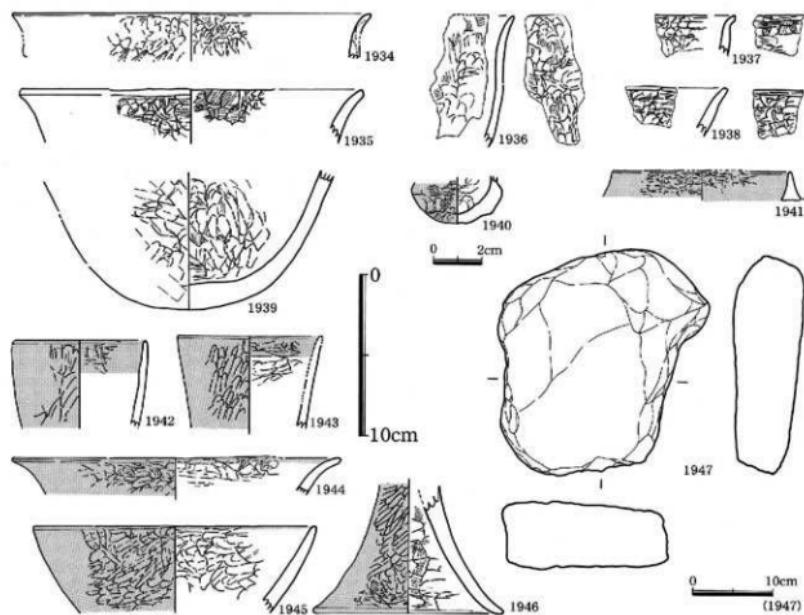
第213図 S A-85 出土遺物実測図(2), S A-86・87 出土遺物実測図



第214図 S A-88-89 出土遺物実測図(1)



第215図 S A-89 出土遺物実測図(2)



第216図 S A-90 出土遺物実測図



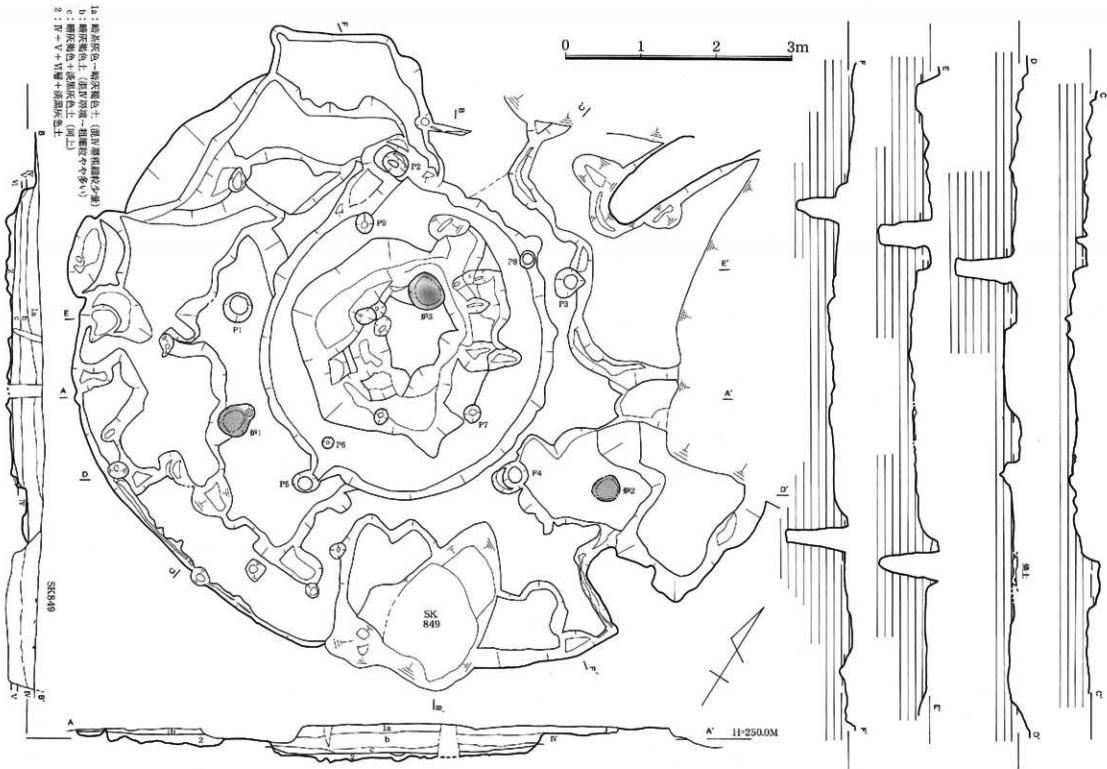
第217図 S A-91 遺構実測図

た土器埋設が接する。柱と炉の距離が極めて近く、大きい炎は出せないことが想定される。

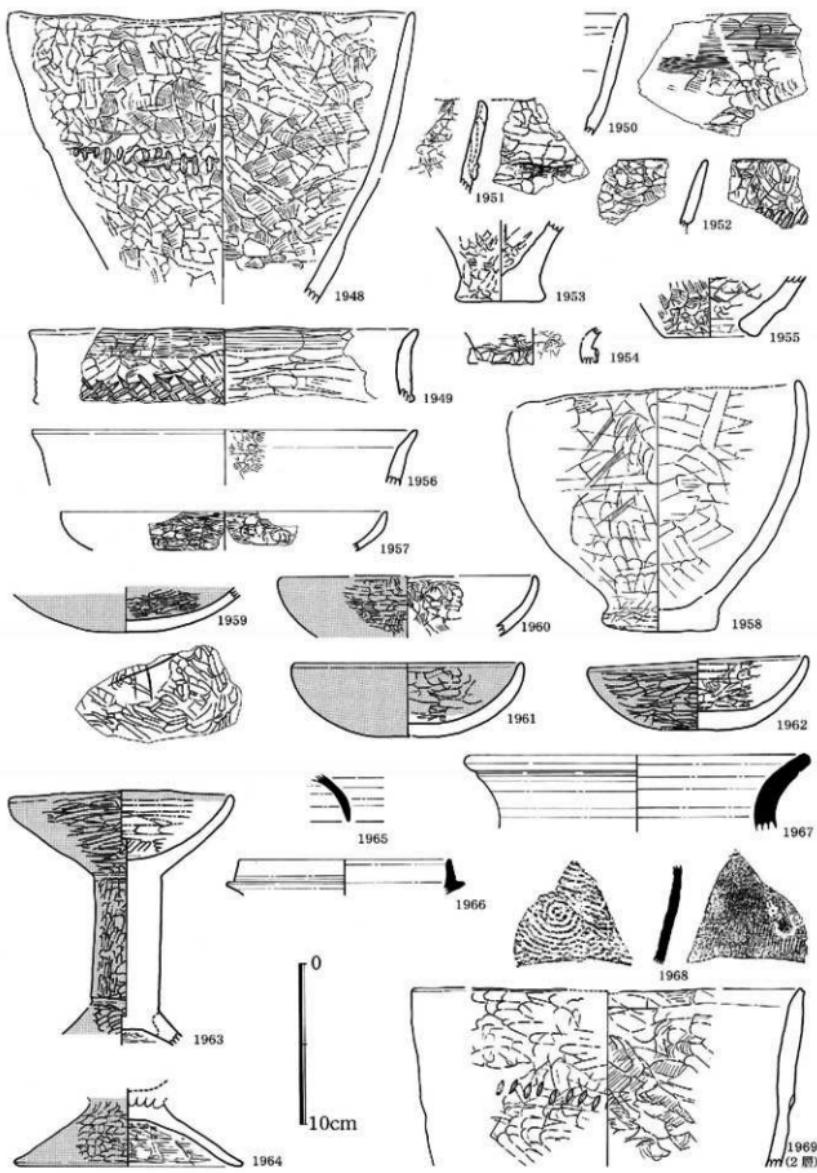
覆土から、土師器片408点と須恵器片2点が出土しているが、図化できたのは僅かである。6世紀後半である。

#### S A-88 (第207図)

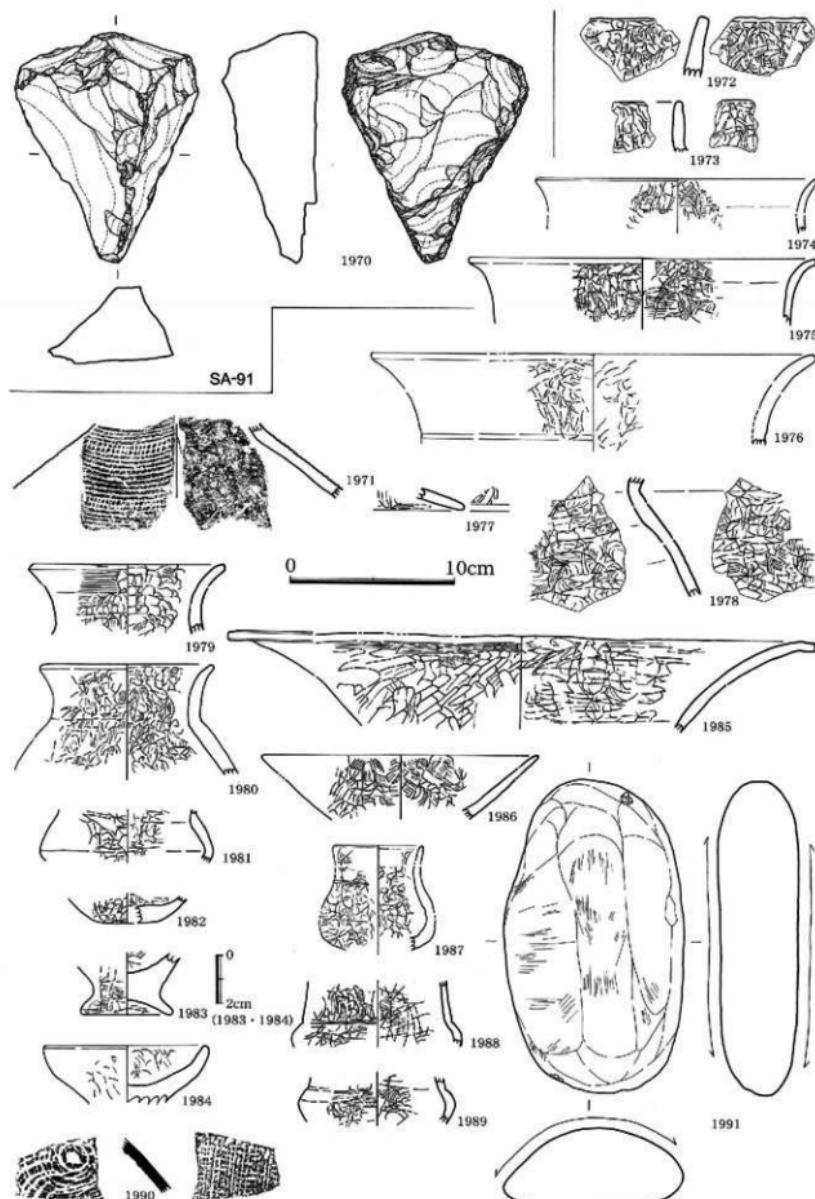
87号住居に切られた、長径4.10m・短径3.74mの円形を呈する住居である。覆土は



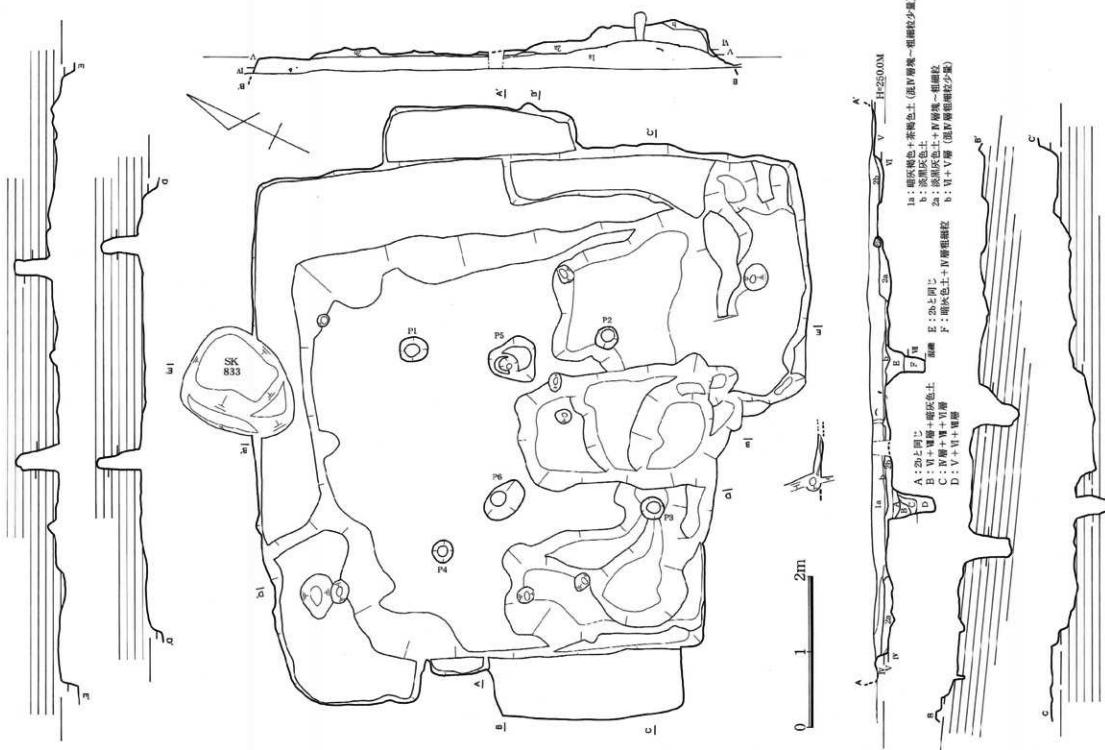
第218図 S A-92 遺構実測図

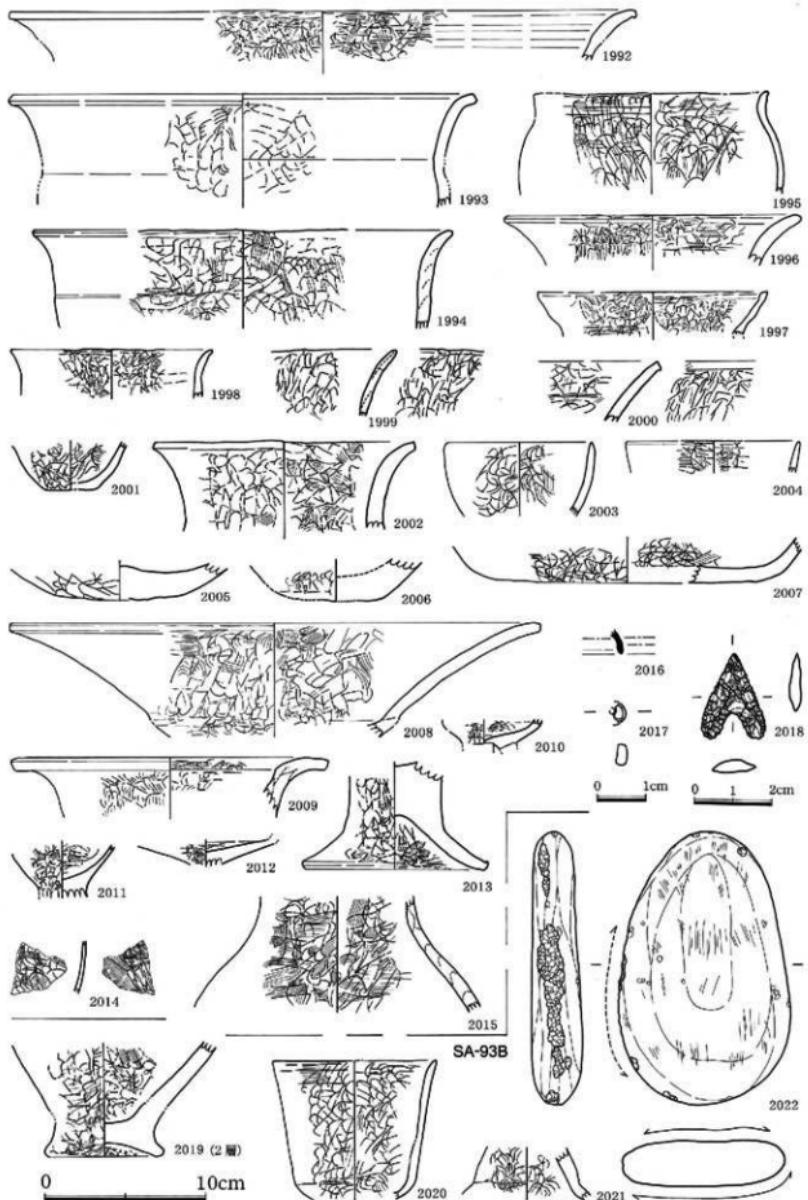


第219図 S A-91 出土遺物実測図(1)



第220図 SA-91 出土遺物実測図(2), SA-92 出土遺物実測図





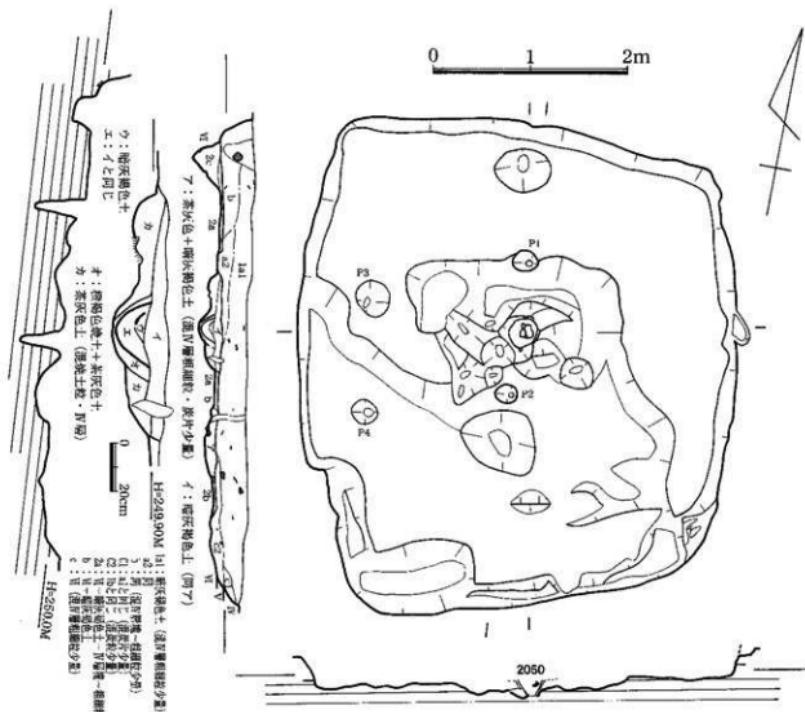
第222図 S A - 93 出土遺物実測図

11~26cmが遺存するが、15~25cm程の削失が推定される。主柱穴と壁溝は、確認されない。中央部断面土層からみると、構築時は中心1本柱で、1度の建て替えの後に炉穴として使用されている。P2は初期の掘り込み炉で、長径38cm・短径34cm・深さ10cmを測る。柱穴P1の廃絶後に、掘り込み炉（1c層）が再構築され、d・c層まで使われている。

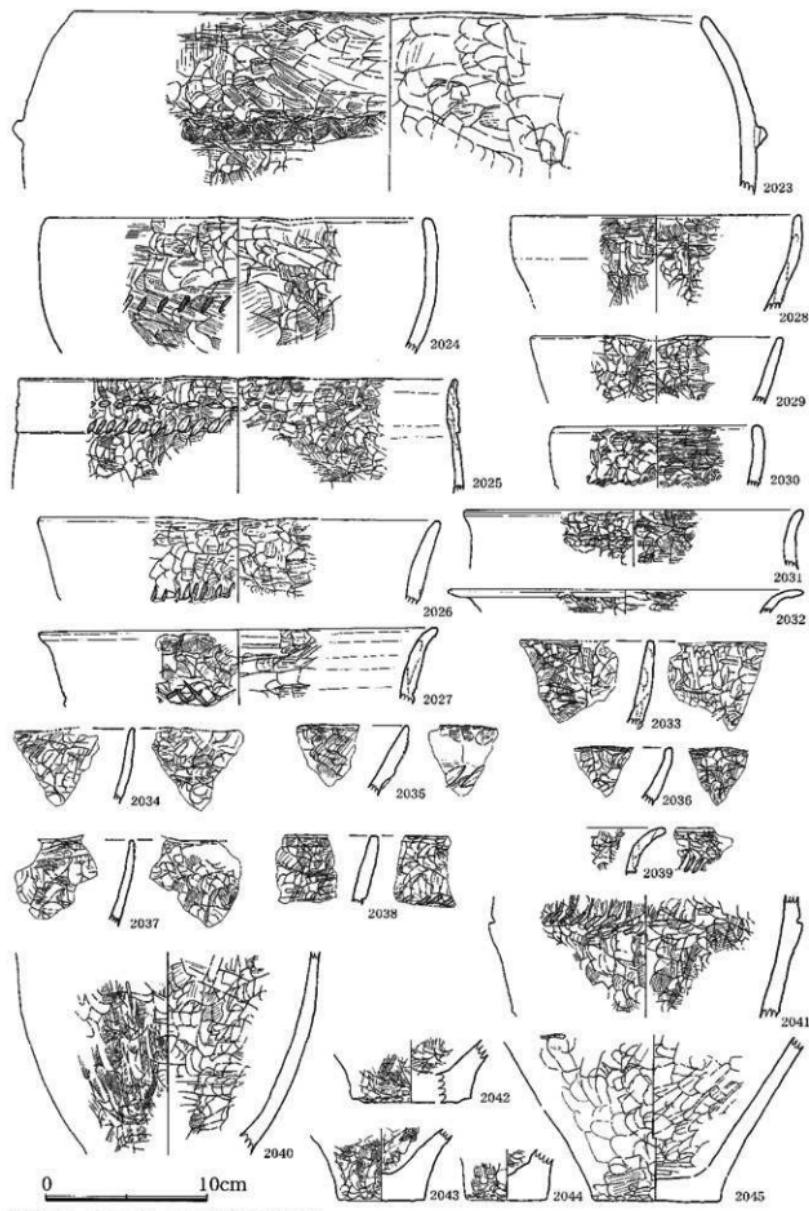
覆土から、弥生時代後期頃の土器片50点と刀子1点、2層から土器片2点が出土したが、図化できたのは僅かである。

#### S A-89 (第208図)

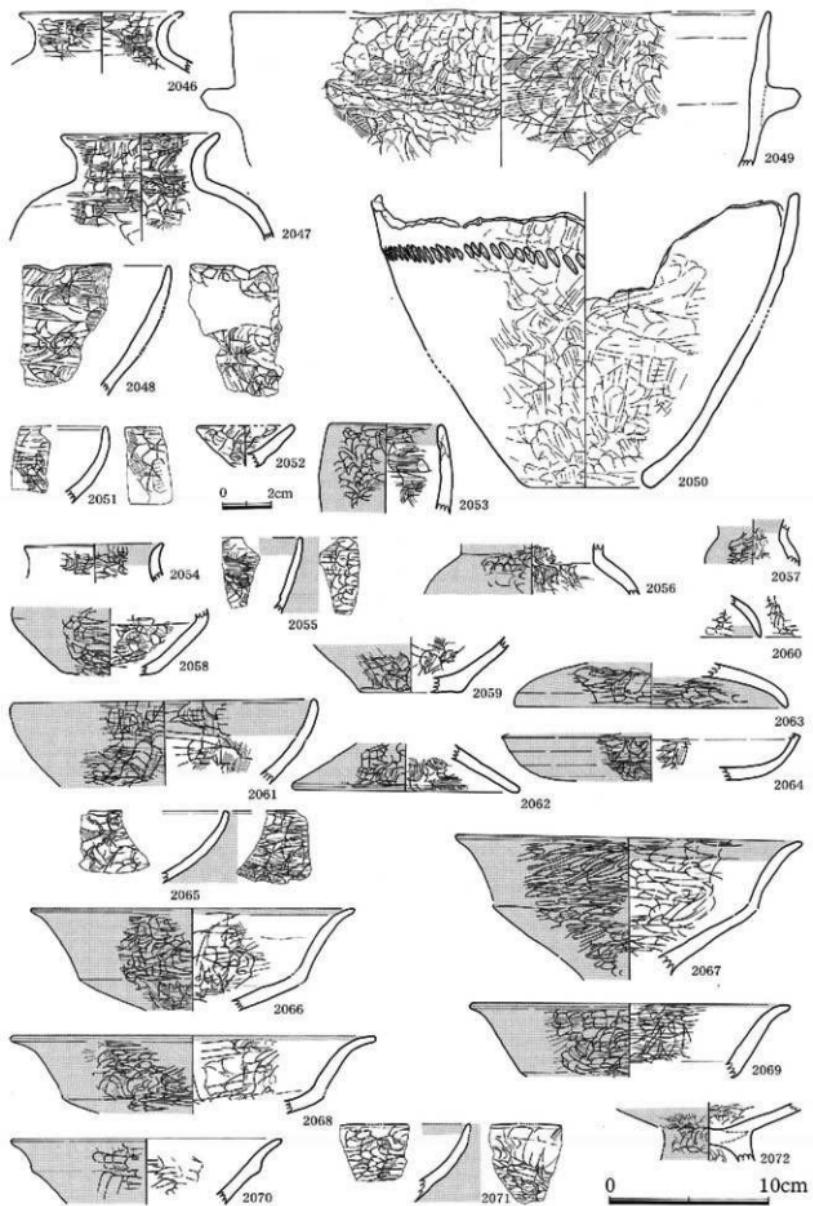
84号住居の東1.8mに並行し、90号住居を切る住居である。南北断面を見る限りでは2軒の重複であるが、2層を完掘してみると、90号住居が前段階の円形住居を切り、その後89号住居が切った様子がわかる。当住居は、南北4.05m・東西3.75mの隅円長方形を呈する。覆土は26cm遺存し、土層的には5~10cmの削失が推定される。主柱穴は不明瞭であるが、深さ26cmのP1と深さ20cmのP2が柱的な掘り込みである。中央には、口唇部を打ち欠いた小型の甕（1908）を使用した土器埋設炉がある。南辺中央には、長径88cm・深さ26cmの不整形土坑がある。



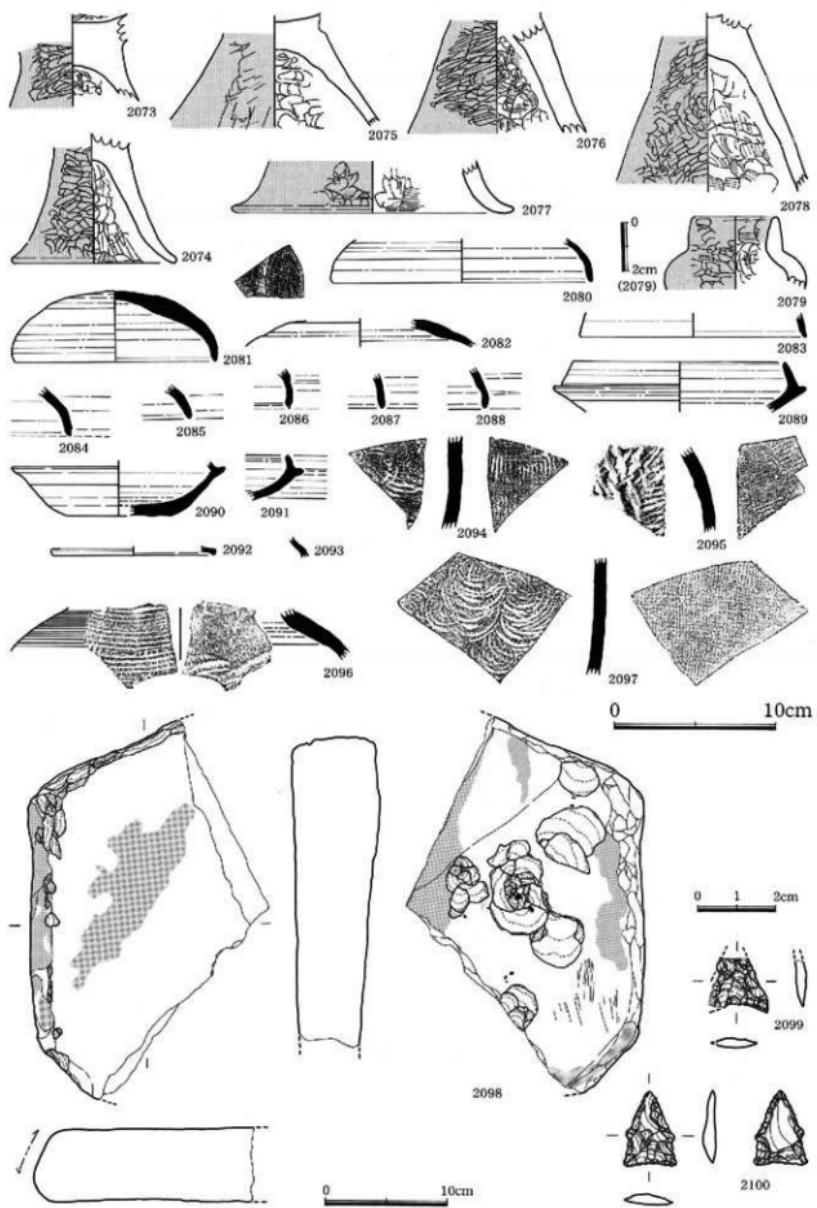
第223図 S A-94 遺構実測図



第224図 S A - 94 出土遺物実測図(1)



第225図 S A-94 出土遺物実測図(2)



第226図 SA-94 出土遺物実測図(3)

覆土から、土師器片が736点のほか、須恵器片11点、刀子片・敲き石・砥石・台石が各1点、2層から土師器片3点が出土している。6世紀後半である。

#### S A-90 (第208図)

直径3m程の円形住居を切り、89号住居に切られる、長さ3.34m・幅3m前後と推定される隅円方形を呈する住居である。覆土は8~30cm程が遺存し、10cm程の削失が推定される。主柱穴は不明瞭であるが、中央やや南東寄りに、深さ34cmのpitがある。貼り床は、厚さ8~16cmが施される。

覆土から、土師器片357点のほか、須恵器片2点が、2層から土師器片3点が出土しているが、図化できたのは少ない。6世紀後半である。

#### S A-91 (第217図)

89号住居の1.6m南に位置した、長さ3.6~3.7m・幅3.1~3.6mの、南東辺が短い隅円方形を呈する住居である。覆土は8~13cmが遺存するが、土層的には30cm程が削失していると推定される。

主柱穴と壁溝は無く中央やや北西寄りに、鉢型土器(1958)を据えた土器埋設炉がある。貼り床は東半部に3~4cmの厚さで施される。南東縁中央には、直径95cm前後・深さ13cmの土坑が伴う。

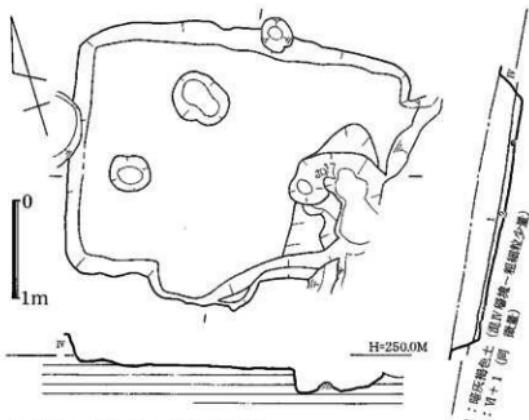
覆土から、土師器片572点や須恵器片13点等が出土しているが、図化できたのは少ない。1959は須恵器模倣土師器坏身の底部とみられ、外底の窓印までも模倣している。須恵器の壺(1967)は、102号住居出土片と接合している。6世紀後半である。

#### S A-92 (第218図)

93・94号住居に切られているが、特に93号住居との境は不明瞭であった。長径9.36m・短径8m以上(推定9m)の円形基調の間仕切り住居である。南縁中央部は、古墳時代の片側小口付設土坑に切られている。南西側半分は、間仕切りの突出が判然としない。主柱穴は直径20~47cm・深さ70

~84cmの5本(P1~5)である。その20~70cm内側にも深さ49~70cmの小pit4基(P6~9、深さ70~60~49~59cm)があり、補助的機能を想定している。外区覆土は3~10cm遺存するが、15~25cmの削失が推定される。内区は、長径4.0m・短径3.9mが1段20cm程低くなり、貼り床が5~10cm施される。

外区2ヶ所と内区1ヶ所には掘り込み炉があり、同時期と思われる。それらは、直径40~



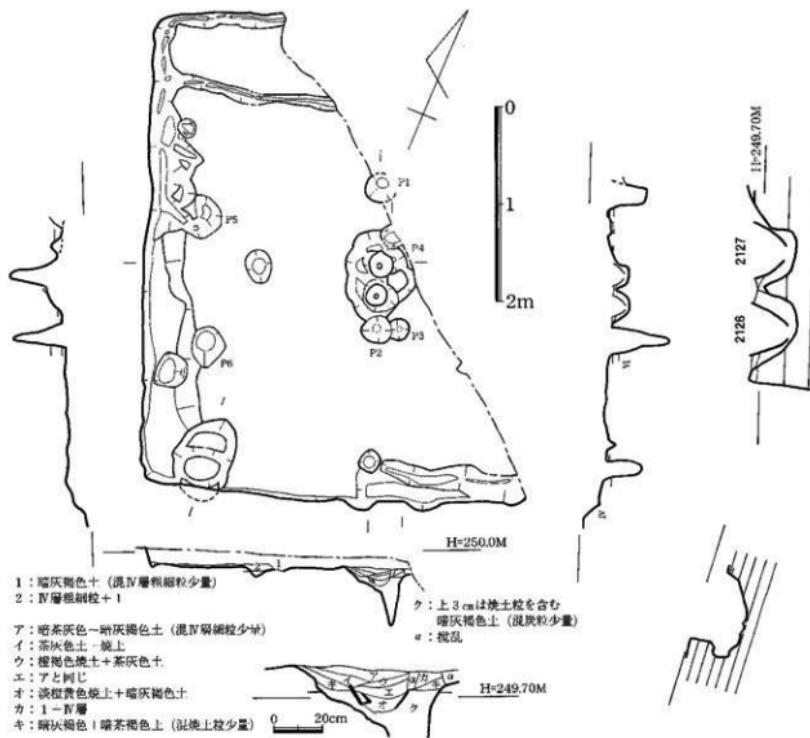
第227図 S A-95 遺構実測図

50cm・深さ6~8cmを測り、焼土や炭化物が入っていた。西端縁には幅1.24mで奥行き40~50cmの突出部があり、出入口の可能性がある。

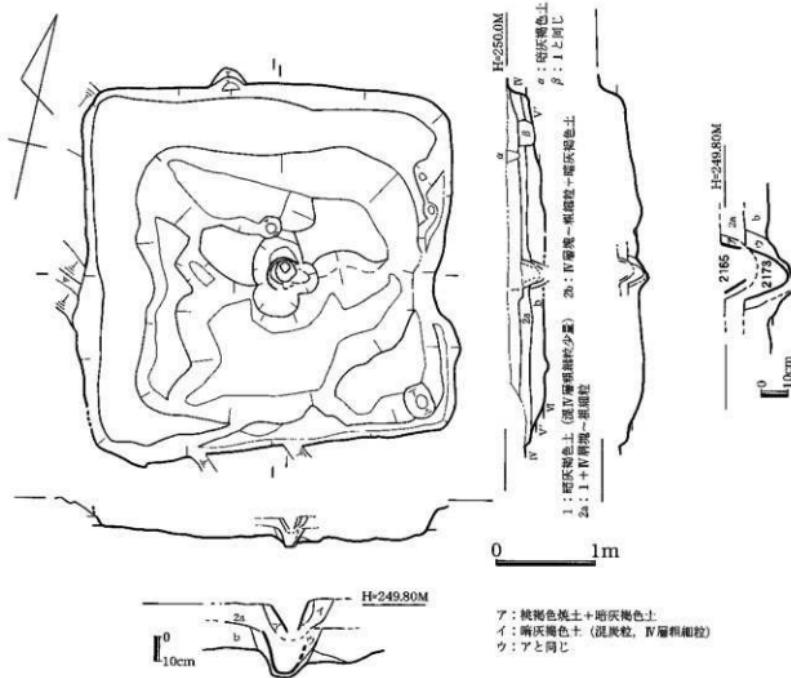
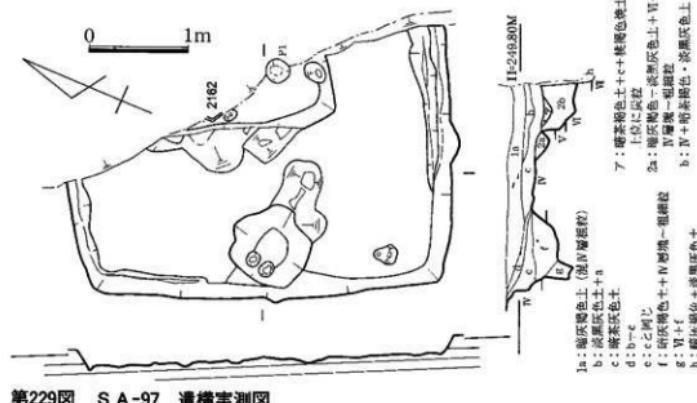
覆土から、弥生時代後期~古墳時代前期にかけての土器片が583点、2層から土器片が27点出土している。土師器の壺(1980)は、93号住居出土片と接合している。須恵器片(1990)は、後世の混入と推定される。

#### S A-93 (第221図)

南北7.3m・東西7.0~7.5mの方形基調の間仕切り住居である。覆土は5~38cm遺存するが、土層的には20~30cmの削失が推定される。東辺には、長さ2.6m・幅40~70cmの張り出しがあり、南西部は削失によって掘形が遺存していない。北辺中央部は、古墳時代の土坑(S K-833)に切られている。主柱穴は直径27~37cm・深さ50~58cmの4本(P 1~4)で、南側中央部に長さ1.9m・幅1.4~1.6m・深さ18cm(貼り床16~32cm)の土坑が伴う。P 5・6は、初期の2本柱であり、直徑41~62cm・深さ56・60cmを測る。当2基の上半部はラッパ状に広がり、柱が抜き取られて再利用



第228図 S A-96 遺構実測図



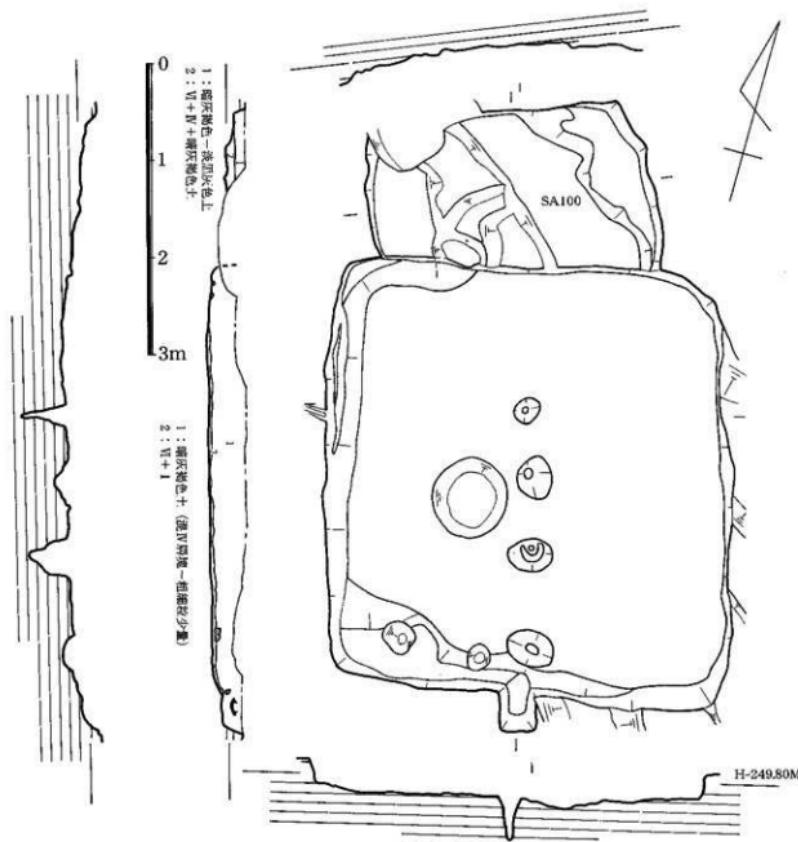
第230図 SA-98 遺構実測図

された可能性が高い。初期の掘形は、2層の掘り込みラインから、 $5 \times 5.6\text{m}$ 程度と推定される。炉跡は、2時期とも検出されていない。

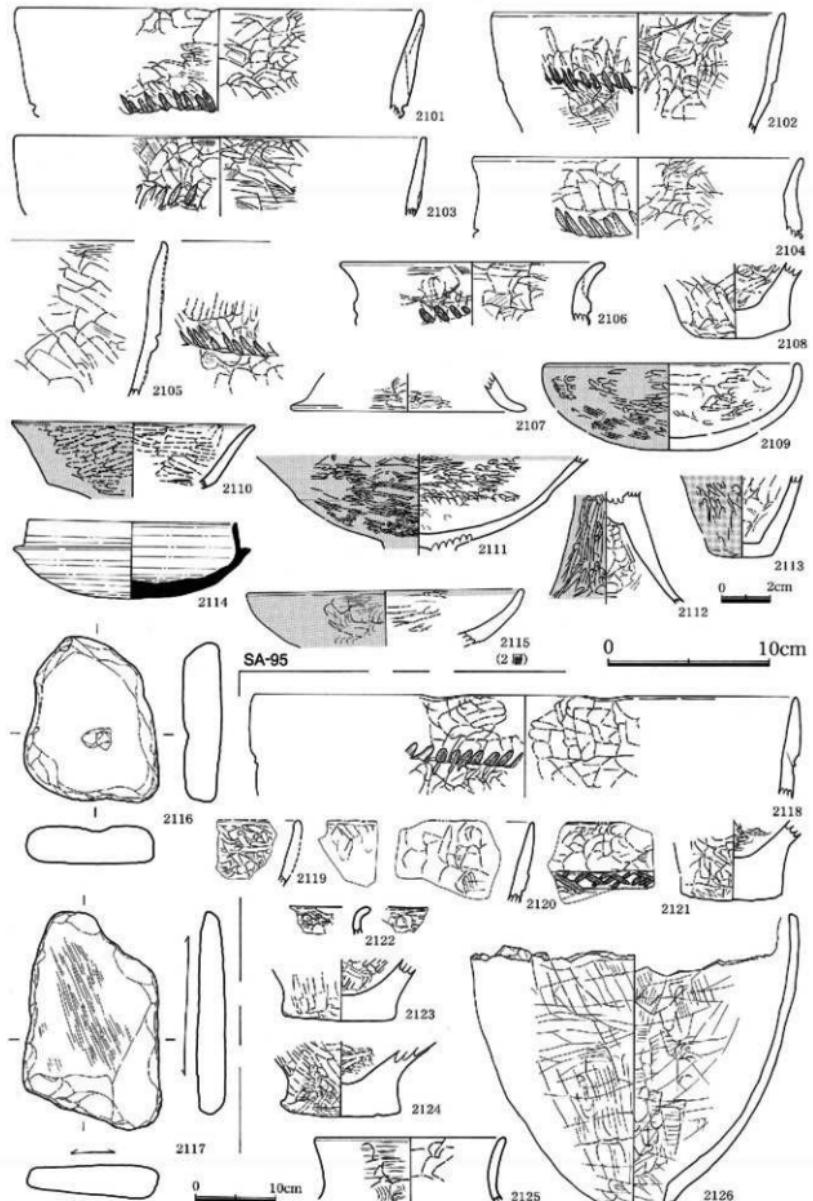
覆土から、4世紀後半～5世紀前半と推定される土師器片540点、須恵器片1点のほか、ガラス小玉片（2017）、砥石（2022）等が、2層から土師器片110点が出土しているが、図化できたのは少ない。須恵器は混入か。

#### S A-94 (第223図)

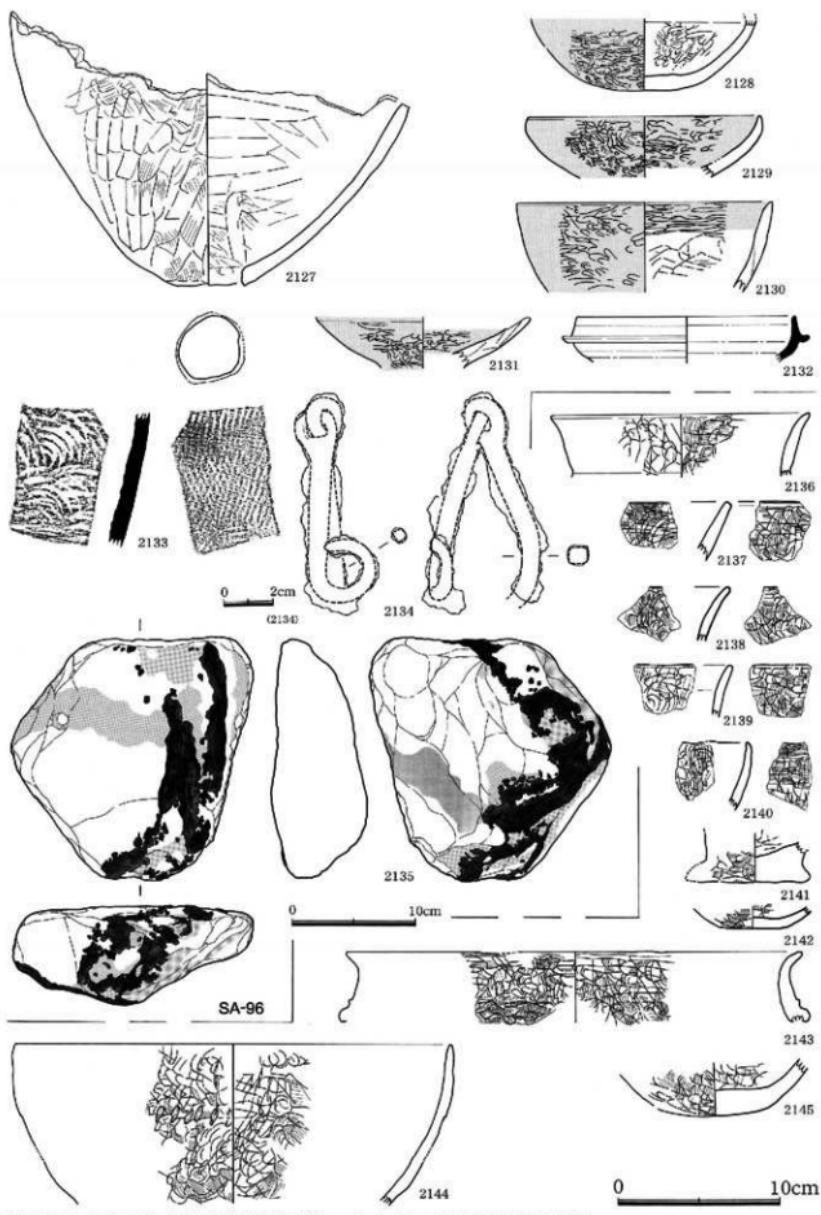
92号住居を切る東側に位置した、南北4.2～5.1m・東西3.9～4.47mの、重つな隅円長方形を呈する住居である。覆土は30cm遺存するが、土層的には25cm程の削失が推定される。西壁と東壁は胴張り、西南部と南東隅には、間仕切りの痕跡が残る。主柱穴は、直径19～25cm・深さ44～52cmの2本（P1・2）で、中央には、口縁部を打ち欠いた瓶（2050）を使用した土器埋設炉がある。P2の南には、長径82cm・短径64cm・深さ12cmの重つな炭片混じりの土坑があり、土器埋設炉以前にも掘



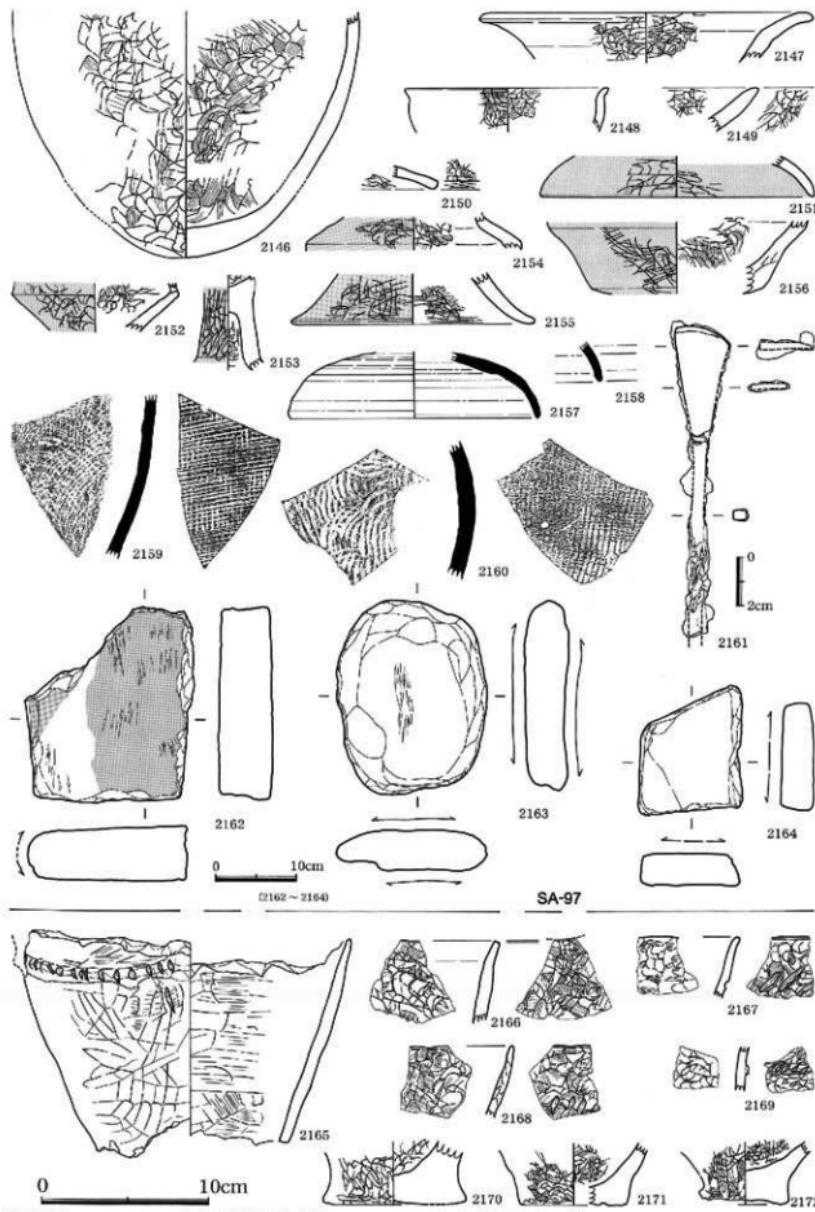
第231図 S A-99-100 造構実測図



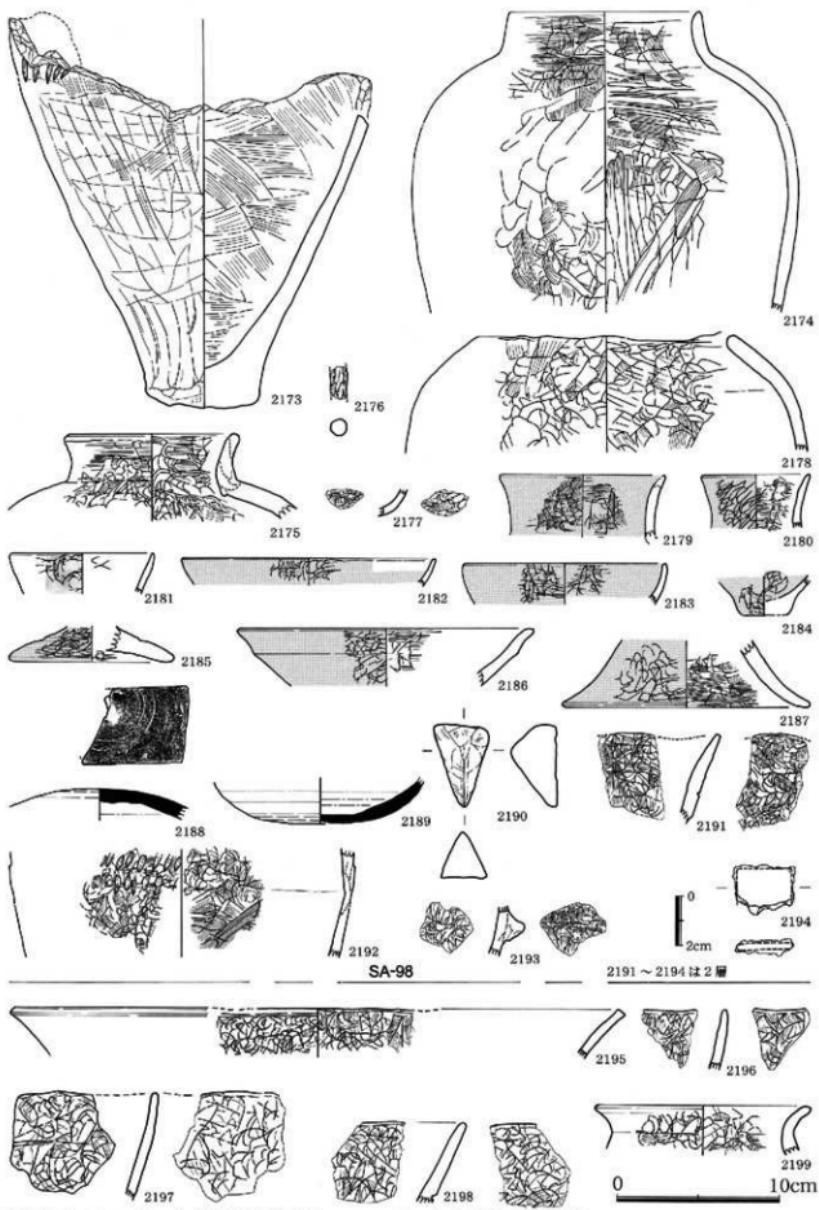
第232図 SA-95-96 出土遺物実測図(1)



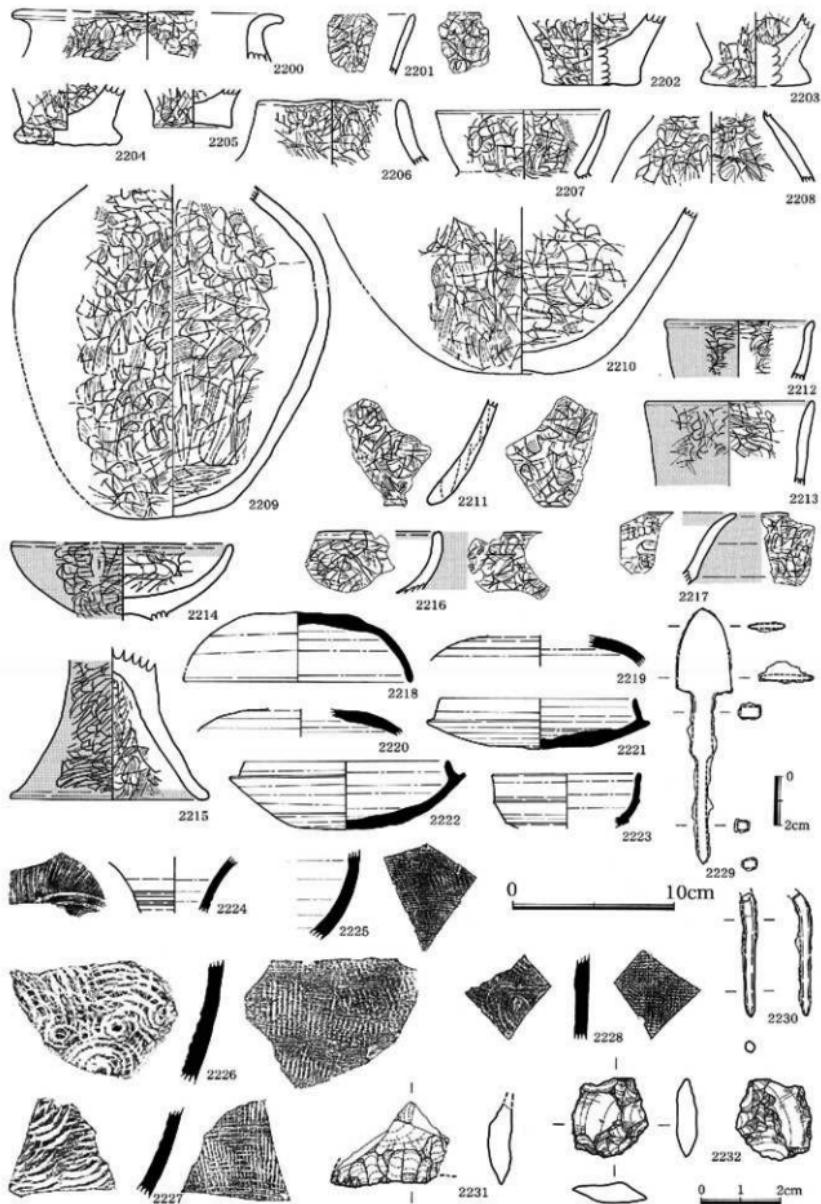
第233図 SA-96 出土遺物実測図(2), SA-97 出土遺物実測図(1)



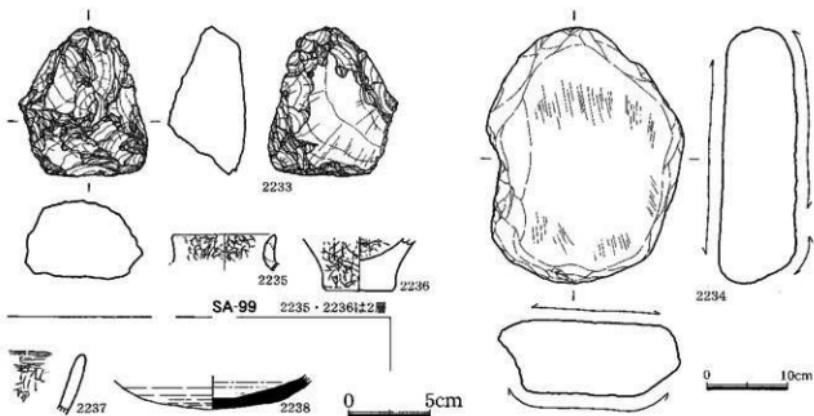
第234図 SA-97 出土遺物実測図(2), SA-98 出土遺物実測図(1)



第235図 S A-98 出土遺物実測図(2), S A-99 出土遺物実測図(1)



第236図 SA-99 出土遺物実測図(2)



第237図 SA-99 出土遺物実測図(3), SA-100 出土遺物実測図

り込み炉（カ層）があったようである。西壁寄りの、直径24~37cm・深さ30~35cmの柱穴（P 3・4）は、出入口の支柱であった可能性がある。

覆土から、土師器片3069点、須恵器片52点などのほか、被熱・弾けのある鉄床石（2098）等が、2層から土師器片47点が出土している。鉄片や鍛造剥片は出土していないが、小鍛冶を営んでいたことが推定される。6世紀後半である。

#### SA-95 (第227図)

133号溝に南縁を切られた長さ3.4m・幅2.38~2.64mの隅円長方形の、南西辺中央北西寄りに幅1.1m・奥行き20~24cmの突出部がある。覆土は21~25cm遺存し、土層的には20cm程の削失が推定される。主柱穴は判然としないが中央東寄りに、深さ24cmの柱穴がある。貼り床は4~8cmの厚さで全面に施され、軋跡と壁溝は確認されなかった。

覆土から、土師器片478点、須恵器片3点、台石2点のほか、2層から土師器片13点等が出土しているが、國化できたのは少ない。6世紀前半と思われる。

#### SA-96 (第228図)

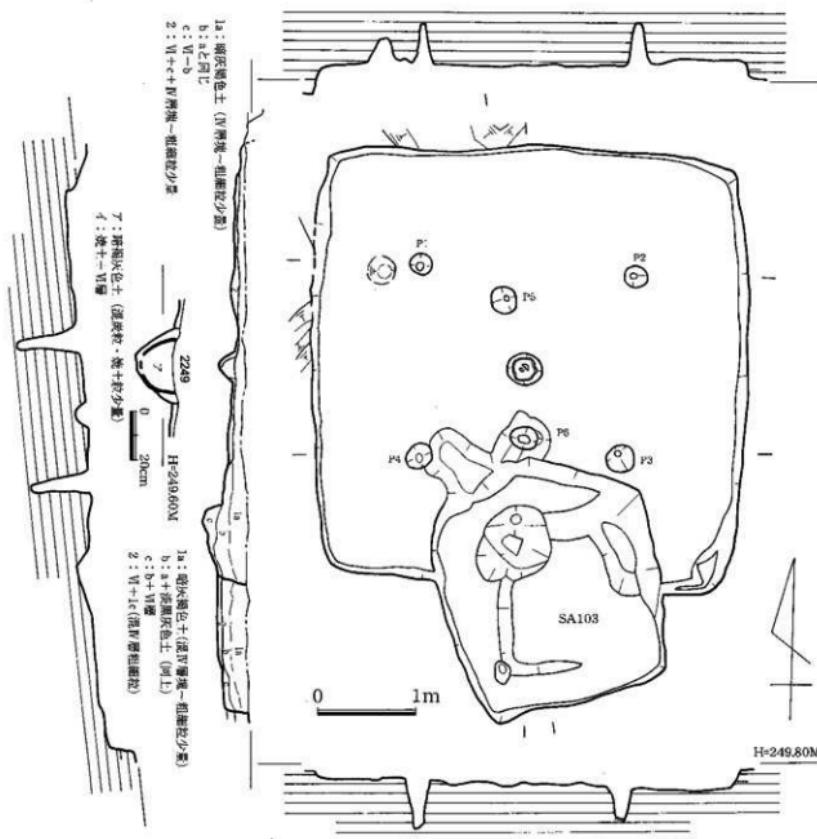
舗装道路の擁壁基礎工事によって北側1/3を削失する、1辺4.8~4.9mの方形住居と推定される。覆土は11~15cm遺存し、土層的には10cm程の削失が推定される。主柱穴は、直径28~30cm・深さ39~60cm（P 1・2）の2本で、中央に、口縁部を打ち欠いた瓶（2127）を使用した土器埋設がある。拡張前の初期の住居は、北壁が80cm程狭まり、主柱穴は直径21~23cm・深さ48~50cmの2本（P 3・4）であり、中央西寄りに、口縁部を打ち欠いた瓶（2126）を使用した土器埋設がある。西壁中央寄りには、深さ10cmの、初期の出入口支柱の可能性があるpit（P 5・6）を検出した。南辺西半分には壁溝が無く、拡張時の出入口があった可能性がある。南隅寄りには、壁面に高さ15cm・奥行き13cm程抉り込む土坑がある。底面まではIV層の塊が混じり、抉り部は黒灰色土が充填していた

ので地下式横穴墓の可能性も考えたが、抉り部が狭小であることから、最終的には住居内土坑の一  
種と推定している。土器埋設炉廃絶後も焼土層（イ・ウ層）があり、数次にわたる居住が推定され  
る。

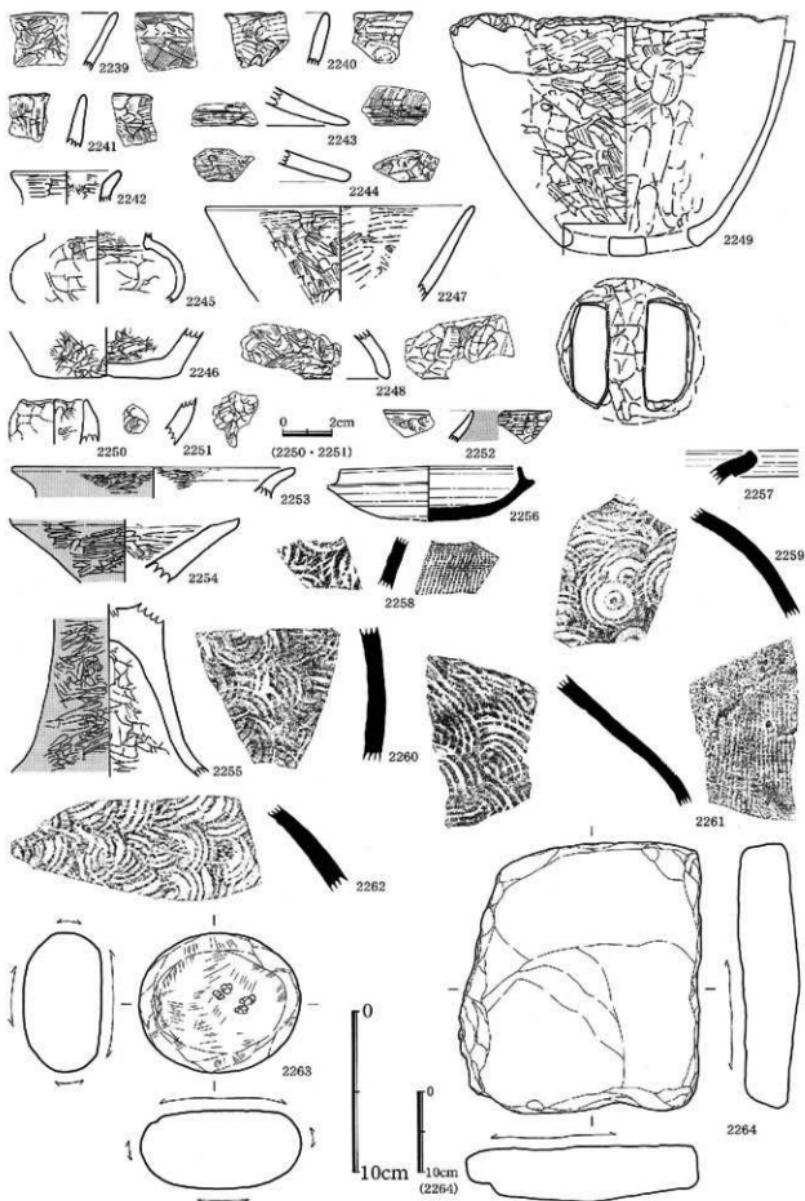
覆土から、土師器片627点、須恵器片5点のほか、鉄製帶（2134、二連衝）などが出土している。  
2135は、河原石に鉄分が厚さ1~2mmで流れたように貼り付いているものであるが、村上恭通先生  
から自然遺物であろうとの意見を頂いている。<sup>ii)</sup> 須恵器の坏身（2132）は、102号住居出土片と接  
合している。6世紀後半である。

#### SA-97（第229図）

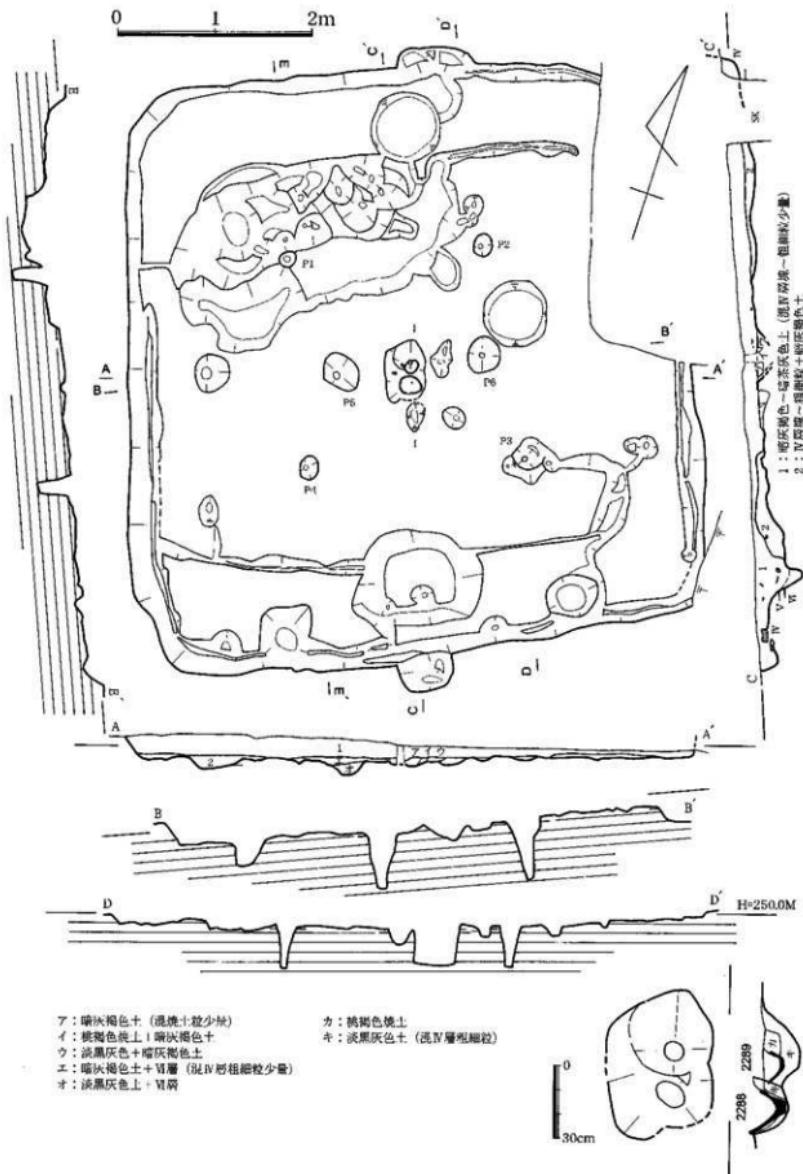
96号住居と1m離れた位置にある、1辺3.8~4mの方形住居である。覆土は22~28cm遺存し、



第238図 SA-101・103 遺構実測図



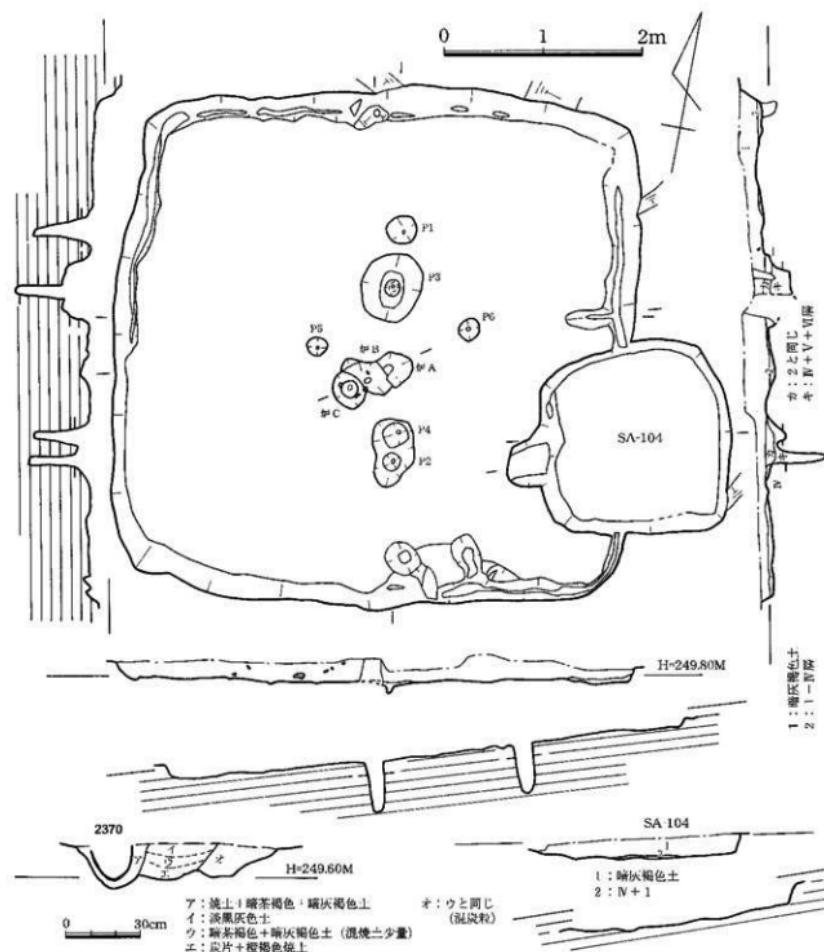
第239図 S A-101 出土遺物実測図



第240図 S A-102 造構実測図

土層的には5~10cmの削失が推定される。中央は、さらに36~40cm掘り下げられるが埋め戻され、炉（ア層）が設けられる。主柱穴は判然としないが、直径24cm・深さ54cmの、2層から掘り込まれたpit（P1）がそのうちの1基と推定される。西辺中央には、直径72~80cm・深さ25cmの不整形土坑が伴う。

覆土から、土師器片603点、須恵器片8点、台石3点のほか、鐵鏟1点（2161）が出土している。須恵器の蓋（2157）は、112号住居出土片と接合している。6世紀後半である。



第241図 SA-104・105 遺構実測図

### S A-98 (第230図)

97号住居の1.9m西に位置し132号溝に切られた、南北3.4~3.91m、東西3.6~3.8mのやや歪つな隅円方形を呈する住居である。覆土は10~16cm遺存し、土層的には15cm程の削失が推定される。主柱穴と焼溝は検出されなかったが、土器埋設炉が重複していた。2a層は殆ど縫まりが無く、床面としては断面で把握した。炉には、口縁部と底部を打ち欠いた甕(2165)が使用されている。2b層上面はやや縫まり、口縁部を打ち欠いた甕(2173)を使用した土器埋設炉がある。初期の貼り床(2b層)は、6~18cmの厚さがある。

覆土から、土師器片942点、須恵器片5点などが、2層から土師器片114点、須恵器片1点のほか鉄製品1点(2194)等が出土している。2188は、須恵器の甕片を両面調整した長方形状の加工品である。6世紀後半である。

### S A-99 (第231図)

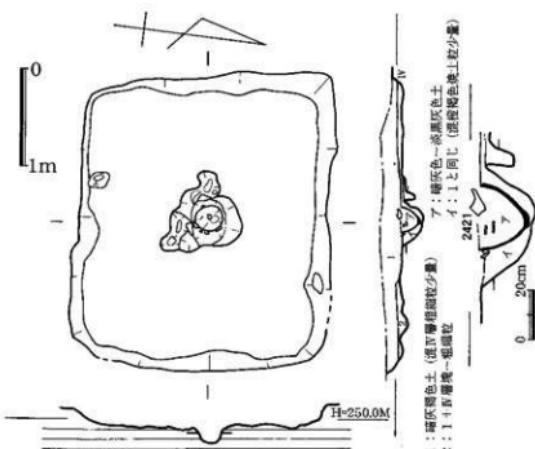
100・102号住居を切り、130・134~136号溝に切られ、98号住居の90cm西に位置した、長さ4.2~4.5m・幅3.9~4.15mの隅円長方形プランの南辺中央に、幅36cm・長さ36~40cm・深さ20cmの出入口が付く。覆土は20~35cm遺存し、土層的には25~30cmの削失が推定される。主柱穴は2本で、直径22~45cm・深さ40~44cmを測る。中央には、長径44cm・短径35cmの掘り込みがある。壁溝は不明瞭である。

覆土から、土師器片1169点、須恵器片6点、鉄鎌・台石各1点等が、2層から土師器片50点と須恵器片1点が出土している。6世紀後半である。

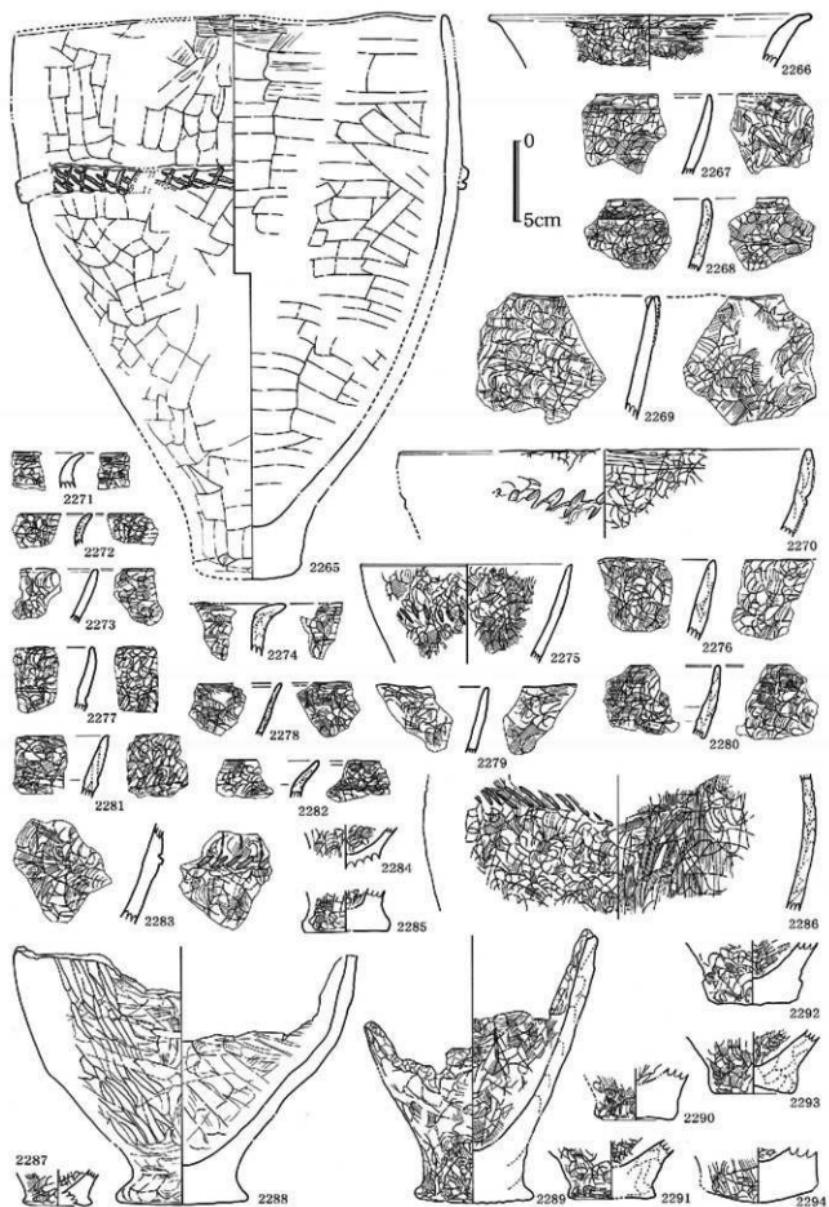
### S A-100 (第231図)

99号住居と130号溝に切られた、1辺2.6~2.9m程の方形住居で、西壁と東壁が胴張る。覆土は11cm遺存し、土層的には30cm程の削失が推定される。主柱穴や炉・壁溝は確認されなかつたが、厚さ10cm前後の貼り床があったことから、住居と断定した。

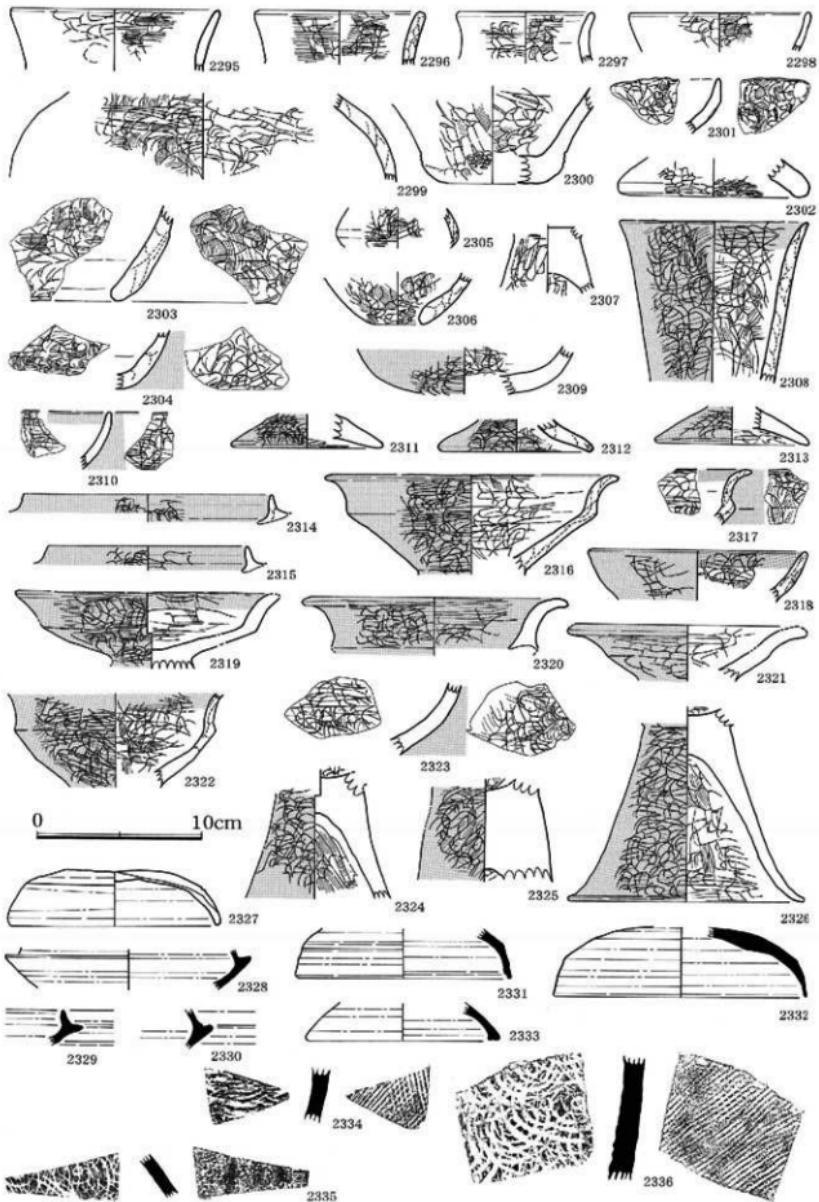
覆土から、土師器片49点と須恵器片1点が、2層から土師器片6点が出土したが、図化できたのは2点である。6世紀後半である。



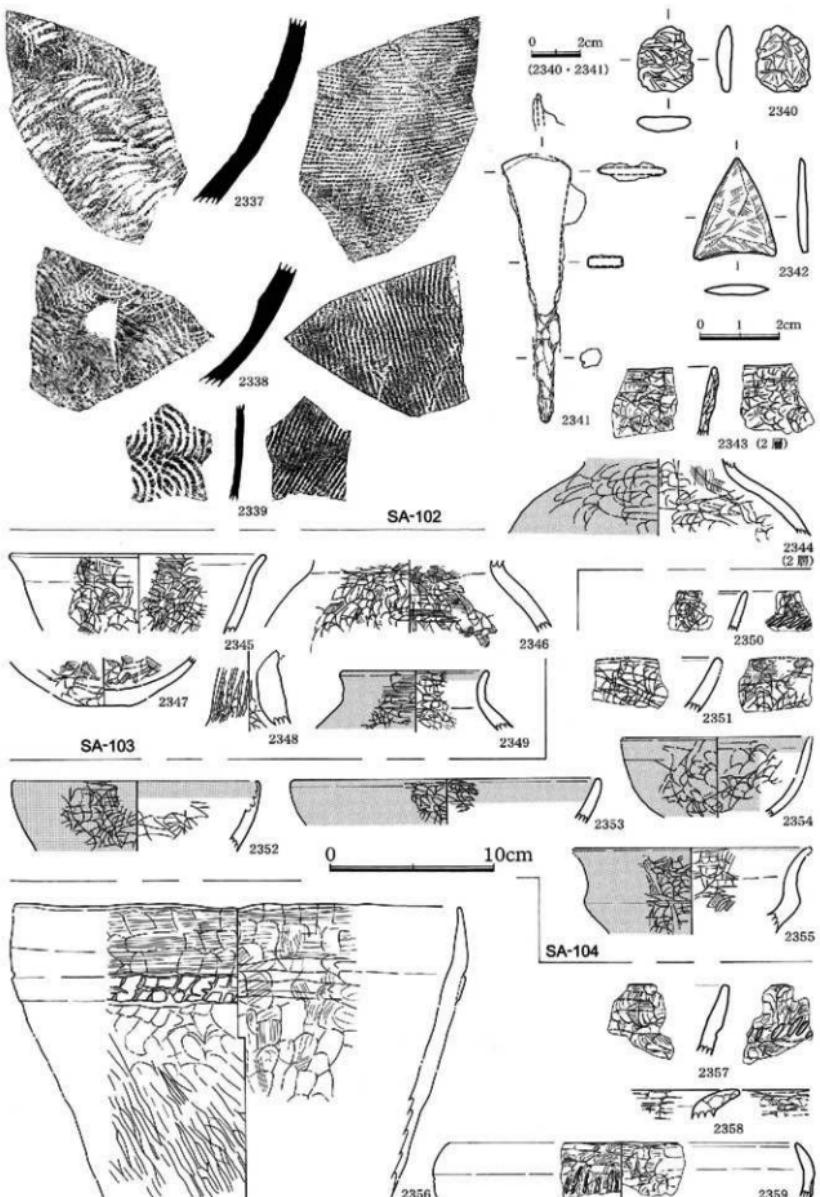
第242図 S A-106 遺構実測図



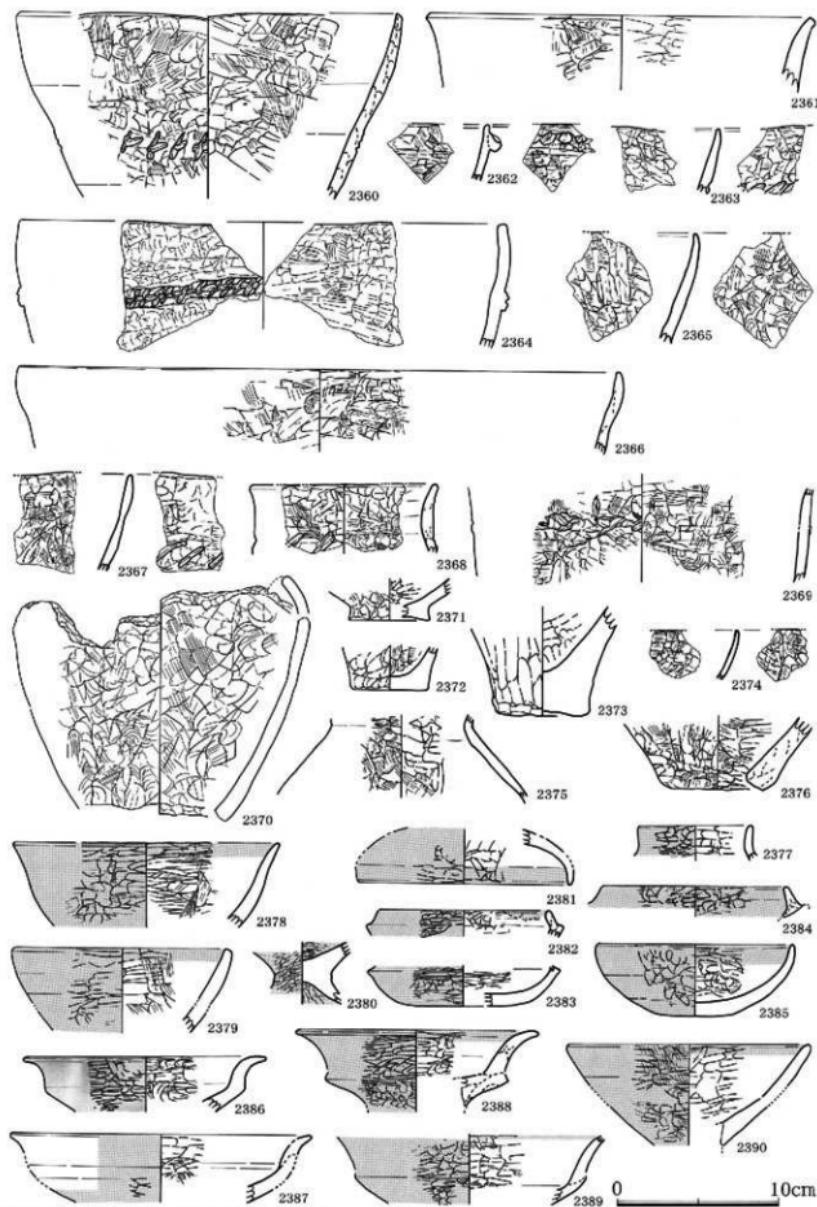
第243図 S A-102 出土遺物実測図(1)



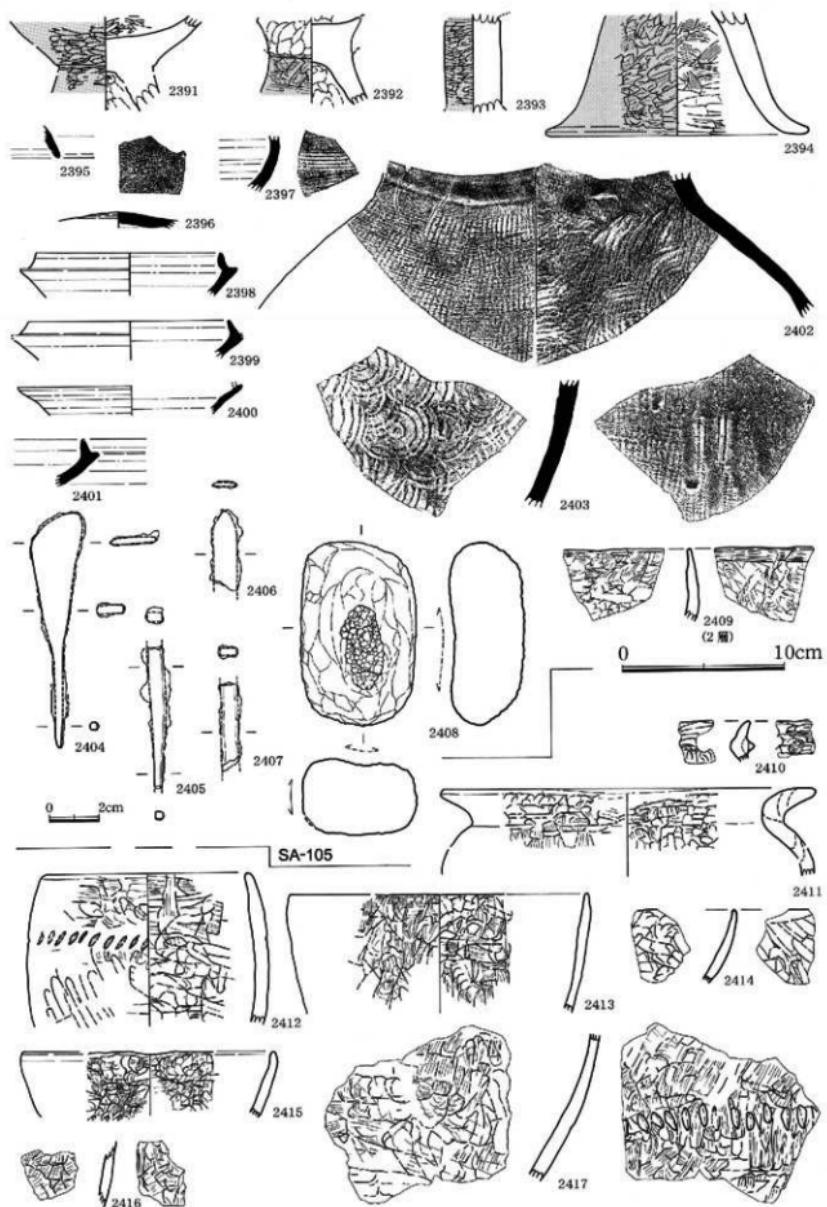
第244図 SA-102 出土遺物実測図(2) 2327は須恵器(歪つ)



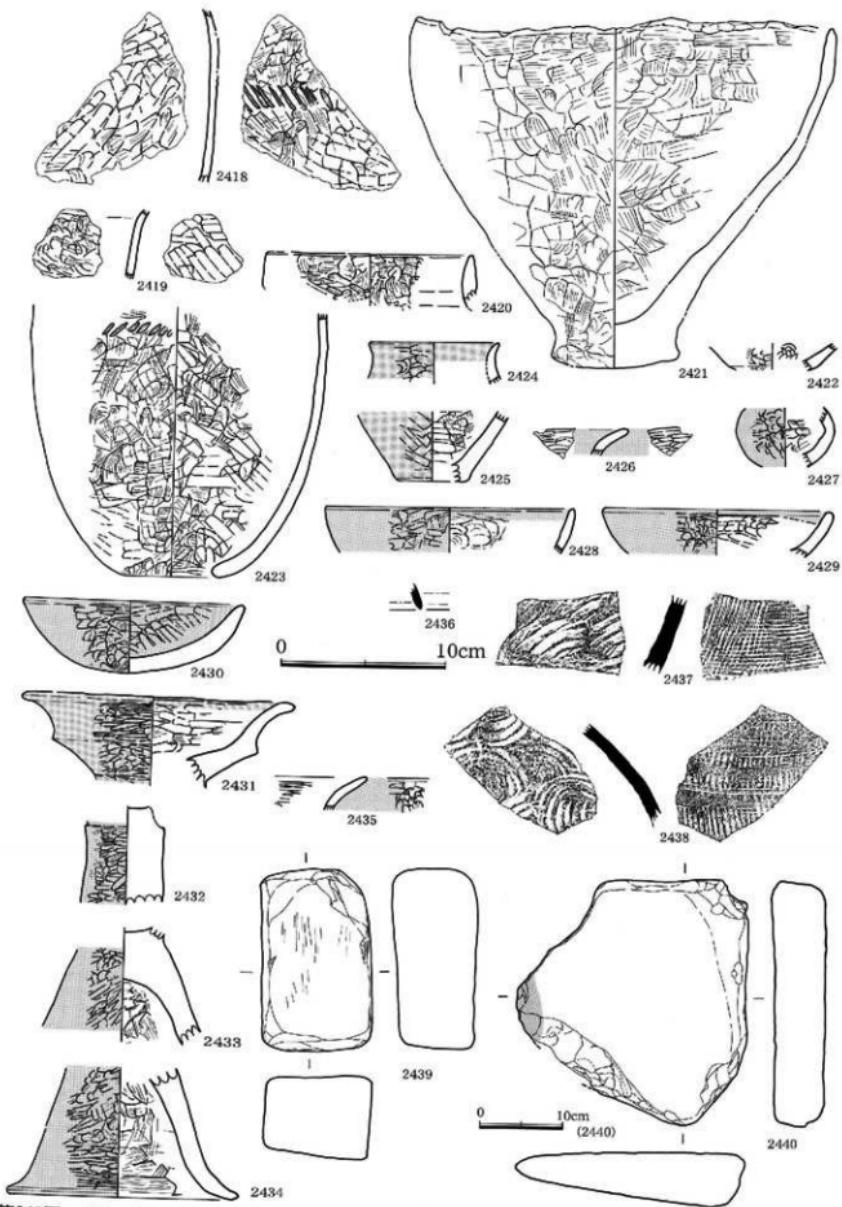
第245図 SA-102 出土遺物実測図(3), SA-103~105 出土遺物実測図(1)



第246図 S A-105 出土遺物実測図(2)



第247図 SA-105 出土遺物実測図(3), SA-106 出土遺物実測図(1)



第248図 SA-106 出土遺物実測図(2)



第249図 SA-107・108 遺構実測図

### S A-101 (第238図)

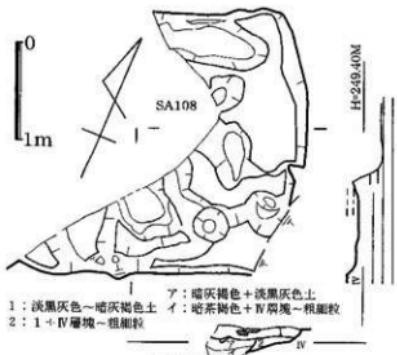
99号住居の南80cm・102号住居を切り、134・137号溝に切られた、南北4.3~4.5m・東西4.12~4.40mの略方形住居である。覆土は6~10cm遺存し、土層的には25cm程の削失が推定される。主柱穴は、直径21~30cm・深さ33~52cmの4本(P 1~4)で、中心に、口縁部を打ち欠いた2孔タイプの甕(2249)を使用した土器埋設炉がある。拡張の痕跡は残さないが、築造時は、直径25~28cm・深さ60cmの2本柱(P 5・6)であったと推定される。南側中央部には、深さ20~28cmの土坑が付随する。南東部のP 3上部には、炭化材が集中していた。

覆土から、土師器片366点、須恵器片12点、台石・すり石各1点が、2層から土師器片32点が出土しているが、図化できるものは少ない。須恵器の壊身(2256)は、105号住居出土片と接合している。7世紀初頭である。

### S A-102 (第240図)

北東部を99号住居に、南東端を101号住居に切られた、南北5.7~6.08m・東西5.92mの隅円方形を呈する住居である。覆土は4~22cm遺存するが、土層的には15~20cmの削失が推定される。主柱穴は、直径16~30cm・深さ34~43cmの4本(P 1~4)で、中央やや南側に、口縁部~胴部上半を打ち欠いた甕(2288)を使用した土器埋設炉がある。南壁沿いには、長径50cm前後・深さ12cm程の土坑が、その中央には、幅58cm・奥行き30cm・深さ18cmの突出部があり、出入口と推定される。拡張前の住居は、南北4.7m・東西4.1~4.3m程で、主柱穴は、直径32~43cm・深さ52~54cmの2本柱(P 5・6)で中央に、口縁部~胴部上半を打ち欠いた甕(2289)を使用した土器埋設炉がある。

覆土から、土師器片2156点のほか、須恵器片26点、鉄鎌1点、磨製石鎌1点等が、2層から土師器片78点、須恵器片3点等が出土している。須恵器の甕片(2238)は、105号住居出土片と接合している。6世紀後半である。



第250図 S A-109 遺構実測図

### S A-103 (第238図)

101号住居に切られた、長さ1.9m・幅1.84~2.21mの隅円方形を呈する住居である。覆土は25cm遺存するが、土層的には20cm程の削失が想定される。貼り床は厚さ4~5cmあるが、主柱穴や炉・壁溝は確認されなかった。

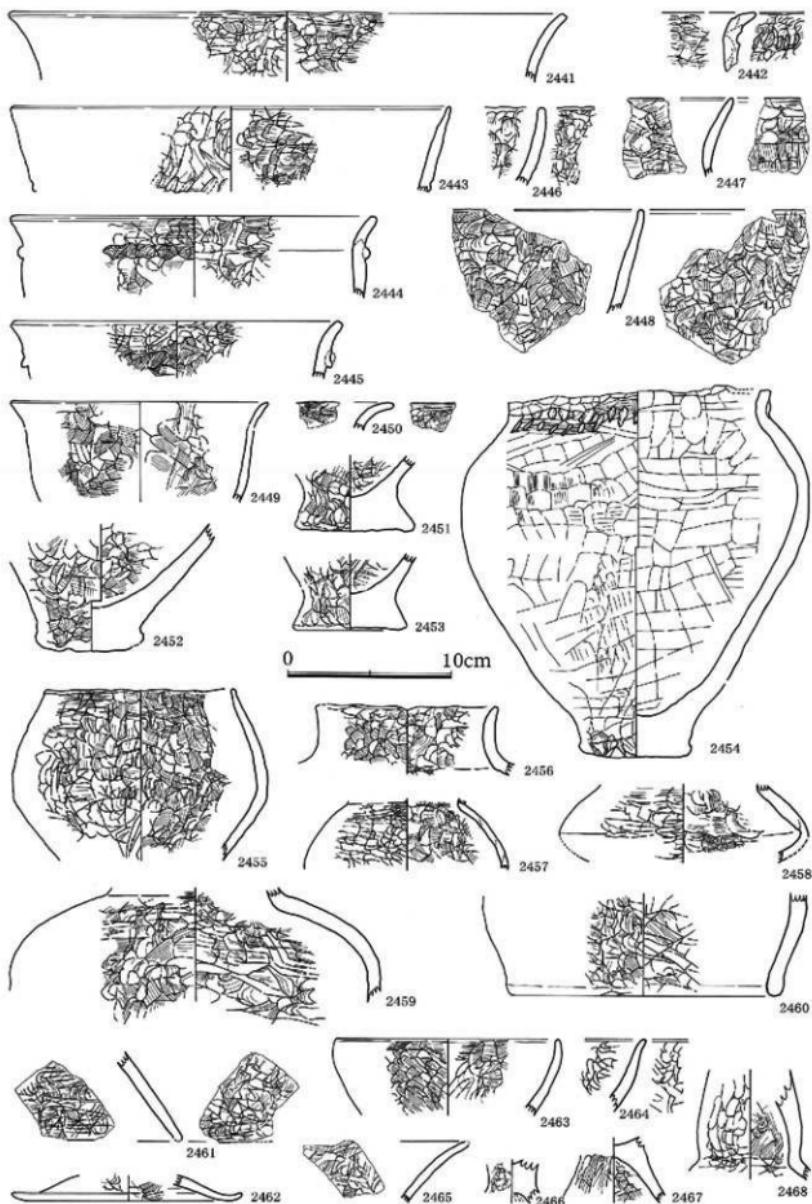
覆土から、土師器片71点が出土したが、図化できたのは5点である。6世紀前半か。

### S A-104 (第241図)

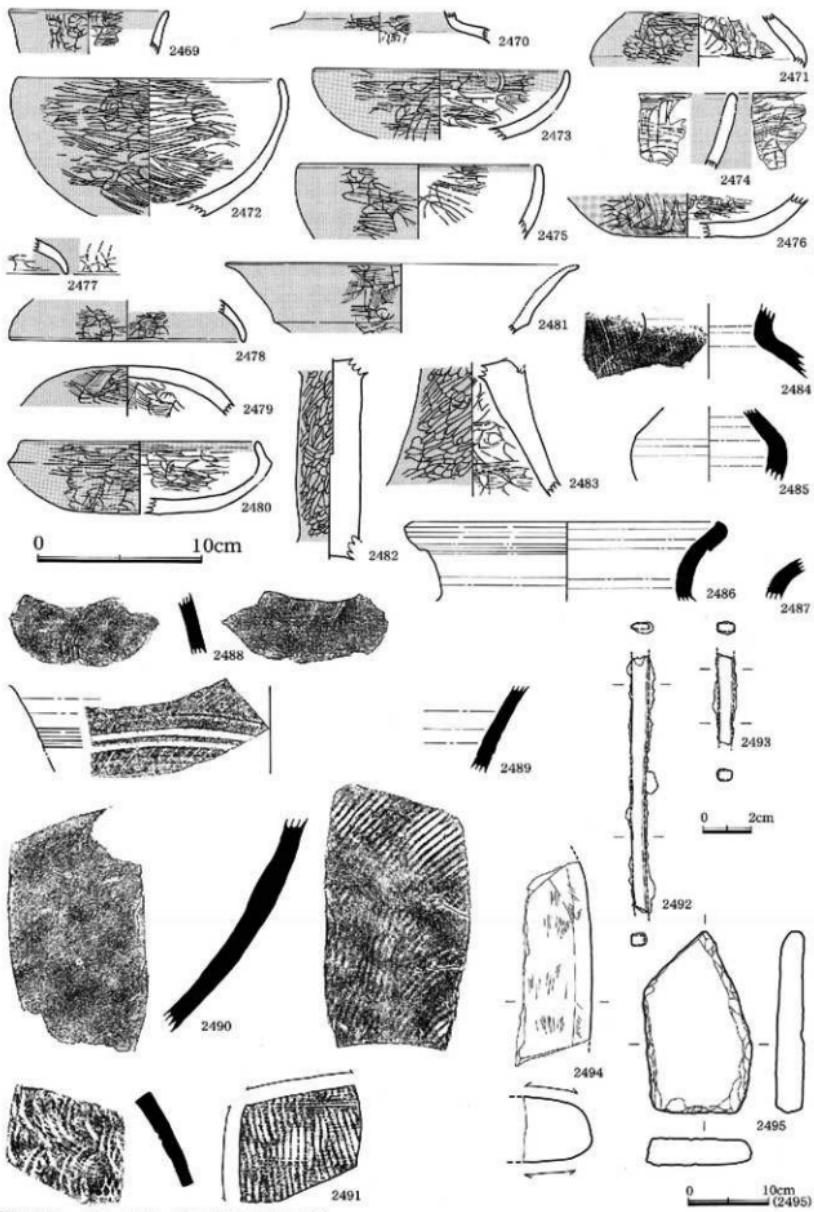
105号住居を切る、南北1.6~1.98m・東西1.7~1.9mの台形状を呈し、北と東西壁が胴張る。西



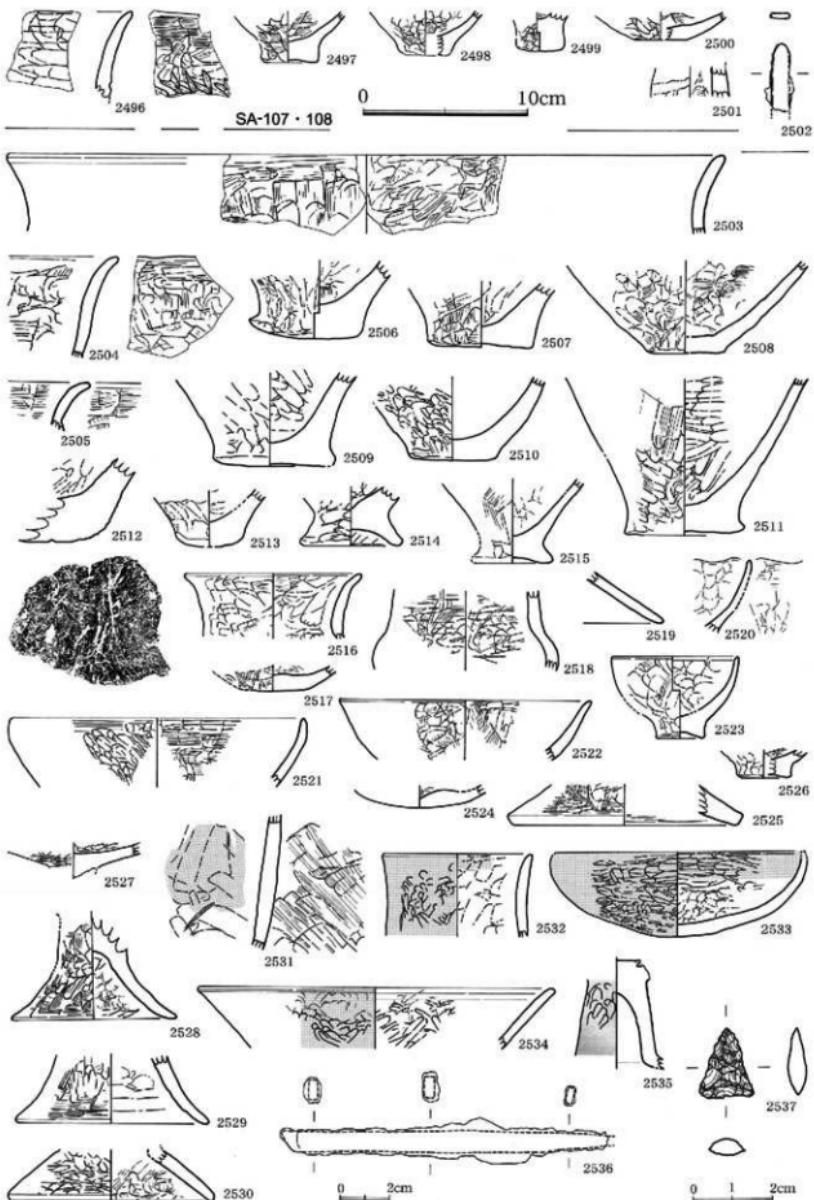
### 第251図 S A-110・111 遺構実測図



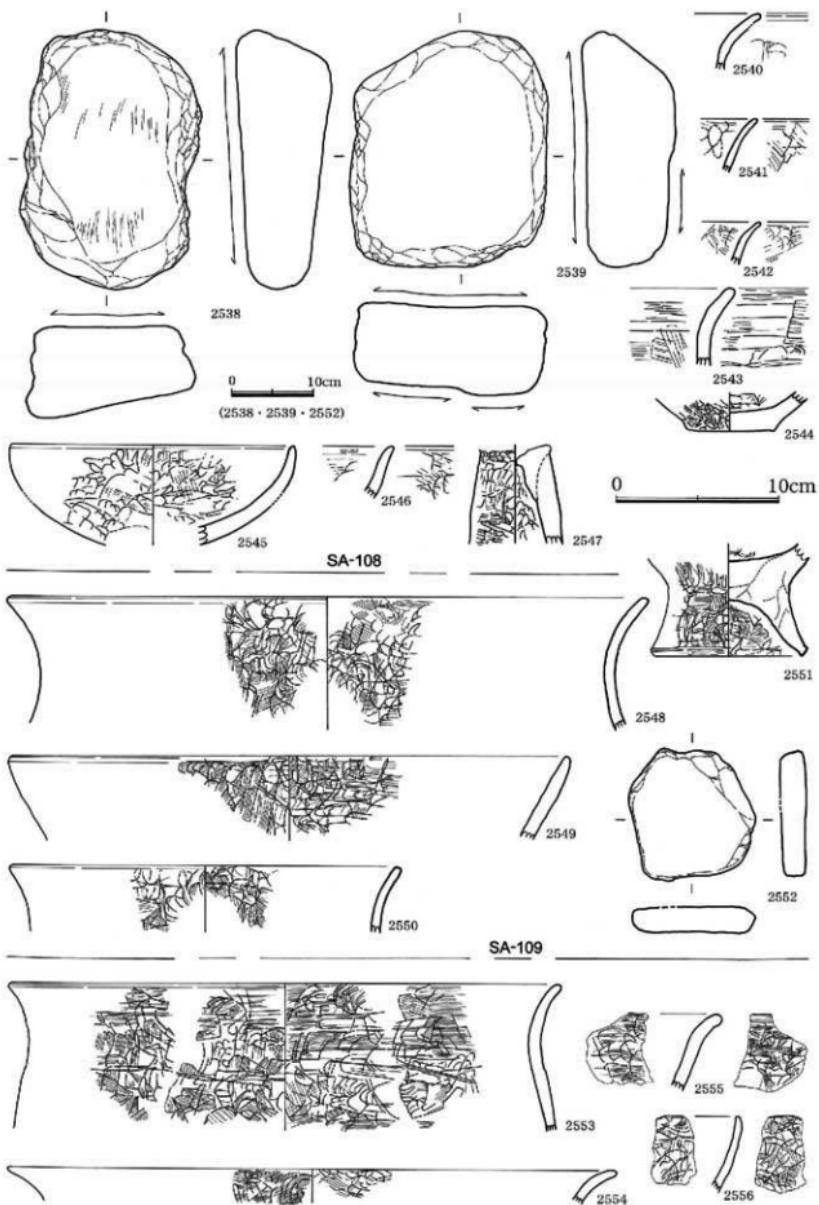
第252図 SA-107 出土遺物実測図(1) 2454はSA-108



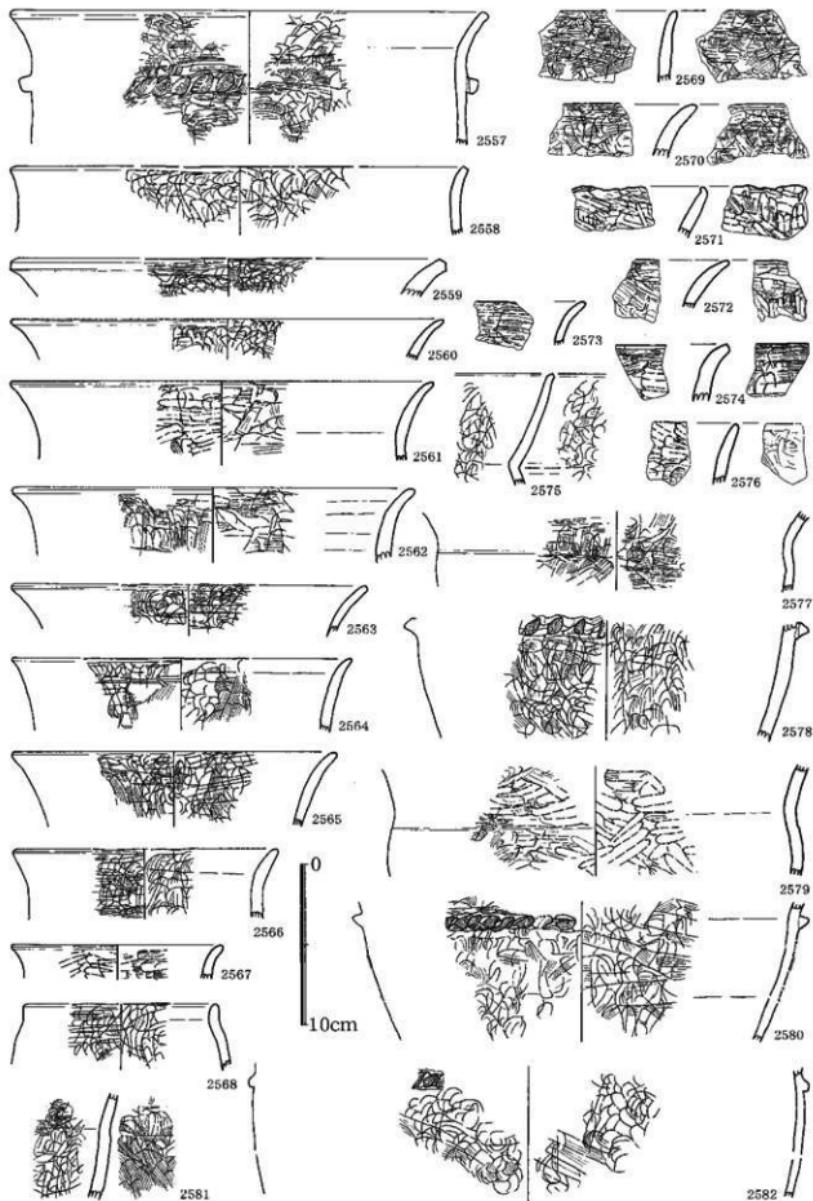
第253図 SA-107 出土遺物実測図(2)



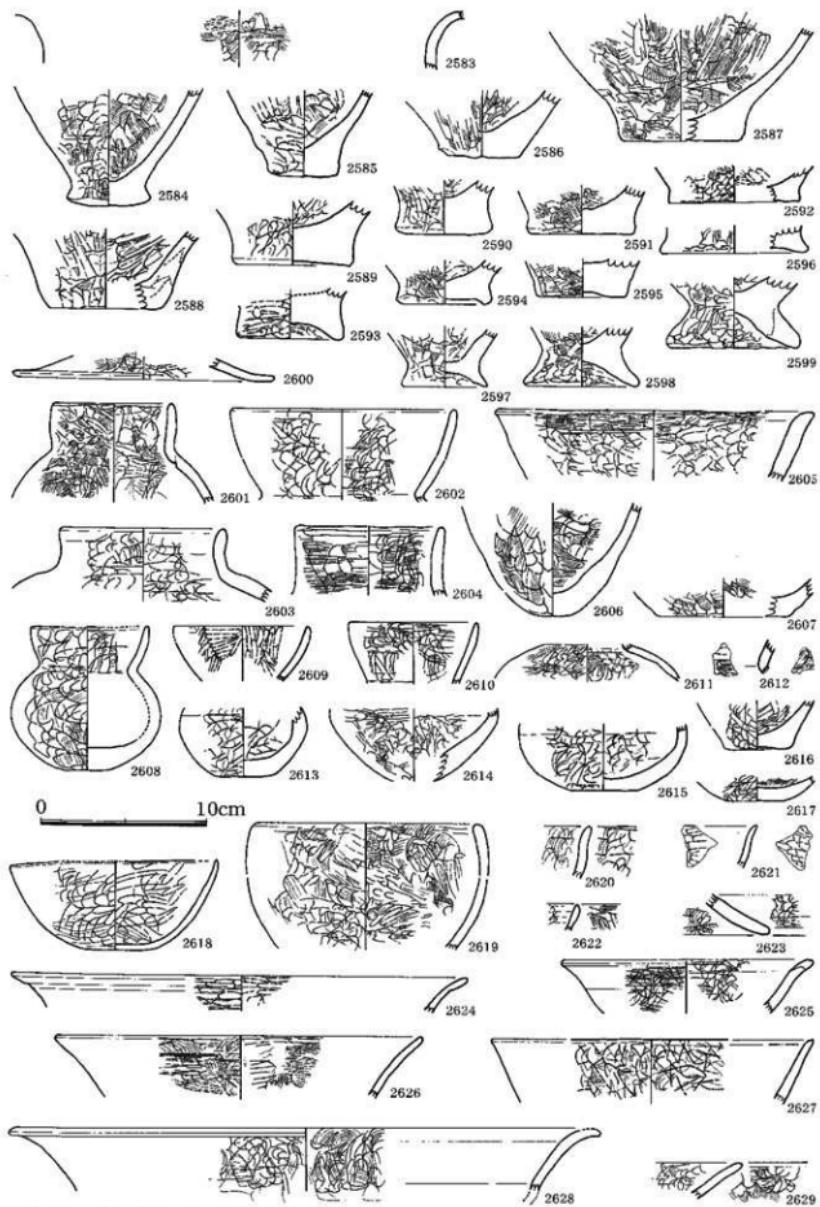
第254図 SA-107・108, 108出土遺物実測図(1)



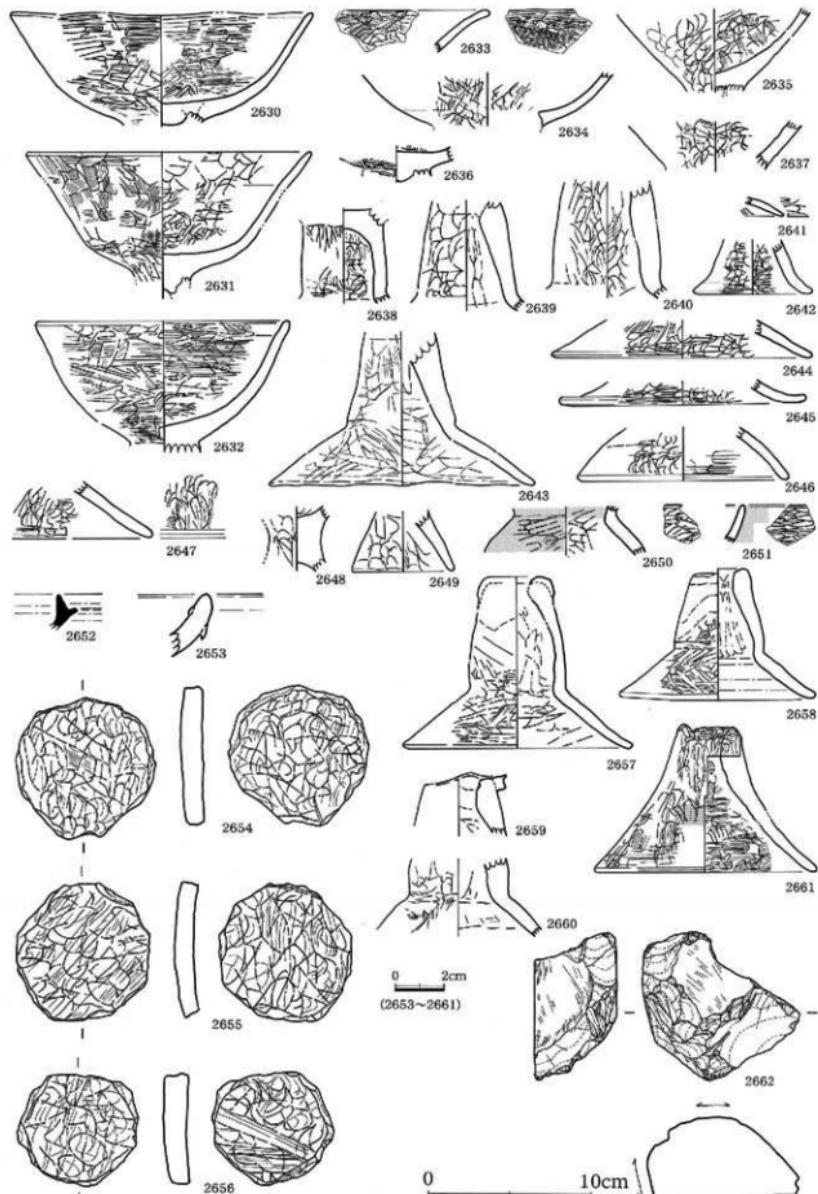
第255図 SA-108 出土遺物実測図(2), SA-109-110 出土遺物実測図(1)



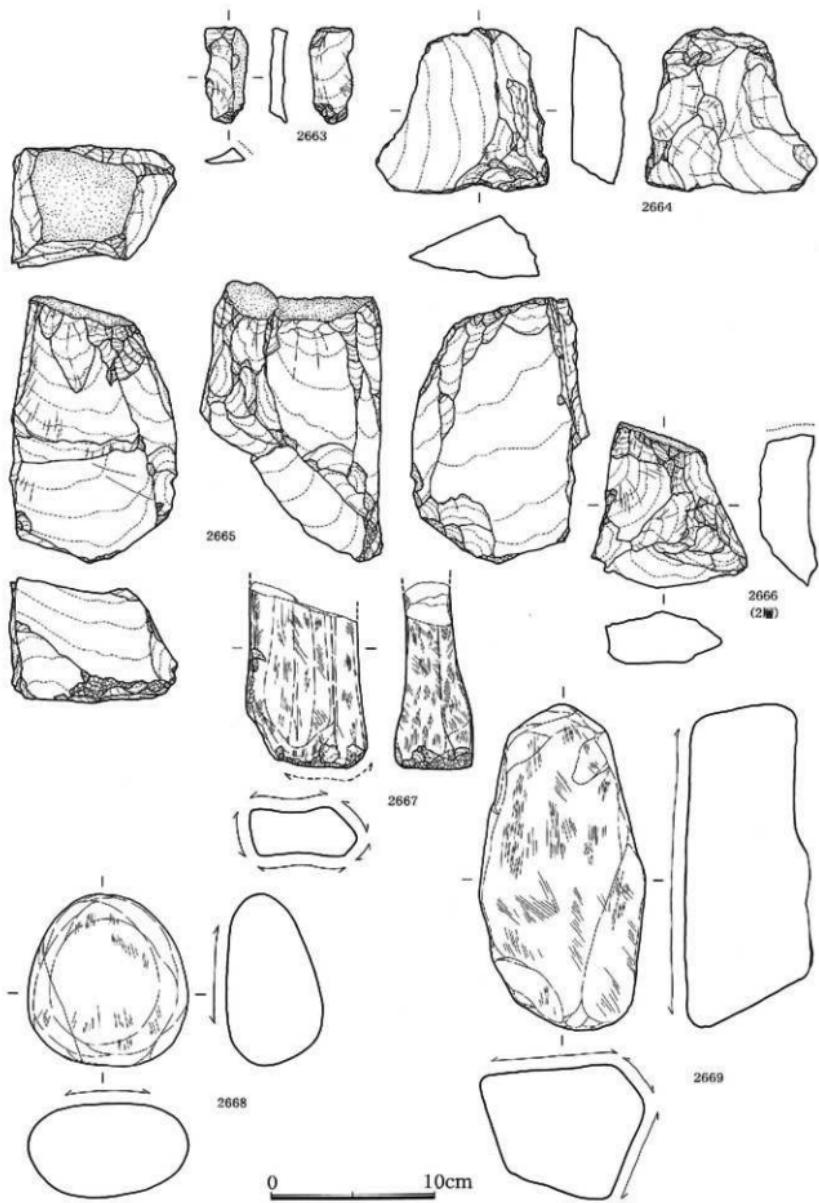
第256図 S A-110 出土遺物実測図(2)



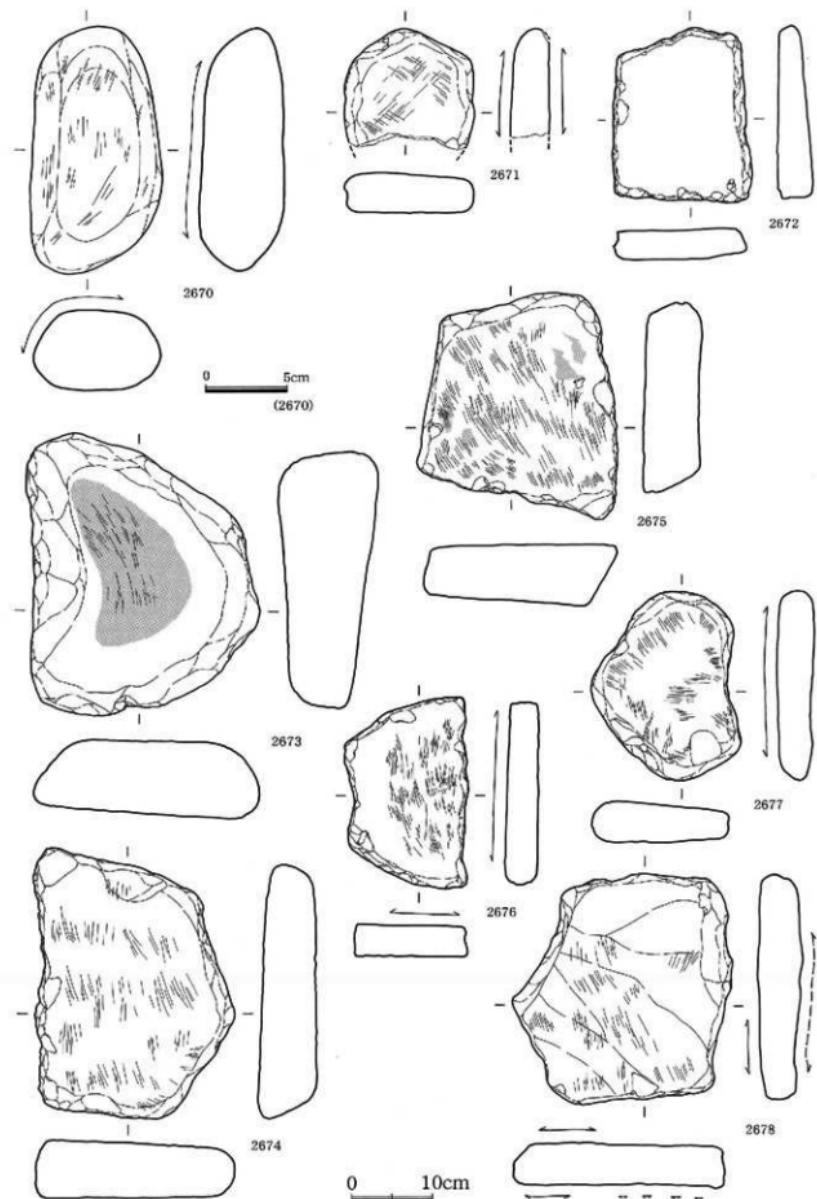
第257図 S A-110 出土遺物実測図(3)



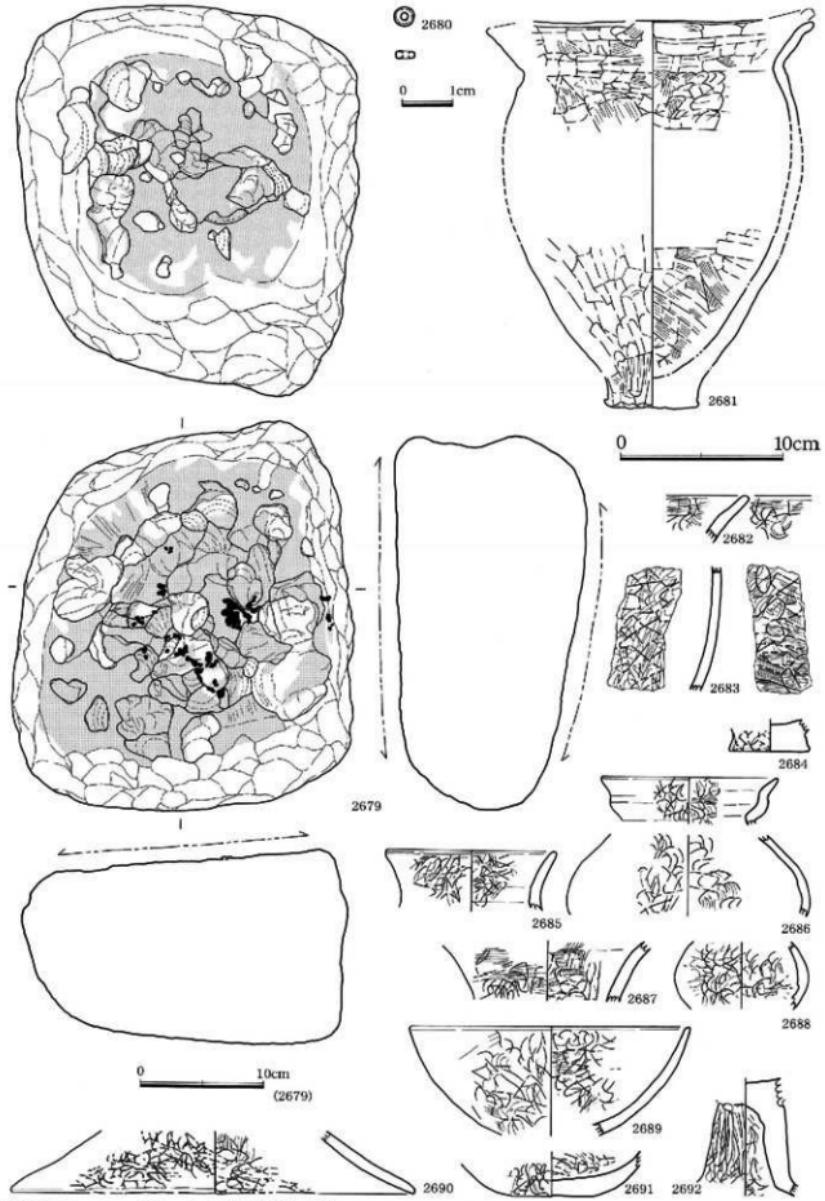
第258図 SA-110 出土遺物実測図(4)



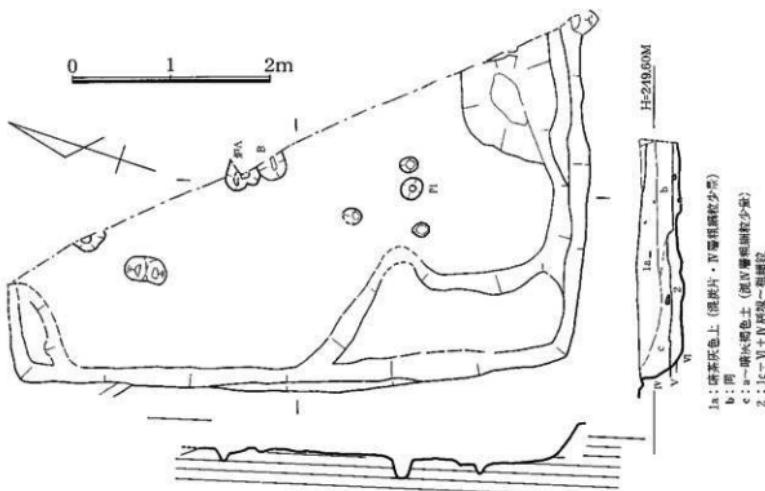
第259図 SA-110 出土遺物実測図(5)



第260図 S A-110 出土遺物実測図(6)



第261図 S A-110 出土遺物実測図(7) 2673~2684は2層出土



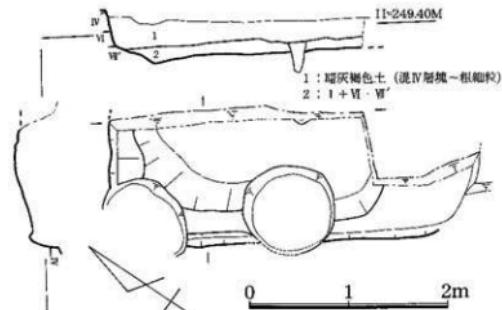
第262図 SA-112 遺構実測図

壁中央には、幅40~60cm・長さ33cmの突出部が付設され、スロープになっている。覆土は20cm程で、15cm程の削失が推定される。主柱穴と炉は確認されていないが、僅かな貼り床がみられる。

覆土から、土師器片345点のほか、須恵器片1点等が出土したが、図化できたのは僅かである。  
6世紀後半か。

#### SA-105 (第241図)

104号住居と129号溝に切られ、102号住居と60cm隔てた位置にある、南北5.0~5.3m・東西5.1~5.28mの隅円方形を呈する住居である。覆土は8~27cm遺存し、土層的には5~10cmの削失が推定される。中央炉は、掘り込み炉(オ層)→掘り込み炉(イーエ層)→土器埋設炉の構築順でありpitも6基あることから、3次期(拡張2回)を想定できる。構築初期は、直径19~23cm・深さ50~52cmの2本柱(P5・6)で、柱間は1.52m、掘り込み炉Aを伴う。2次は、深さ56~74cmの2本柱(P3・4)で、柱間は1.50m、掘り込み炉Bを伴う。3次は、直径27cm・深さ56~60cmの2本柱(P1・2)で、柱間は2.38m、口縁部と底部を打ち欠いた甕(2370)を使用した土器埋設炉を伴う。貼り床は、凹地を埋める程度である。



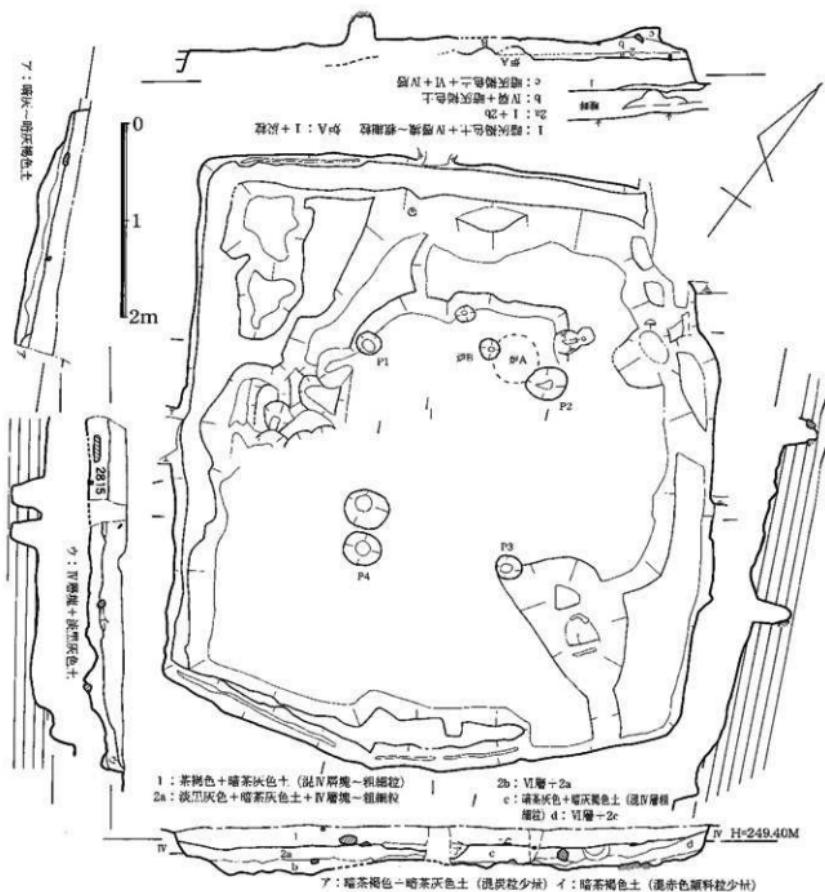
第263図 SA-113 遺構実測図

覆土から、土師器片1993点のほか、須恵器片40点、鐵鐵4点等が、2層から土師器片5点が出土している。6世紀末～7世紀初頭である。

#### S A-106 (第242図)

92号住居と60cm、102号住居と70cm隔て、129号溝に切られた住居である。東西2.82～3.07m・南北2.50～2.60mの隅円長方形を呈する住居である。覆土は5～20cm遺存するが、土層的には10～15cm程の削失が推定される。主柱穴は無く、壁溝も明瞭ではない。中央には、口唇部を打ち欠いた壺(2421)を使用した土器埋設炉がある。

覆土から、土師器片745点のほか、須恵器片6点、砥石・台石各1点が出土している。6世紀後



第264図 S A-114 遺構実測図 (Ⅲ・Ⅳ区検出図合成)

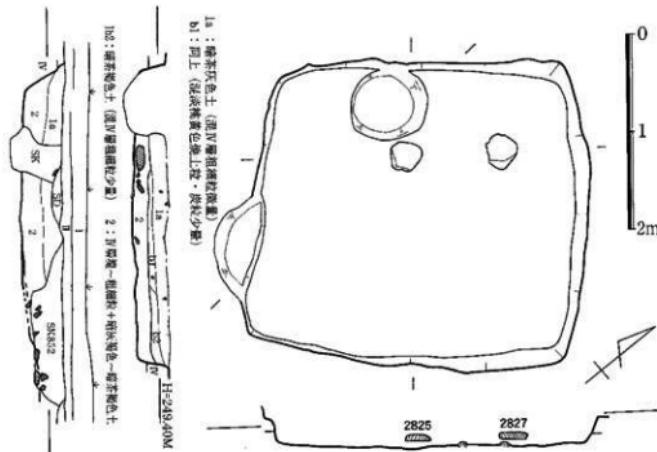
半である。

#### S A-107 (第249図)

140号溝に切られ、108号住居を切る住居であるが、面での切り合い検出は困難であった。東西4.36~4.48m・南北4.1mの方形住居である。覆土は32~50cm遺存するが、土層的には10cm程の削失が推定される。

主柱穴は不明で、南東隅に掘り込み炉があった。

覆土から、土師器片2183点のほか、須恵器片18点、鉄器片2点等が出土しているが、108号住居の土器も相当混入して



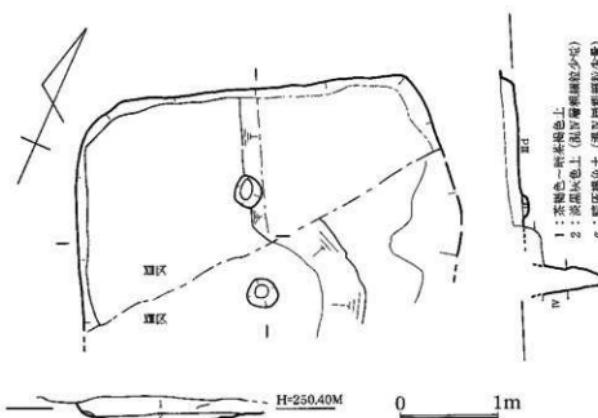
第265図 S A-115 遺構実測図

いる。2491は、須恵器の壺片を方形に加工・両面調整している器具である。6世紀後半である。

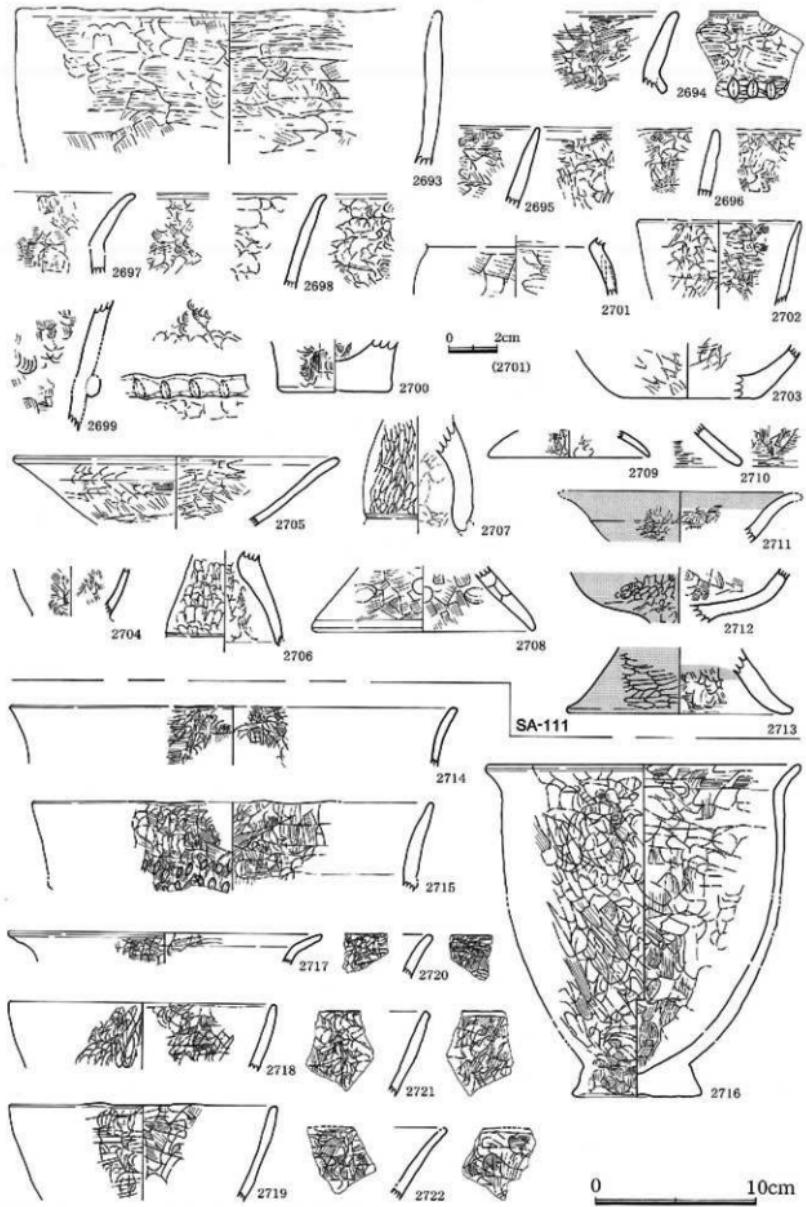
#### S A-108 (第249図)

長さ6.2~6.3m・幅5.64~5.80mの方形住居である。覆土は32~42cm遺存し、土層的には5~10cmの削失が推定される。主柱穴は、直径26~38cm・深さ40~56cmの4本(P1~4)で、中央やや南に、口唇~口縁部を打ち欠いた壺(2454)を使用した土器埋設炉がある。

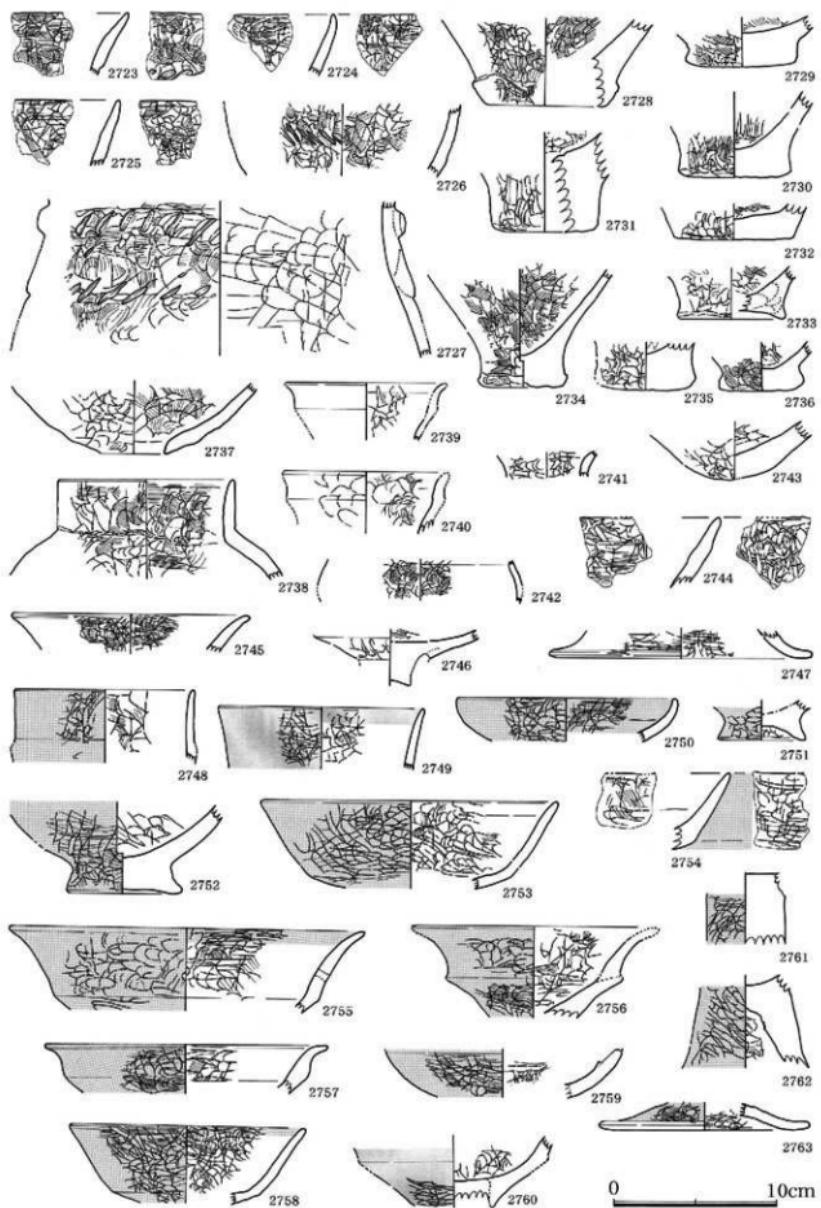
覆土から、土師器片421点のほか、須恵器片3点、鉄器1点、石2点等が、2層



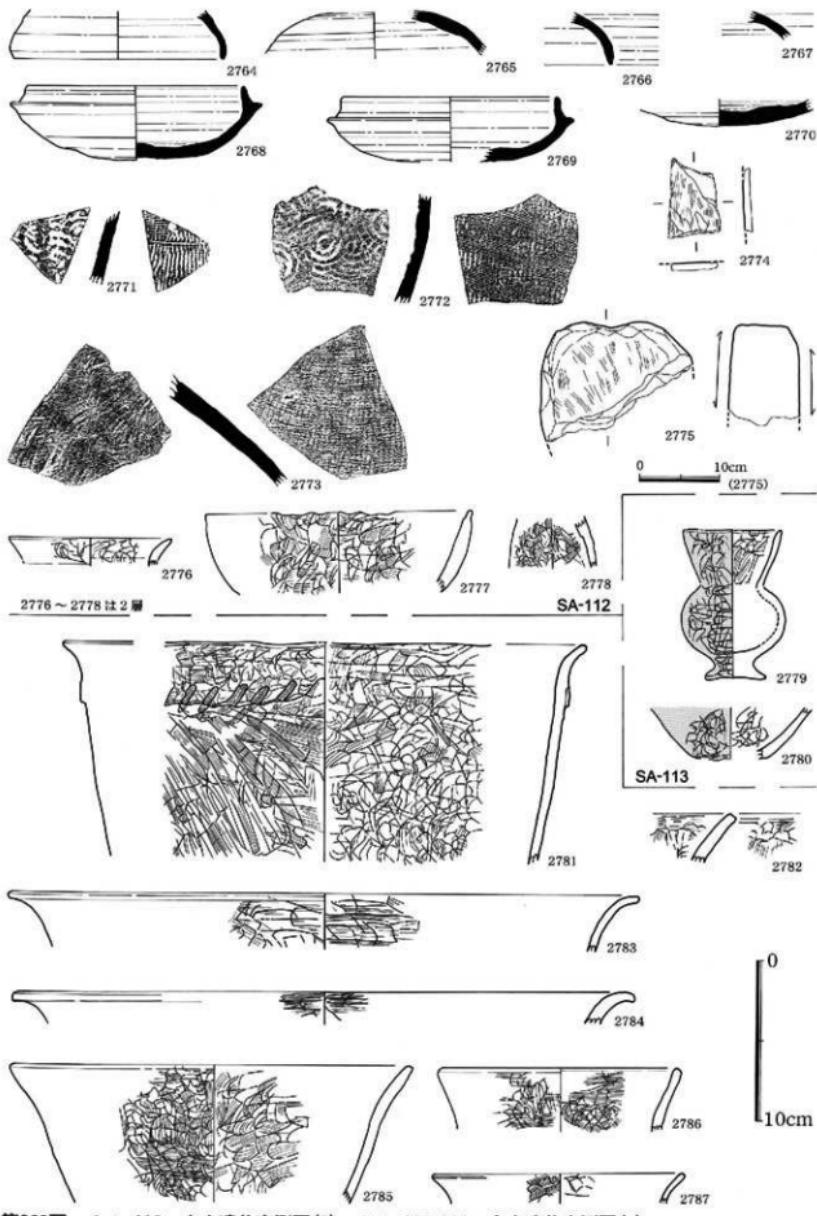
第266図 S A-116 遺構実測図 (II・III区検出図合成)



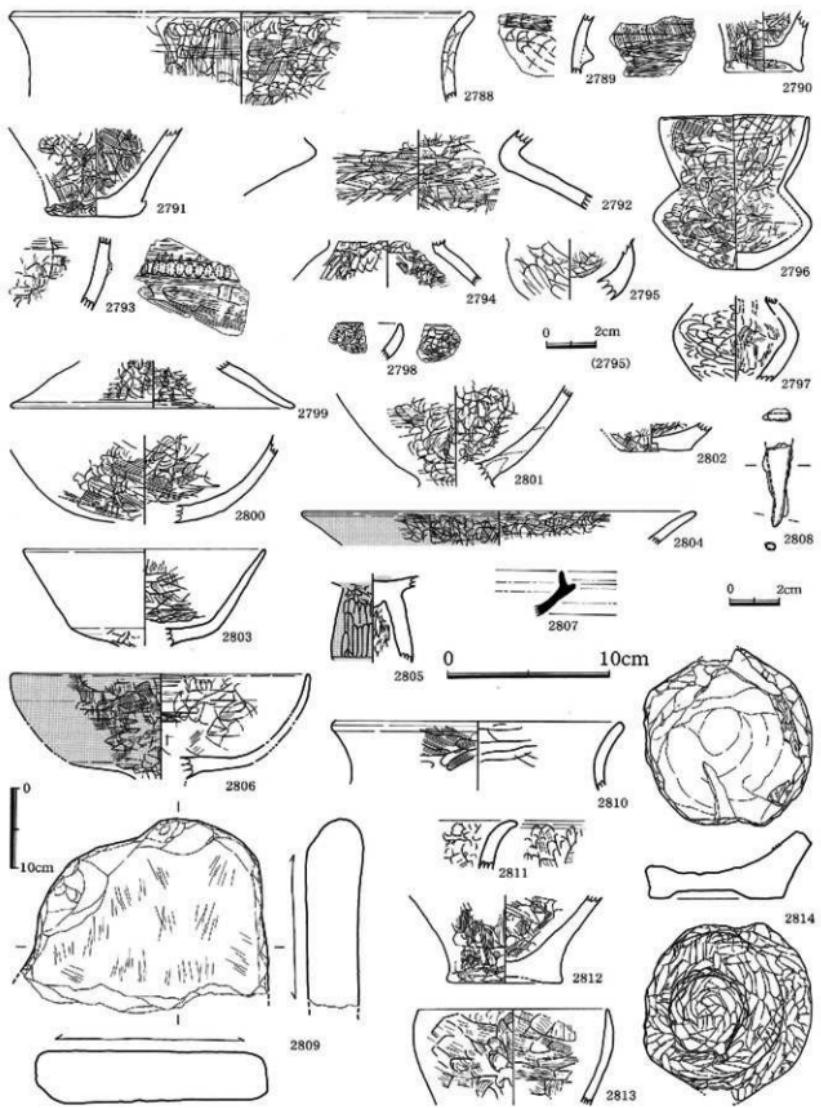
第267図 SA-111-112 出土遺物実測図(1)



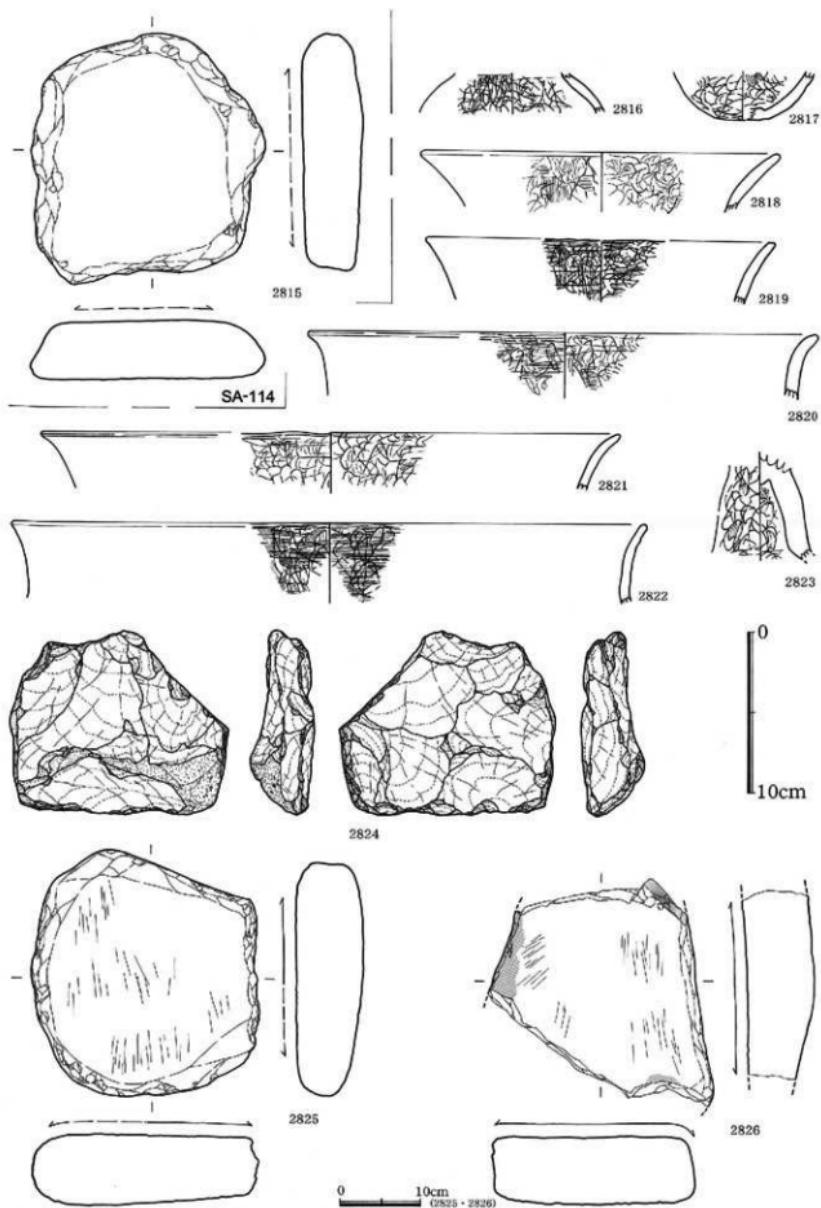
第268図 S A-112 出土遺物実測図(2)



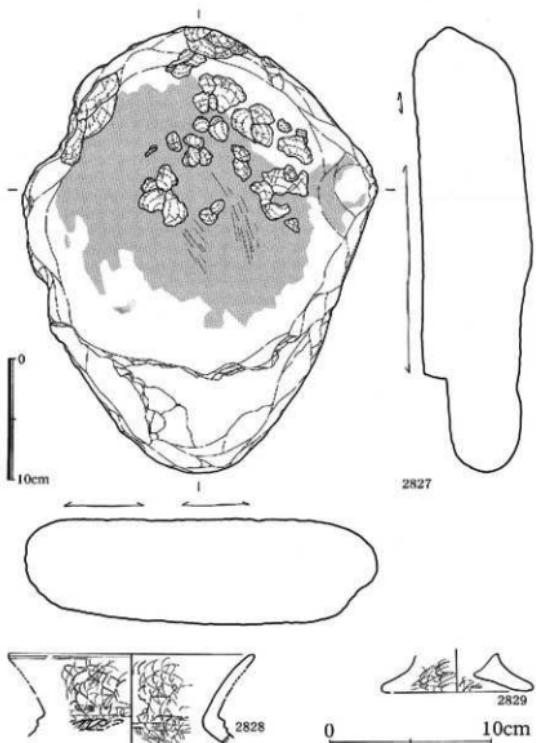
第269図 SA-112 出土遺物実測図(3), SA-113・114 出土遺物実測図(1)



第270図 S A-114 出土遺物実測図(2) 2810~2814は2層



第271図 SA-114 出土遺物実測図(3), SA-115 出土遺物実測図(1)



第272図 S A-115 出土遺物実測図(2)

存し、土層的には15~20cmの削失が推定される。主柱穴は、直径30~38cm・深さ35~44cmの4本(P 1~4)で、掘形と相似形の台形に配置される。深さ20~30cmのpit (P 5~7)は、初期の主柱穴であった可能性がある。明瞭な掘り込みのある炉は確認できなかったが、南北断面で、炭混じり層(中央のイ層)と焼土混じりの掘り込み(ア層)が確認できた。中央部と壁沿いは、幅1m前後で掘り込んで土を搅拌し、貼り床にしている。中軸は、N10°Wである。

覆土から、土師器片2276点のほか、須恵器片2点、土器片加工円盤3点、高坏転用轆の羽口5点(2657~2660)、埴堀片1点(2653)、ガラス小玉1点、砥石3点、台石8点、鉄床石1点、石英系の石核と剥片3点(2663~2665)等が、2層から土師器片180点、石英系の石核1点(2666)が出土している。須恵器の坏身(2652)は新しい要素であり、混入の可能性が高い。埴堀片の内面には付着物があり、蛍光X線分析の結果、鉄が主成分であることが分かった(付篇参照)。台石と砥石の殆どは西側中央付近~南西部にかけて出土し、特に2679の石は、被熱・彈け・鍛造剥片の付着が顕著な鉄床石であり、被熱している2673や、角も使用しているその他の台石も、殆どが小鍛冶に

から土師器片128点が出土している。5世紀後半~6世紀前半で、須恵器は混入と思われる。

#### S A-109 (第250図)

108号住居と840号土坑に切られた、長さ3m程・幅2.63~2.67mの隅円長方形を呈する住居である。覆土は8~13cm遺存し、土層的には5~10cmの削失が推定される。主柱穴や壁溝・炉は検出されていないが、貼り床があることから住居と断定できる。

覆土から、土師器片47点と台石1点が出土しているが、固化できたのは僅かである。

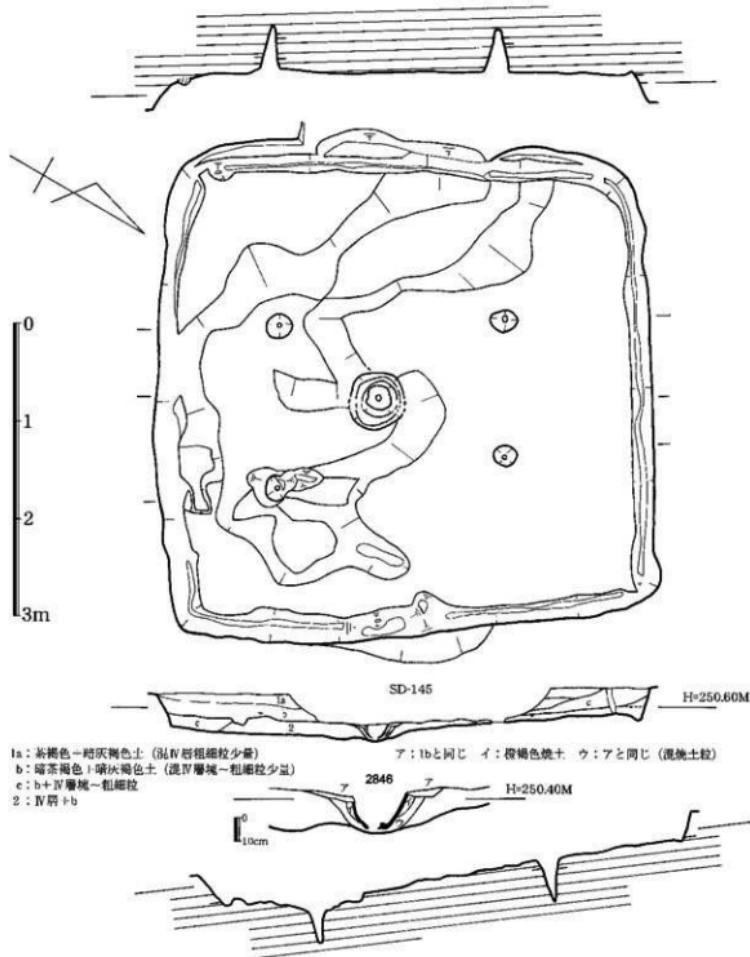
#### S A-110 (第251図)

111号住居に切られ、東西6.2~8.25m・南北7.6~8.19mの台形を呈する大型住居である。覆土は20~32cm遺

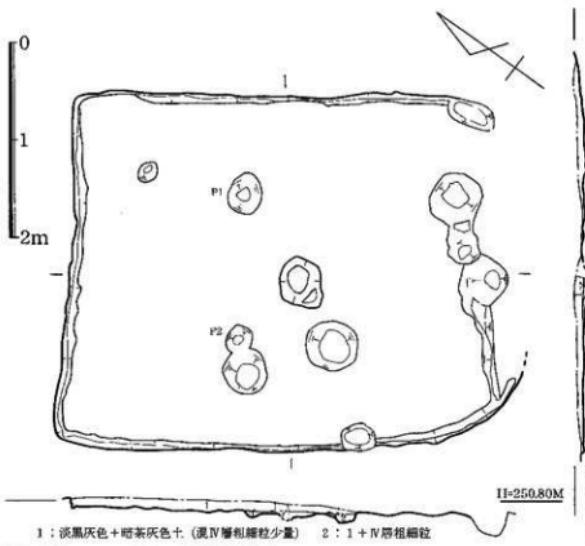
係わる鉄床石である可能性が高い。石英系石材の用途は明確ではないが、細粒に碎いて土器を作る粘土の混和材にしたのではないかと推定している。5世紀後半の工房である。

#### S A-111 (第251図)

110号住居を切る、長さ3.2m・幅2.96mの長方形住居であり、新旧は断面で確認した。覆土は14~21cm遺存し、土層的には5cm程の削失と推定される。主柱穴や炉は不明であるが、8~22cmの貼



第273図 S A-117 遺構実測図



第274図 S A-118 遺構実測図

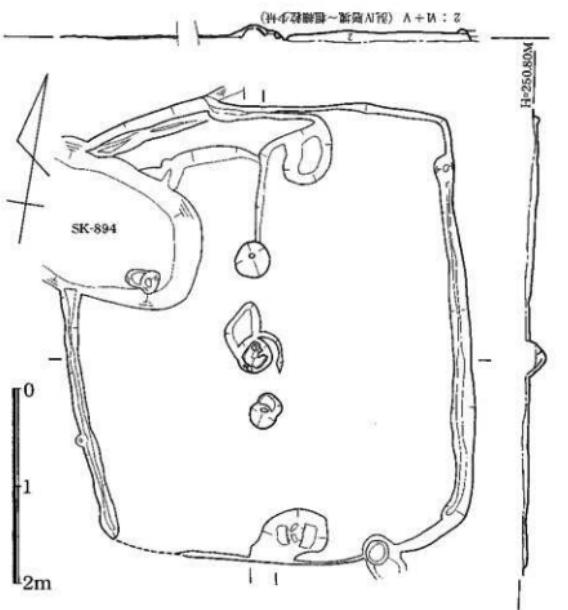
り床があることから、  
住居と断定できる。

覆土から、土器器  
片161点が、2層から  
38点が出土している。

5世紀後半か。

#### S A-112 (第262図)

97号住居の4.4m南  
に位置し、半分程度を  
道路の擁壁基礎工事  
によって削失してい  
る。残存する南北の長  
さは5.8mで、掘り込  
み炉がほぼ中央にあ  
るとすれば幅4.6m程  
の長方形住居に復元



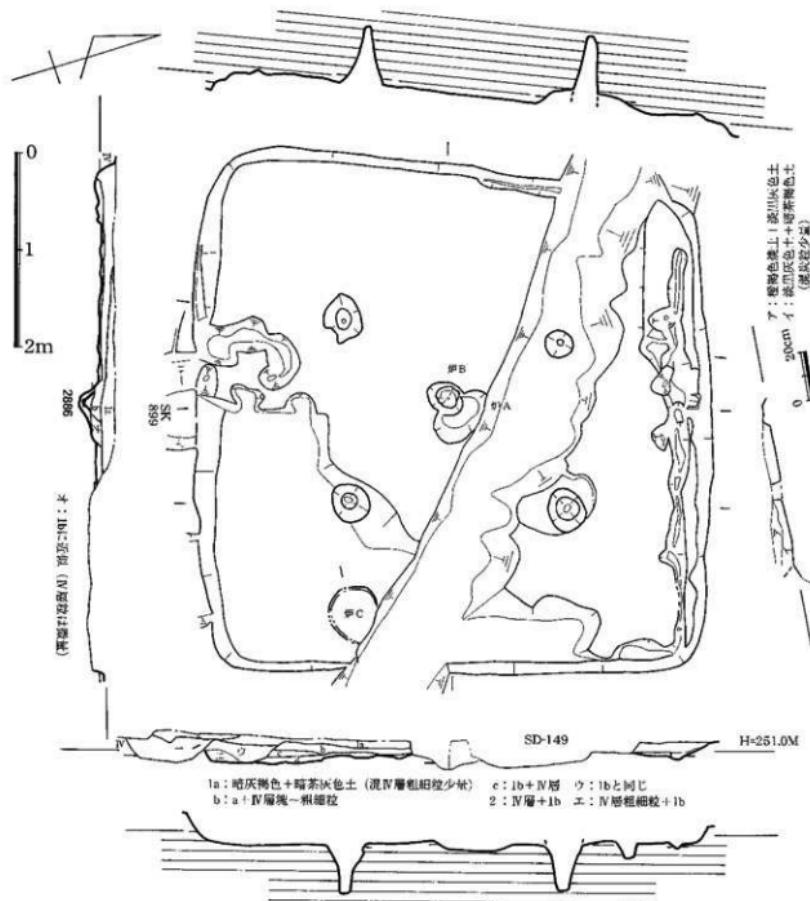
第275図 S A-119 遺構実測図

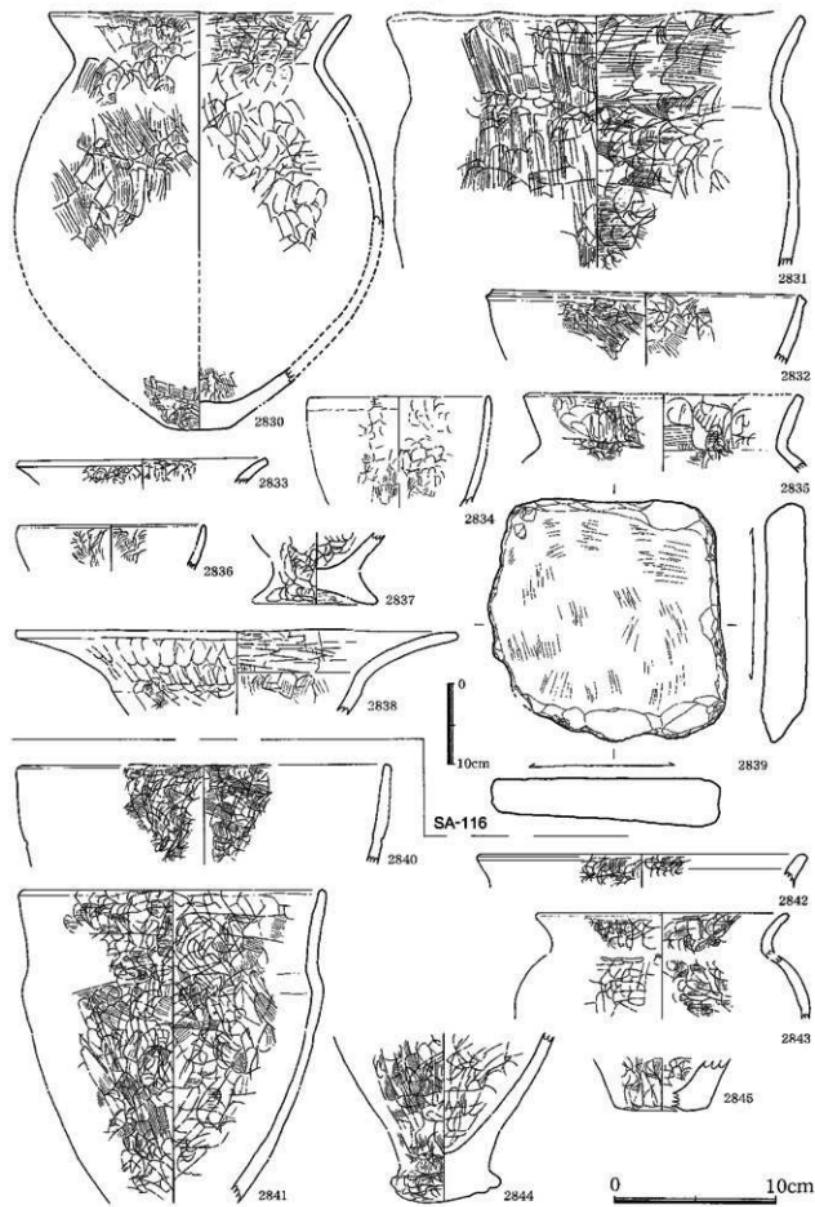
される。覆土は28~34cm遺存し、土層的には5~10cmの削失が推定される。内区は6cm低くなり、2層底面も段が付いているので当初からの設計であったと推定される。主柱穴は不明瞭であるが、直径20×24cm・深さ20cmの小pit（P1）が南もしくは南西の柱穴として想定される。掘り込み炉は2次期あり、形は不整形である。

覆土から、土師器片1579点、須恵器片26点等が、2層から土師器片52点と須恵器片1点が出土している。6世紀後半である。

S A-113 (第263図)

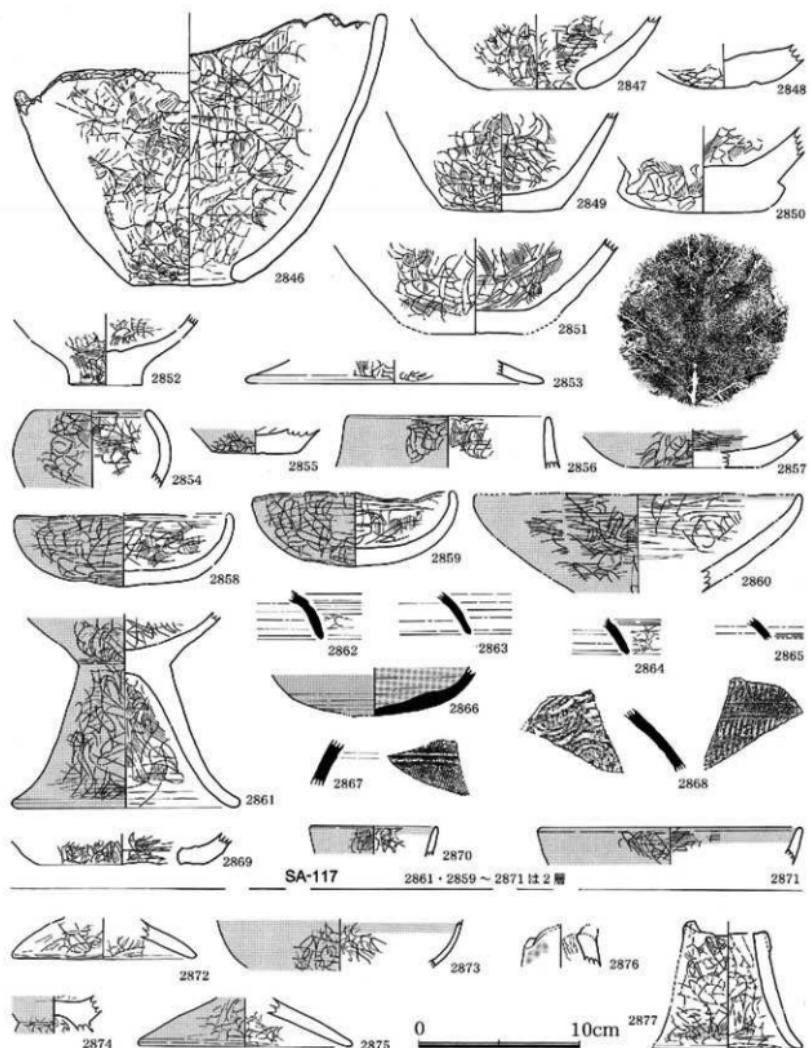
XII区の北東端、114号住居を切り、近世座棺墓2基と道路基礎工事によって3割程度の遺存であ



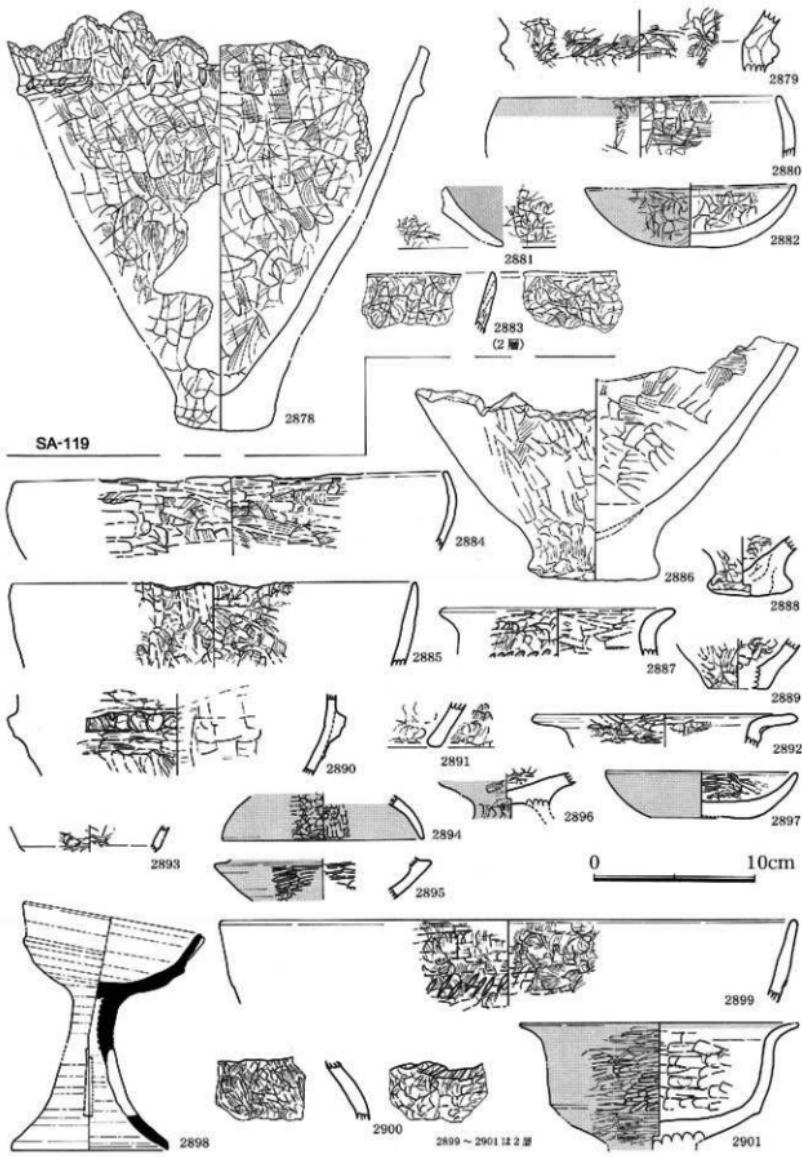


第277図 SA-116-117 出土遺物実測図(1)

る。南東壁は一部が遺存し、幅3.74mを測る。覆土は20~34cm遺存し、土層的には15~20cmの削失が推定される。貼り床は10~16cm施され、その上面から穿たれた小pit 1基（直径16cm・深さ30cm）を検出し、位置的には2本柱と推定される。炉は未検出である。覆土から、土師器片25点と、丹塗りの台付壺の完形品（2779）が南西隅から出土している。5世紀前半か。



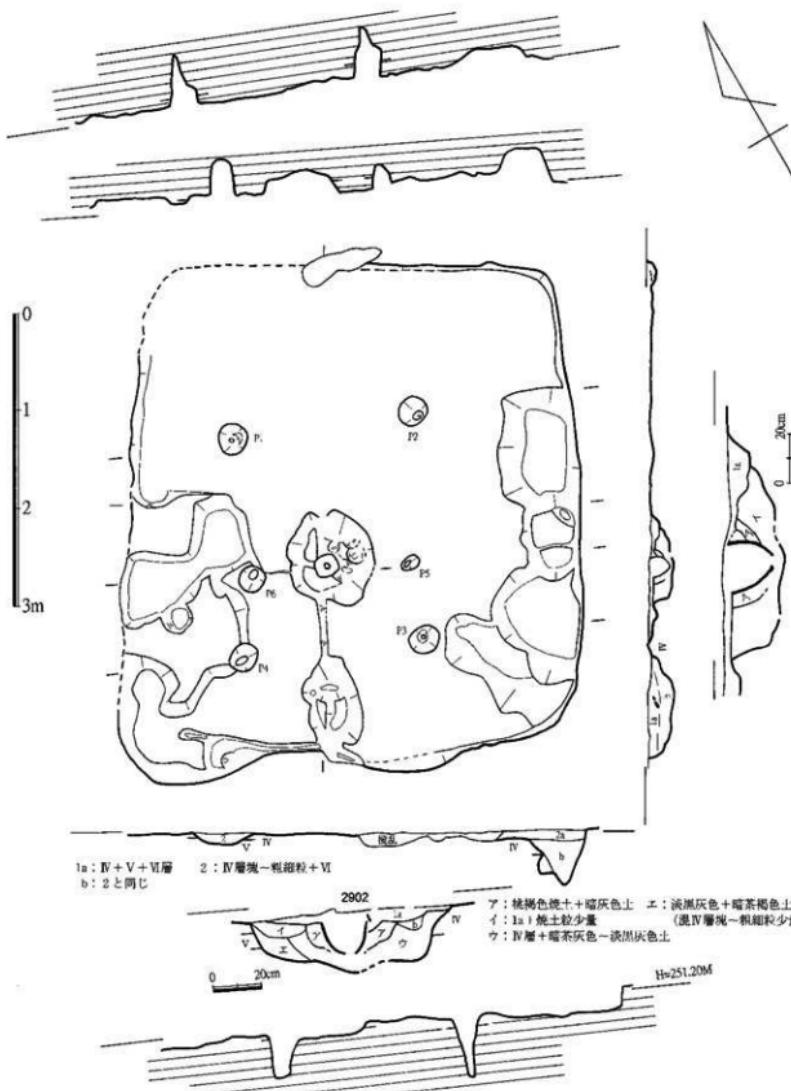
第278図 S A-117 出土遺物実測図(2), S A-118 出土遺物実測図



第279図 SA-119-120 出土遺物実測図

S A-114 (第264図)

III区とIV区で半分ずつの調査になり、113号住居と854号土坑に切られた、長さ5.4～6.24m・幅



第280図 S A-121 遺構実測図